

慶応3年(1867)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
慶應三年自五月  
至七月

## 目錄

- 伊地知壯之丞ヨリ大久保一藏へ書翰
- 手扣
- 給地高売買ニ就テ布達
- 久光公御上京ニ就キ御慰勞
- 四藩連署建言
- 四藩連署建言
- 雇教師赤松小三郎建言
- 横井平四郎書翰

吉井幸輔書翰

西郷隆盛ヨリ大久保一藏へ書翰 藩政大改革ノ概略

小松帶刀ヨリ大久保一藏へ書翰

黒田了介ヨリ同姓嘉右衛門へ大坂城襲撃セムト云々書翰

幕府ヨリ薩・土・宇和島等ノ藩々へ達書

中條左衛門督ヨリ薩藩へ差出ノ書並答書

石室秘稿抄

伊藤俊介ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

西郷吉之助ヨリ後藤象二郎へ書翰

市來廣貫日記抄

久光御上京御慰勞云々布告

島津主殿上京ニ就テ諸説

〔御手許金ヲ海陸軍方へ差出ス達書〕

洋行書生建言

与力・御小人等支配替達書

〔吉田清成等ノ建白書〕

〔職制改メ〕

三島彌兵衛開墾ノ事実

〔京説云々〕

兵庫開港ニ就テ種々ノ説

久光公御帰国

本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

五藩御届書

洋風流行ニ就テ諭達

久光公御帰国ニ就テノ風説

〔上京ニ就テ乗船計畫書〕

對州藩多田捕縛セラレ

現今時藩ノ時情ニ就テ布達

岡藩士山縣小太郎小松帶刀ニ就テ意見書

四二〇 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

包紙

慶應三年五月十四日

京都

大久保一蔵様

〔利通〕

伊地知壯之丞

鹿兒島

〔直筆〕

尚々時分柄無御痛様御自愛專要奉存候、別紙ニ通午

御煩勞御届被下候様奉願上候、以上、

一札呈研右候、乍恐 中将様弥御機嫌克被遊御滯 京

候半、於此御地 太守様益御壮栄被遊御座、御互二大

慶之至奉存候、御分袖已来無御痛御清適御座候半奉慶

寿候、次ニ小子去月十八日浪華川口出船、長崎へ十日

程滞留、去ル六日帰着、引続致運動候間、乍余事御降

慮可被下候、御地之形勢御起合何様之御義ニ候半ト、

日夜奉遙察事ニ御座候、今比ハ内外御高配御周旋ニ候

半、致承知居候、筆墨於長崎為致探索候得共上品無之、

漸此品致入手候、御心ニ叶候程無覺東候得共、寸情迄

ニ致進上候、偕又滞崎中米人ロビネツトト申者へ緩々

取合候処、各国ミニストル等於大坂一橋へ面会之一件

致咄候、其趣ハ新將軍ハ別テ評判宜ク、智略多ク、沈

勇ニシテ決断早く、談判事モ急速相連、大ニ望ニ叶候

趣ト申事ニ候、其折之通弁ハ林泉三ニテ、泉三考ニテ

新將軍ハ甚謔詐多ク、人心大ニ離レ居候人ニテ、左様

有之筈ニ無之ト申候処、拙者ハ実否ハ不存候、此度面

会之人々皆左様申居候ヲ、咄候迄ト申事ニ御座候、引

続之咄ニ、一橋公ミニストル面会之折一橋申候ニ、只

今大名之内外国へ軍艦・武器等致注文候国段々有之、

何之為ニ致要意候義不相分候、六十余州ハ 朝廷ヨリ

御願申上候儀ニテ、拙者ニ致手向候者ハ無之筈、本ヨ

四二二 手扣

り以来ハ此方ヨリ大名へ兵ヲ向候義ハ不致考ニ候、先  
 方ヨリ差向候義ニ候ハ、甘シテ受答十分之決戦イ  
 タシ、首尾相取心得ニ候ト咄候処、諸ミニストル共  
 完尔トイタシ居ル処、一橋席ヲ改メ、拙者先程ヨリ咄  
 合候義共、都テ心中ヨリ致吐露候訳ニテ、一事モ空言  
 無之、左様等閑ニ被考候テハ、別テ込入候ト申候処、  
 各異ヨリ等閑ニ承居候義ニハ無之、一々御尤ト致返答  
 候由、此等之事モ沈勇之故ト其折出会之人申居候ト咄  
 イタシ候、此ロビネツト申ハ、此内ヨリノ知人ニテ、  
 江夏・仁禮米行モ此人へ頼込、此者当分引受親切ニ致  
 世話、随分実底之者ニ御座候、最早御聞及相成候義モ  
 難計候得共、承及候俟御賢考之一端ニモ可相成ト申上  
 候、乍末筆御宿モ至極御安靜之由、御安堵可被成候、  
 右ハ時氣御見舞旁々如此御座候、頓首可祝、

卯五月十四日

伊地知壮之丞

大久保一蔵様

左右

此度容堂〔山内豊信〕義、上京之 御沙汰奉蒙、過日登京仕、乍不  
 及愚存之筋尽力仕居候処、当月九日頃ヨリ持疾発動仕、  
 第一口中之痛強、加之頭部痲痺仕、時トシテ眩暈・耳  
 鳴等仕、夜間睡眠難成顔肉色大ニ相変膿血滲漏仕、難  
 儀不一ト方候得共、成丈勉強彼是心力相尽罷在候中、  
 次第ニ病勢相募リ、唯今之容体ニテ此俟御当地ニ罷在  
 候ハ、何之御用ニ難相立不而已、生涯長ク廢物ト相成  
 可申歎ト、当惑千万ニ奉存候、勿論薬劑内外種々転換  
 相用ヒ候得共、未寸効無之、兎角風土相変折柄時節不  
 宜、旁當時之病勢ニテハ、如何様之難症萌生仕候程難  
 計、此上ハ一日モ早ク従来常習之地へ転移、得ト療養  
 相加候ハ、追々快方ニ相移可申ト、医師共一同ニ申  
 出候、尚又石川玄貞診察ヲモ相受候処、是又同段之見  
 込ニ御座候、然ニ御国事御難渋之折柄、  
 勅命奉蒙登京仕罷在候所、俄ニ御暇奉願候義、誠ニ以  
 恐多奉存候得共、前件之容体ニ付、何分一度御暇相蒙、  
 帰国之上得ト療養相加へ、長ク 御用ニ相立候様仕度  
 奉存候、素リ快方ニ赴候ハ、  
 御沙汰不奉待、早速上京可仕候、前条之次第不得已明  
 日頃御暇願書指出候間、速ニ御聴濟ニ相成候様、

御周旋奉伏願候、御当節柄右等奉願候義、万々恐縮相候へトモ、臣子之身ト相成候テハ、一日モ早ク帰國仕、療養相加へ、快途ニ相赴候様無之テハ不相成ト、寢食ヲ不安苦辛罷在候、此段之情実厚御洞察被仰出、速ニ願濟ニ相成候義奉懇願候、

五月廿日

#### 四三二 給地高売買ニ就テ布達

今度給地高御規定被相替、夫々分限外過上高売買ニ付、規定之条々ハ此内申渡置候通ニテ、人々心得違ハ無之筈候得共、自然親類縁者間へ附属等致間敷儀、且御定直段之外肴料等ノ名ヲ寄、余計ニ代錢致授受候儀トモ有之候テハ、不相濟事候付、一統其勘弁可有之候、若不正之儀有之、尔後露頭之期ニ至リ、何様致謝罪候テモ、無詮儀ハ勿論之事ニテ、第一 御趣意ニモ相戻リ、別テ不可然事候付、為念此段重テ申渡候条、聊取違有間敷候、此旨可申渡候、

五月

(程久武)  
右衛門  
(町田久憲)  
内膳

#### 四三三 久光公御上京ニ就キ御慰勞

昨十八日伝奏日野大納言様ヨリ、重役之内一人御所へ罷出候様被 仰渡候ニ付、小松帶刀(備應)罷出候処、中將様御儀国事之儀ニ付応召、早速御登京

叔感不斜候、内患外憂切迫之時節柄ニ付、此涯御滞京御尽力、可奉安

宸襟候様

御沙汰候、仍テ御酒三樽・鯉十尾拜領被 仰候段被 仰達、御頂戴候、此旨一統奉承知候様向々へ可申渡候、

五月十九日

(金生)  
關山 札

關山ハ當時大目附職ヲ以テ在京国老職兼務、御拜戴ノ御酒肴ハ、在邸ノ諸士及ヒ警衛ノ士へ分与セラレタリ、此時外夷ハ兵庫開港ヲ迫マルコト甚シキカ故、列藩ヲ召シ開鎖ノ可否諮問セラレシニ、依然鎖攘ヲ主張スルモアリ、然ルニ我カ公ニハ深ク慮ラル、旨アリテ、土・越・宇和島・熊本・廣島・福岡等ト連署、時勢ヲ縷述開港可トセラル、ヲ建言セラレタリ、

四二四 四藩連署建言

島津中將(久光)

天下之大政ハ公明正大之至理ヲ尽シ、時世的当内外寛急之弁ヲ明ニシ御施行無御座候テハ、難被相行儀勿論ニ御座候、全体不可救之今日ニ至候根由ヲ推究仕候得ハ、乍憚幕府年来之御失体ヨリ釀出候内、殊ニ防長再討之御一挙ヨリ物議沸騰、天下離叛之姿ニ相及候次第ニ御座候、依之明白至当之筋ヲ以、防長御処置可為急務段、談合之上屢建言仕候儀ニテ、篤ト熟考仕候処、自ラ兵庫開港・防長事件ハ、大ニ寬急先後之順序有之、右区別ヲ以テ、曲直当否之分被為立、幕府御反正之御実跡顕ルト不被顯トニ相拘ル事ニ付、虚心ヲ以テ御反察被為在候様奉願候、二件

朝廷へ可被令奏旨拝承仕候得共、  
皇国之御安危ニモ関係仕候ニ付、是非至公至大之道ヲ以テ、私權ヲ被為拔、治久之大策被為立候様在御座度、重大之事柄難黙止、再考之趣言上仕候、恐惶敬白、

五月廿三日

越前宰相(松平慶永)

宇和島少将(伊達宗城)  
土佐少将(山内豊信)

四二五 四藩連署建言ニ就テ風説

一 橋當將 廿万石被下隠居、長防寛大之御所置ニ付制札 廿五日未刻取除、  
一 隠居ハ風聞ニ御座候、  
一 廿七日四藩公御連名之御伺書  
一 朝廷へ被差出、

一 兵庫開港・防長御処置之二件は、当時不容易内外之御大事と奉存候、全体幕府防長再討之妄挙無名之師を動、兵威を以圧倒可致心積候処、全  
奏功ニ不至、天下之騒乱を引出候次第故、各藩人心離叛、物議相起候時宜御座候、就ては即今被為立国基候急務は、公明正大之御処置を以、天下ニ不被為臨候ては、一円治り不相付候付、防長之儀は大膳父子官位復旧、平常之  
御沙汰相成、幕府反正之実跡相立候儀、第一と相心得申候間、判然明白実跡相顯候上、天下人心始て安堵可仕候得は、第二兵庫開港時勢相当之御処置被為

在、順序を得可申兼て勘考仕候、先般蒙

御下問候得共、未一同

勅問对答不仕内、前文二件順序區別を以幕府江屢申出置候、然処一昨廿四日防長之儀は寛大之所置可取計、兵庫開港之儀は当節上京之四藩も同様申上候間、誠ニ不被為得止御差許ニ相成候云々、

御沙汰之御書附拜見仕、実以意外之次第不堪驚愕仕合御座候、從

朝廷

御沙汰之儀容易可奉申上筋ニ無之、甚恐懼之至奉存候得共、

皇国重大之事件、事実相違之儀黙止罷在候場合ニ無御座候間、不得止一応奉伺候、以上、

五月廿六日

越前宰相

島津中将

宇和島少将

土佐少将

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

#### 四二六 雇教師赤松小三郎建言〔松平慶永宛〕

数件御改正之儀奉申上候口上書

一天幕御合体・諸藩一和御国体相立候根本ハ、先

天朝之權ヲ増シ、徳ヲ奉備并ニ公平ニ国事ヲ議シ、國中ニ実ニ可被行命令ヲ下シテ、少モ背ク事能ハサルノ權有ル局ヲ御開立相成候事、

蓋權之帰スルト申ハ、道理ニ叶候公平之命ヲ下シ候

ハ、国中之人民承服仕候ハ必然ノ理ニ候、第一天朝ニ徳ト權トヲ備ヘ候ニハ、

天子ニ侍スル宰相ハ 大君・堂上方・諸侯方・御旗本之内道理ニ明ニシテ、方今之事務ニ通シ、万国之事情ヲ知り候人ヲ撰テ、六人ヲ侍セシメ、一人ハ大閹老ニテ国政ヲ司リ、一人ハ錢貨出納ヲ司リ、一人ハ外国交際ヲ司リ、一人ハ海陸軍事ヲ司リ、一人ハ刑法ヲ司リ、一人ハ租税ヲ司ル宰相トシ、其以下之諸官吏モ皆門閥ヲ論セス人撰シテ、

天子ヲ補佐シ奉リ、是ヲ国中之政事ヲ司リ、且命令ヲ出ス朝廷ト定メ、亦別ニ議政局ヲ立テ、上下二局ニ分チ、其下局ハ国之大小ニ応シテ、諸国ヨリ数人ツ、道理ニ明ナル人ヲ、自国及隣国之入札ニテ撰抽シ、凡百三十人ヲ命シ、常ニ其三分之一ハ都府ニ在

ラシメ、年限ヲ定メテ勤メシムヘシ、其上局ハ堂上方・諸侯・御旗本之内ニテ、入札ヲ以テ人撰シ、凡三十人ヲ命セラレ、交代在都シテ勤ムヘシ、此兩局ニテ総テ国事ヲ議シ、決議之上

天朝へ建白シ、御許容之上

天朝ヨリ國中ニ命シ、若シ御許容無キケ条ハ、議・政兩局ニテ再議シ、弥公平之説ニ歸スレハ、此令ハ是非共下サ、ルヲ得サル事ヲ

天朝へ建白シテ、直ニ議・政局ヨリ國中ニ布告スヘシ、其兩局人撰之法ハ、門閥・貴賤ニ拘ラス、道理ヲ明弁シ、私無ク且人望之歸スル人ヲ公平ニ撰ムヘシ、其局之主務ハ旧例之失ヲ改メ、万国普通之法律ヲ立、并ニ諸官之人撰ヲ司リ、万国交際・財貨出入・富国强兵・人才教育・人氣一和之法律ヲ立候ヲ司リ候儀御開成相成候儀、御国是之基本カト奉存候、

一人材御教育之儀、御国是相立候基本ニ御座候事、

國中人才ヲ育候法ハ、江戸・京・大坂・長崎・箱館・新潟等之首府江ハ大小学校ヲ営ミ、各之大学校ニハ用立候西洋人数人ツ、ヲ雇ヒ、國中有志之者ヲ教導セシメ、大坂ニ兵学校ヲ建、各学科毎ニ洋人数人ツ

、ヲ雇ヒ、國中兵事ニ志有ル者ヲ御教育相成、且國中ニ法律学・度量学ヲ盛ニシ、其上漸々諸学校ヲ増シ、國中ノ人民ヲ文明ニ育候儀、治國之基礎ニ可有之候、

一國中ノ人民平等ニ御撫育相成、人々其性ニ準テ充分ヲ尽サセ候事、

蓋是迄人々性ニ応シテ力ヲ尽シ候儀不同有之、遊民多クシテ農而已多ク勞シ、他之諸民ハ運上少ク候ヘハ、第一百姓之年貢掛リ米ヲ減シ、士・商・工・僧・山伏、社人之類迄諸民諸物ニ運上ヲ賦シ、遊樂不要ニ関リ候諸業諸品ハ、運上之割合ヲ強クシ、諸民平等ニ職務ニ尽力シ、士ハ殊ニ務ヲ繁クシ、國中ノ遊民・僧・山伏・社人・風流人・遊芸之師匠之類ニハ、夫々有用之職業ヲ授ケ候御所置、治國之本源ニ可有之候、

一是迄之通用金銀綵テ御改、万国普通之錢貨御通用相成、國中ノ人口ト物品ト錢貨ト平均ヲ得候様御算定之事、錢貨ハ天地之形像ニ準シテ、万国一般円形ニ造リ、且万国大凡普通之相場有之候ヘハ是ニ準シ、銀貨・金貨・銅貨之割合、大凡西洋各国ト同様ニ御吹替、

其大小・品位モ同等ニ造ラス候テハ、往々万国之交際ニ不齊ヲ生シ、且交易通商之上ニ損害可有之カト奉存候、亦国中人口ニ比スレハ、錢貨不足セリ、器財物品之不足ナルコト甚シ、故ニ錢貨ヲ増シ、物品製造之術ヲ大ニ盛ニスルニ非ザレハ、平均ニ至ルコト難カルヘシ、

一海陸軍御兵備之儀ハ、治世ト乱世トノ法ヲ別チ、国ノ貧富ニ応シテ御算定之事、

蓋兵ハ数寡クシテ、利器ヲ備ヘ熟練セルヲ上トス、方今之形勢ニ準シ候ハ、陸軍治平常備之兵数ハ都テ凡二万八千許、内歩兵二万千許、砲兵四千許、騎兵二千許、他ハ築造兵・運輸兵等トスヘシ、右ハ幕臣及諸藩ヨリ直ニ用立候熟兵ヲ出シ置、四年毎ニ交代セシメ、其隊長其他之官吏ハ、業ト人望ニ応シテ天朝ヨリ命セラレ、望ニ応シテ長ク勤メシム、其兵ハ三都其外要地ニ在テ警衛ヲ職トシ、此常備兵之外、士ハ勿論、諸民共其土地ヘ教師ヲ命シ遣シテ、平常操練セシメ、且有志之者ハ長官学校ニ入テ学ハシメ、亦士ニテモ望ニ応シテ職業商売手次第行ハシメテ、往々士ヲ減スヘシ、海軍ハ速ニ開ケ難シ、先海

軍局ヘ洋人ヲ数人御雇ヒ、國中望之者其外合テ三千人ニ命シテ、長官ヨリ水卒迄ノ業ヲ学ハシメ、業ノ成立ニ準テ新ニ艦ヲ造リ、亦ハ外国ヨリ買テ備フヘシ、即今常備之海軍ハ、是迄御有合之御艦二人ヲ撰テ乗組ヲ命シ、用立候程ニ修覆シ砲ヲ増テ備フヘシ、尚国力之増スニ從テ兵制ヲ改メ、兵備モ充分ニ相増シ、殊ニ乱世ニハ国中之男子尽ク兵ニ用立候程ニ、御備之御所置有之候儀、御兵制之大本ニ御座候、

一船艦并ニ大小銃、其外兵器或ハ常用之諸器械・衣食等製造之機関、初ハ外国ヨリ御取寄セ、國中是ニ依テ物品ニ不足無キ様御所置之事、

諸物製造之局ハ、運輸便利之地ヲ撰テ諸所ニ造営シ、各局ニ西洋人ヲ雇テ伝習セシメ、國中ニ職人ヲ増シ、盛ニ諸物ヲ製シ候ヘハ、海陸兵用ノ利器海内ニ満足シ、日用之諸品廉価ニシテ良品ヲ得ヘシ、其洋人ヲ雇フノ費ハ、職人一人一ヶ月之雇価食料、合テ凡二百ヨリ二百五十兩許ナルベシ、此金ハ日本在留中大凡費スヘケレハ、外国ニ持帰ル貨ハ些少ナルヘシ、故ニ洋人ヲ雇フコト少モ厭フヘキニアラス、諸品製造局ハ往々是非開カサルヲ得サル事ナレハ、此節速



二御開相成候儀、当然ト奉存候、  
一良質之人馬及鳥獸之類御殖種之事、

蓋歐羅巴人種ハ、亜細亞人種ニ勝ルコト現然ニ候ヘ  
ハ、國中ニ良種之人ヲ殖育シ候ヘハ、自然人才相増  
シ、往々良国ト相成候理ニ候、亦軍馬ハ外国之良種  
ニ無之候テハ、実用ニハ不便ニ御座候、又牛・羊・  
鶏・豕之類、衣食ニ用テ有益之種類ヲ殖育シ、往々  
国民皆牛・豕・鶏等之美食ヲ常トシ、羊毛ニテ織候  
美服ヲ着候様改メ候ヘハ、器量モ從テ相増シ、身体  
モ健強ニ相成、富国強兵之基ニ可有之候、

此他御改正相成候テモ、国風人性ニ逆ハサル事件何程  
モ可有之候ヘハ、方今無障事件丈ハ速ニ御改正相成、  
其他即今難被行事ハ、人智之開ケ候ニ応シテ、漸々御  
改正相成候儀、天理自然ニ可有之奉存候、斯ク御国政  
ニモ関リ候儀ヲ奉申上候ハ、甚奉恐入候得共、心付候  
儀ヲ黙止仕候モ却テ不本意ト奉存候間、乍恐淺見之一  
二端奉申上候、何卒右件々被遊御尽力、方今適当万国  
普通公平之御国律相立、

天幕御合体・諸藩一和相成候様奉懇願候、味死稽首、

松平伊賀守内(忠礼、上田藩主)

慶應三年丁卯五月

赤松小三郎(安松)

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

四二七 横井平四郎書翰

横井平四郎ノ書ニ、当時ノ薩藩ノ形情ヲ述ベテ曰ク、

薩州ハ自国取り堅メ申論ニ一定イタシ、弥以富国強兵  
ニ取り懸リ、西洋器械モ大抵取り寄セ、洋人モ四五輩  
呼寄セ操練甚盛大ニ相成候、家中若者共ハ大抵洋服・  
截髮イタシ候、是迄國中旅人ハ嚴禁之処、鹿兒島内ハ  
勿論、何方モサシ許候故、諸国商人追々入込ミ、城下杯

ハ日々ニギハヒ候、国論ト大ニウチ替リ、智術計策ニ  
テ行ハレザル事モ合点イタシ、何モ誠心公平之処ニ一  
統帰候由、必竟ハ大隅公非常之人ニテ、此地ニカタリ  
珍重ニ候、当君モ余程宜敷、日々政事堂ニ出方自身上  
聞候也、近頃訴訟箱ヲ被出、下情ヲ聞カレ候主意ニ付、  
イカ成下賤ヨリモ言上不苦、毎朝自身開封被致候、是  
等ハ近来ノ美事也(以下) (小橋遺稿)

四二八 吉井幸輔書翰

又全日吉井ノ書ニ曰ク、

霖雨之砌、各様御揃御壮栄可被成御座奉賀候、随て小弟無異相勤居申候、乍憚御休意可被下候、扱其後打絶飛脚も到着不致、蒸氣船も不帰、如何之形勢成立申候哉ト、始終案居候計御座候、毛利家之所置も既ニ廿四日限手切ニ可及との事相聞得候得共、今日迄為何一左右も無之、又々寛ニ相成候とも風説御座候、小笠原<sup>（夏行考也）</sup>婦坂為致共ニてハ無之哉、旁可笑次第二御座候、備中辺ニてハ少々騒立候由、高杉<sup>（雷作）</sup>も致出崎、ガラバが蒸氣船も買取候由、是ハ一仕事變ニ入候ハ、可致五卿一件も其後為何左右も無御座候、堀上京被仰付候間、今程御取会中欵と奉察候、

一当地も此節ハ大麥革相始り、海・陸軍等夫々御掛りニて振興之筈、就てハ君辺より非常之御取縮被為在、御役人定数被相定、海・陸軍ニ被振向候賦ニ御内定相成居申候、小子も海軍掛御勝手方江相詰候様被仰付候、乍不肖力之限り相勤候合、別て難有仕合御座候、洋銃隊も大ニ振立候勢御座候得共、未誠ニ微々タル事ニて、何も実効ハ挙り不申、是より氣根次第ニハ成就可相成、新納家十分之振はまり、全ク因循氣無御座、実ニ国家

之大幸ニ御座候、遠客も当月末・来月初ニかけ廻船之模様、且遠航海要路之処より御扱ニて、御遣之御模様、内外多端之事ニ御座候、猶追々可申承候、恐惶謹言、

<sup>（慶應二年九）</sup>

五月十日

吉井幸輔

大久保一蔵様

内田仲之助様

伊地知正治様

再伸、乾行丸も銅庫相痛居候得共、九ホンド位ならハ、兎や角運動出来申候間、何時ニても乗出候儀出来申候間、時宜次第ニハ出掛可申、銅庫も積出相成居候由御座候間、相届候ハ、今度ハ夷人御雇入ニて、磯ニて御入替之御内定御座候、御船手も合弁相成申候、各様御宿元御無事也、大久保君・内田君之御書状相届御礼申上候、雨中なと御楽ミ之筈、近比ハ頓と都も氣速ク相成、海外広ク遊心候ハ、可面白心持ニて、因循至極ニ御座候、白栗といへる芸者を請出し、折々乗廻シ楽ミ申候、海江田なとは別段不申遣、宜御伝へ可被下候、其外御氣寄を以、宜御伝へ可被下候、

○伊東茂右衛門子、御留守居方書役懇望之由、西郷

江相頼候由、宜私よりも御頼申上候、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四二九 西郷隆盛ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔藩政大改革ノ概略〕

特ニ海軍ハ吉井其掛リトナリ、奈良原船奉行ニ任シ、専ラ其拡張ニ力ヲ尽セリ、五月十日隆盛ガ大久保ニ贈リタル書ニ曰ク、

御細翰忝拜誦仕候、弥以御安康御勤務之由、珍重奉存候、大坂御下ニテ細事御聞糺、御申越相成相届候処、湯治中ニテ旅先江相達、早々相廻奉達 御聴候処、余程御安慮被遊候次第ニテ御座候、左様思召可被下候、藝地破れとやら叡山登之阿放事、余多之出役通も、皆貴兄方御揃之事故、ちつとも不動安心いたし居申候、若哉相変候義も御座候ハ、蒸艦式艘も参居候付、直様御飛せの筈と吞込居申候、いつれ人数丈ケハ、先御見合相成候半と御察申上居候、蒸艦出帆之節ハ湯治中ニテ、御返事も不仕、甚不埒之仕合ニ御座候、此度之交代人数ニハ、決て驚出し候半、十分勢ハ張れ候事と奉存候、其許よりの飛脚御見合相成居候処、いまだ着

不致、爰許も夫故延引いたし申候、先月廿一日限之期限を以御呼出との趣、小笠原侯決戦之含と申事相聞得候得共、何分軍之出来候丈ケニ無之、又寛々打替候半軟と被相察申候、近来何方よりも便無之事情不相知候へ共、破れ立候ハ、自然相知れ候筈御座候へ共、為何様子も不相聞候付てハ、決策ハ相違いたし候半軟と被相考申候、如何之形勢相成候半軟と、日々御待申上居候事ニ御座候、嚙御配慮之筈と奉存候、

○近衛御父子様より御両殿様江御状参り、梅芳院義京都江被召止、郁君様御靈前御祭らせ被為成度、左様無之候てハ、

内府様御孝道も不被為立との趣御願申来候へ共、全体わるものゝ義ニ候へハ、如何にも被残置候処、不宜事故、御返書之義ハ御一ト通ニテ、委細貴兄より御聞取被下候様申参筈御治定相成候付、貴兄江ハ私より委細申上越候て、程能御断被申上、御暇相成候様御働被下度御頼申上候、貞君様も被為入、其上梅芳院を以御祭不被成候てハ、御孝道不被為立との趣、却て御不孝道之訳、御母君様を余人を以御祭らせ被遊候趣、御孝道ニ迦候御事と奉存候、中将様にも思召ニハ相逆候訳ニ

候得共、婦人之奸ハ一番恐しきもの候間、御暇相成候方却て御為ニも可宜、委敷貴兄江申遣候様御沙汰被為在候間、宜敷御計可被下候、御当地も御変革御手初も有之、御家老方夫々御受持相立、是迄之御月番廻ハ相變シ、譬御出勤無之共、宅ニおひて、御用御聞かせられ、至極之御振はまりにて初り掛候付、追々道も開立

候半、相樂居申候、仰出等之写ハ長藏より差上之由承候付、相省き申候、いつれ俗論も可相起候得共、当日迄ハ何も不申触趣と相聞かれ申候、何とも云わぬ様ニとハ、決して不出来ものニ御座候間、目当を定め是非仕遂までハ不動訳ニ御座候、いまた申上程之愉快ハ無之、追々御聞ニ入れ候程之事も有れかしと祈入申候、其御許之義ハ、とふても動き之付候ハ、早々御申遣可被下候、此旨荒々御報迄如此御座候、恐惶謹言、

(慶応二年カ)  
五月十日

西郷吉之助

大久保一蔵様

追啓上、煙草一包差上申候間、内田氏と御配分可被成下候、

(大久保利義氏所蔵本にて校訂)

#### 四三〇 小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ書翰

薩藩ニ於テモ、曩ニ大久保ノ途次ヨリノ催促アリ、特ニ將軍進発ノ挙アリテ、天下ノ形勢益切迫セルヲ觀テ、愈隆盛ノ出京ニ決定セリ、(慶応元年)閏五月十五日小松ヨリ大久保ニ贈リタル書ニ曰ク、

追日暑氣甚敷御座候得共、愈御安康被成御尽力、欣喜之至奉躍雀候、於爰元 御両殿様御揃御機嫌克被為

入、恐悦御儀御同慶奉存候、二ニ小子無異毎動いたし候間、乍余事御放念可被下候、然は去ル六日(朱)ニ岩下氏(方平)

着ニ相成、

(朱)「忠義公」

御進発も無相違由、右旁ニ付誰そ出京被仰付度趣共委曲承申候、貴所ニは未御着坂無之由、定て跡越ニは御着之筈、旁之次第も御聞取為被成筈、貴所御着ニ相成候得は、岩下氏帰国ニは不及事と被存申候、岩氏より其御地之形勢事情詳細申上ニ相成候上、猶亦勘考いたし候様

御沙汰ニ相成、熟及勤考候処、何分此節之機は、不容易一大事之場合と存、とちらにしても六ヶ敷事と存申候間、被差出候方可宜、貴所御出張ニも相成居候付、

不被差出とも可宜も考候得共、忝人よりも式人にて尽力相成候得は、大キニ力之付候義も有之候付、乍不肖僕も早々駈登、粉骨碎身尽力いたし度御座候得共、此節は誠重事故、小子輩四五人被差出候より西郷忝人被差出候方、天下為国家可相成と存、御国元之義も此形勢ニ押移候ニ付ては、弥御軍備ハ勿論、万事大御変革も急々なくて叶ん時機にて、是非曳止度は山々御座候得共、前文通無勘訳合にて被差出候筋ニ決定いたし申候間、着之上は被仰談、宜敷御尽力可被下候、將軍家も御宿割通御通行相成候得は、疾く御京着ニ為相成筈、不一方御配意之程奉察候、小子も此四五年は、か様之時節乍不肖も閑係いたし、乍恐も朝廷之御模様、且国事御掛方之御都合も窺居候得は、か様大事之御場合ニ望、確乎御動揺不被為在、朝威相立候様之御所置、乍恐も如何と昼夜不安寝食苦慮いたし居申候、右等之事にて一向御尽力之筈、千緒百端御配慮之程奉遙察候、時分柄之事ニも御座候間、無御草臥十分御尽力之所、呉々も奉希候、心底深く御洞察奉頼候、岩下氏も大目付江御役替、出府之上は是迄之通被仰付、小礫丸より帰京被仰付候、日々夜々御

一左右而已御待申入候、相替模様は早々御申越被成度、時宜ニ依ては人数被差出候義も不被計候間、最早内々取調等はいたし置申候間、左様御承知可被成候、邸中色々之事も起居候よし、貴兄御着ニ相成候ハ、定て程能御取扱為相成筈とは存申候得共、尚宜敷御頼申上候、爰元別段相替候条は無御座、日々切迫之勢ニ成立、寸刻も早く御手元御変革とも御手不被召付候て不叶事にて、内々取調も出来申候、桂家第一之振はまりにて、〔忝〕〔存〕〔存〕〔存〕〔存〕仕合ニ御座候、西郷氏も出京、我等式迎も心し候丈ニは無之候得共、無致方場合故申談、十分尽力之心得御座候、瘦馬之重荷誠ニ込入申候、旁御推察可被下候、〔忝〕〔才〕村山軼役、相良・葛城被召抱之条、〔藤次〕〔彦一〕中山御納戸奉行江軼勤其外万端爰元之形行は、岩下氏・西郷氏江咄置申候間、御聞取可被下候、夫故態と致筆略候、段々御役人等之出入は多々御座候得共、表向問合もいたし置候付、御聞取相成候半と存申候、別段訳有事は無御座候、先は此旨如斯御座候、尚追々可得貴意候、早々不備、〔慶応元年〕又五月十五日

大久保一蔵様

小松帯刀

副啓、時下随分金玉御愛護被成御勤度奉祈候、得能・  
 税所江も宜敷御伝声御願申上候、煙草少々不珍品御  
 座候得共、致進入候間御笑留可被下候、爰元も梅雨  
 降統候得共、此兩三日は晴上り、少シは世間広く相  
 成申候、返すくも不肖之身、国事多忙実ニ閉口之  
 至御察可被下候、月頃之歌とも、寸暇も有之候ハ、  
 詠シ差上候、心得御座候得共、昼夜寸隙も不得、中々  
 歌とこゝろてハ無御座、兎角場所之物と被存申候、夕  
 へ涼しき加茂の川かせの事共、遙ニおもひやり申候、  
 細々申上度候得共、前文通繁用、其上御地之事而已  
 如何とおもひやり奉り、十分執筆も出来兼候次第ニ  
 御座候間、乱筆旁御海涵可被下候、何も細事ハ両兄  
 より御聞取可被下候、先度御打合申上置候御用部屋  
 書役詰之義は、此節種子島被差越候間、宜敷御談シ  
 御願申上候、又々不備、  
〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕  
 相良ハ名ヲ平次郎ト称ス、伊牟田尚平ノ変名ナリ、時ニ  
 放免ヲ蒙リ、帰国シテ郷里ニアリ、葛城ハ彦一ト云ヒ、  
 竹内八百都ノ改名ナリ、共ニ薩摩ノ郷士ニシテ、安政ノ  
 初年ヨリ国事ニ尽セシガ、今両士ヲ召抱云々トアルニ依  
 レバ、当時人材登庸ノ道ヲ開キ、旧来ノ階級ヲ墨守セザ

リシヲ見ルベキナリ、

四三一 黒田了介ヨリ同姓嘉右衛門へ大坂城襲撃

セムト云々書翰

封紙

鹿府ニテ

従浪花

黒田嘉右衛門様

黒田了介

要詞

尚々時分柄折角無御痛様、御保養第一ニ奉存候、以  
 上、

一 扱御国元より人数ヲ御差出シニ相成り、是非花城を御  
 抜被為遊候 御英断有之時は、精兵一大隊六小隊城門強  
 固の事候得は、摧ク丈ケ功力アル大砲四挺又白砲六挺  
〔式十寸、以上〕 尤白砲ハ打方余程六ヶ敷、如何ニテ人撰成田氏  
〔宋三彦十郎〕  
 へ被仰付度、別段強悍之人無之候ても、随分用立申候、  
 いつれ夜襲・朝懸二ツの外無別事候得へは、是非三眼  
 弾・光焼弾御用意有之度、忽チ花城焼立、銃隊衝撃之  
 機会ヲ設ケ度事、  
 一 兵庫港へ幕艦回天丸・黒龍丸式艘、外ニ買船三四艘位  
 碇泊之由、是非花城ヲ御抜キ被為遊候事ならハ、至極  
 強悍之人數二小隊位御撰鋒有之、一小隊ツ、蒸氣船二

艘へ乗せ、花城と同時ニ不意ニ襲撃、回・黒の式艦へ乗入、直チニ御手ニ入れ度但シ蒸気船二艘ハ、人数大坂へ御シ、衝撃ノ期限ヲ合セ、直チニ兵庫へ回シ、乗取度、

一京師丈ケハ随分御不足無之候得共、同時ニ京攝期合セ御衝撃無之候ては、御成功は万々御六ヶ敷事と愚考いたし候、扱此節品川杯帰国の折、〔采〕〔新八〕村田下拙同伴ニて下坂いたし、于今滞坂いたし申候、得ト花城辺動静相同申候処、当分全く空虚ニテ、追手口・京橋口辺迄備有之、玉造口辺少々の岡兵御座候歩兵四百五番六番都合三大隊、砲隊一座八挺位ト、実ニ此機会ニ投し、花城ヲ抜ク事掌中ニ御座候、乍恐万々一も御決策ニ相成候ハ、兵事無此上御重大の事候間、至極内密ニ外ニ洩泄いたさず様御座有度、余程薩ハ策略洩れ安き憂御座候、右は乍憚所存の俥要用如此ニ御座候、匆々謹言、

卯六月二十四日

黒田了介

清隆花押

黒田嘉右衛門様

参人々御中

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

四三二 幕府ヨリ薩・土・宇和島等ノ藩々へ達書

長防ノ事、君側ノ姦ヲ鋤除セントノ趣意ニ出タリト雖、禁闕近ク押寄せ及発砲候ハ、家内ノ鼠ヲ除ントテ其家ヲ焼キ、主人ノ身ヲ危フスルカ如キ道理ニシテ、既ニ玉体モ如何ント、イツレモ兵力ヲ尽シ、防禦セシ次第ナリ、依テ其罪科ニ拾万石ヲ被削、父子ハ蟄居等ノ命ヲ不受、仍テ再討ノ拳アリテ及戦争タリ、然ルニ諸藩ヨリ寛大ノ御処置言上、右ニ付従 朝廷モ寛大ノ御処置被 仰出ノ間、一等ヲ減シ旧宦ニ復シ、本領安堵ノ積、乍去向後君臣ノ礼厚ク相立、弥忠勤相励候趣誓詞ノ上、万事以前ニ相復候積、

一 朝廷へ大小ノ諸侯ヨリ年々貢米、一石ニ付何程ト相定メ 献貢為致候積、

一 山城一國ヲ堂上方一統地方迄配分ノ積、

一 九門警衛相止メ、山城国境迄城堡ヲ築キ、右人数ニテ

警衛ノ積、

一 皇子ヲ僧徒ニ致ス事可被止候事、

一 王城ヲ美麗ニ致シ、善美ヲ尽シ度、尤モ在来ノ制ニテ

美麗ヲ尽シ度、無差候テハ、外国人へ対シ恥入候事、

一 大樹ハ諸藩ノ頭トシテ伏見桃山ヲ修築シテ、王城ノ大

手ヲ警禦ノ積、

一京城ニハ諸藩留守居ノミ滞在ノ積、

右八ヶ条丁卯六月薩・土・越・宇和島・佐賀・熊本・

廣島・福岡・岡山等ノ藩々ヘ下問セラレタリ、仍テ

可否上言スルモアリ、或ハ這ノ回兵庫開港可否、下

問ノ末開港可決シ、而シテ此下問ニ及ヒタリ、

#### 四三三 中條左衛門督ヨリ薩藩差出候書付并答書

抑御当家ニテハ皇国学御熱心、御国政御所置向、専ラ

右趣意之上致承知、結構之事共御承知之通、家学紀伝

道ニ付、国家之御為正敷筋心得方教導之家業ニ付テハ、

職掌之儀無之共、論弁可致置事ハ勿論、其上

天朝へ抱候筋ニハ、携候儀役所之肝要ニ有之候、左候

得ハ方今之形勢不容易御時節ト奉恐入、乍陸心痛至極

ニ候、大諸侯方ニテハ御論モ可有候儀、且其御家皇國

学御熱ニテハ、手前家業同途之儀ニ付、御存心モ大同小

異ト存候、付テハ御相談申候先日 將軍家へ御差出之

御書面、風説ニ承及候、左様相成候テハ、只々無謀之

議論而已費日月事、吏肝要之御為專防之御趣意ニテハ、

天下之御為サヘ務候ハ宜敷ニ可有之候間、信札以家学

辺誘導可致ニ付、表立無被仰入、先日之書面ハ御取消ニ  
テ、意味合ヲ以御筋柄貫通、公辺御為筋ヲ御助勢有  
之、国家ノ真ノ御為成就満足ニ相成候様、着眼御別考  
御頼申候ハ如何可有之哉、

一其御藩之儀御疑惑ニテモ御意存無之儀、尤先日之御書  
面等ヲ差出シ之儀、全御為ヲ被存候故ニ候趣、御意存  
有之候ハ、俱ニ御出兵御勤被申候テモ、御出張可被企御  
苦勞之儀被及御工風候得共、元來左様之御存無之、廣  
大院様御筋柄且當時天璋院様(徳川家定夫人)モ被為入御間柄之義、厚  
御心得候ニ付、御扶助被申度、強諫之御書面被出候ト  
申儀承候、左候ハ、右御間柄之処深相考、 將軍家へ  
御迷惑ナク、国家之御為御精力ヲ被竭、天下静謐之御  
所置ニ、成就之跡ヲ被開、

聖慮不被為惱、御平安万民無動揺、安堵ニ相成候御工  
夫御尽力有之、御守衛之兵卒非常警衛之分御残、其奈  
頓ニ御減、諸方懐危疑心ヲ御消除有之度、諸藩向へ納  
得候様御示談有之度候、

一諸藩鎮静候儀ハ、御引請御骨折之趣無相違候、弥老中  
方ハ拱手握権候俛ニテ罷在、御取扱御頼申候ハ、早  
々御取計可有之哉、



諸方眼前之理論張、遂国乱ヲ生テ彼術中ニ落候処厚  
御含置、御工夫可被下候事、

一却テ 將軍家ヲ被扶助候御所置候ハ、信礼誘導筋取扱  
可申候、御内存之趣致承知度候、大体御趣意之趣承知致  
度、兎角何事モ十分ニ難調候事ハ、世上之習ニテ有之  
候得共、十分之処承知候得ハ、可相成丈誘導可致積候、

一攘夷之如何御心得候哉、自秩父御聞キ候通<sup>(トク)</sup>モ攘夷  
ハ難出来様子、一昨年ノ事件ニテ御感得ノ由、左候ハ  
、何様之御所置ノ御趣意ニ候哉、攘夷無之、鎖港之御  
所存候哉、或ハ鎖港モ無之、且交易ノ法ヲ改、国ハ致  
強兵防守之策候哉、

答

一書面消除之儀、万一彼承伏不仕候得ハ、速ニ打入ト被  
仰出承知仕候得共、甚不都合ニ可有御座候得共、尊慮  
ニ難奉応候事、

一御守衛兵卒非常警衛之分ニテ、余事ニ出兵無御座候、  
巷説ニハ夥敷申触哉ニ付、御疑ハ御尤ニ候得共、書面  
ニモ申上候通、凶器妄ニ不可動モ、名分大義ニ関係ス  
ル事ニテ、無名ノ暴動可被謂無御座候、顯然タル事ト  
モ御座候事、

一鎮静之儀 幕府道ヲ御尽シ、君臣ノ分真々御病專ニ被  
遊候得ハ、速ニ御行届ニ相成可申哉ト奉存候事、

一幕府ノ御鴻恩奉蒙候儀ハ、今更申上迄モ無之事ニテ、  
天幕ノ御為十分厚建言可申上、着眼ハ只名分大義ヲ御  
尽シ被為在度トノ一筋ニテ、大綱サヘ御立直シニ相成  
候得ハ、其余ハ枝葉之儀ニ奉存候事、

一攘夷之儀、君臣之名分大義判然、御振替ニ相成候条理  
明白ニ相立、諸藩御徳沢ニ浴シ候様ノ御所置ニ相成候  
ハ、開鎖ノ儀ハ亦夫ニ応シ、彼カ侮ヲ不受、

皇国之御武威海外ニ輝可申所ニモ可立至候得ハ、何分  
本ヲ捨、末ニ涉リ候様之御所置ニテハ、迎モ十分之見  
留付兼、其尽ス所目見難相立、何卒大本ノ大典速ニ御  
振替ニ相成候処、奉希上度御儀ト奉存候事、

先日ヨリ象<sup>五才</sup>トカ・虎等観物ニ人多見物、高貴之方へ被  
引、陽明家<sup>近衛家</sup>へモ被引ノ間雖有、推參之思眼病中塞  
翁不能其事、

モロコシノヨシノ、象ノ山桜  
ハナノカタチノメツラシキ哉

忠秋

四三四 石室秘稿抄(當時ノ風信)

七月一日

近日風信、日州細島等御領分、総テ此節高鍋・延岡兩藩へ御預ケ相成候由、尤頭メ肥後之細川家ノ令ヲ受ケ候賦ト申事ニ候由、且天草之儀モ細川家へ御預ケ相成候由、共ニ細川策ヲ建候事候半、早ヤ此方ハ斯ク手後レ相成リ、遺憾之至ニ候、京師ニテハ討幕論頻リニ起リ候由、如何可相成哉有志之歎息ニテ候云々、

四三五 伊藤俊介ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

近頃打絶不得拜鳳候処、御壮栄被為入、此度関東御越之趣ニテ候処、御着之由、然処アメリカ飛脚船ハ明日神戸入港、直ニ横濱へ罷越候趣、兼テ承知仕候間、早々神戸御出浮之上、中島作太郎ト申者へ御引合被下候へハ、早速船便探索御周旋可申上候間、神戸御着之上ハ私ヨリ伝言仕候次第ヲ以、直ニ同人へ御駈合可被成候、迅速ニ相運可申、今晚御船迄御尋可申上筈ニ御座候得共、俗務多忙不能其儀、不悪御海容可被下候、貴

酬、匆々頓首再拜、

七月朔日夜

黒田嘉右衛門様

貴答

伊藤俊介(朱)「博文旧名」

四三六 西郷吉之助ヨリ後藤象二郎へ書翰

昨日ハ遠方迄御来訪被成下奉深謝候、明日御発足之段小松へ申聞候処、差掛御煩敷事ト奉存候得共、今日四時頃ヨリ木屋町柏亭ニヲヒテ、離杯献シ度御座候付、先日御出会被下候御人数ハ勿論、此度御上京相成候御兩人様ニモ、何卒御誘引被成下度、寛々御面会イタシ置度含ニ御座候故、御同伴被成下候処、偏ニ奉希上候、イツレ以参右旁可申上筈御座候得共、乍自由之働書面以奉得御意候、頓首、

七月二日

西郷吉之助

後藤象二郎様

要詞

四三七 市來廣貫日記抄

七月四日 晴

此節京師守衛人数被差出候付、御城下ヨリ一大隊、外城ヨリ一大隊被差立候ニ付、白砲隊〔赤〕へ正右衛門〔成田〕モ陸軍方ヨリ御用ニテ被仰付候由承候、

四三八 久光御上京御慰勞云々布告

五月十八日伝奏日野大納言様ヨリ被仰達儀有之候間、重役之内一人 御所へ罷出候様被仰渡、小松帯刀殿被罷出候処、議奏衆・伝奏衆御出席、議奏正親町三條大納言様ヨリ〔卷〕〔久光公〕中將様御事国事之儀ニ付応召、早速登京 叡感不斜候、内患外憂切迫之時節故、此滯滞在有之、厚致尽力、可奉安

叡慮旨御沙汰候段御書付被相渡、左候テ御酒三樽・鯉十尾拜領被 仰付候旨、御目錄ヲ以テ被仰達、御品御拜領被遊候段御到来候、依之御一門方并島津左衛門一列諸大身分月次御礼罷出候面々、来ル七日御祝儀後於席々謁御家老、御祝儀可被下候、

但兼テ大奥へ御祝儀被申上候面々ハ其通ニテ、江戸・

京都之儀ハ追テ飛脚便ヨリ被申上、随心院様へモ

同断可被申上候、

右通 太守様 中将様へ御祝儀被申上候様、向々へ可

通達候、

七月五日

圖 書〔島津久治〕

右衛門〔久武〕

伊 勢〔島津兼〕

龍 衛〔川上久齡〕

刑 部〔新納久憲〕

内 膳〔町田久憲〕

四三九 島津主殿上京ニ就テ諸説(或人日記抄)

四三九ノ一  
七月七日

此節主殿殿總督ニテ出立候ハ、長崎ニテ暴会之談ニ

テ、三田尻へ会兵シテ攝坂之間へ大挙シ、直ニ京師へ寄

テ討幕之策ニテ、先達テ京師ヨリ大久保一藏・大山格

之介長へ至リ、斯約之上大山帰国事之策結候処ニ、鹿下

国論シキリニ起リテ、此云々暴会逆賊之長賊ニ与シテ、

不義之逆兵タルヲ以テ是ヲ破ル、論判ニテ、建白シキ  
リニテ、左之御書取モ出候由、右ニ付京師ニテハ大原  
(實德)左衛門督・正親町三條之此方執達ニテ、討幕之策嚴密  
之処、此事洩聞へ、細川・肥前・久留米・柳川・筑前  
ヨリ支拒之手当シキリニ見テ、且ツ宰府蟄居之五卿ニ  
モ、衛兵サシ出候時機ニテ、先ツ薩兵先登イタシ候ハ  
、長軍ニモ跡ヨリ繰出上、京・大坂双方ヨリ挾討ニ打  
候手段之由、右ニ付島津主殿一大隊ヲ率ヒ出軍、安藝  
ノ三田尻へ会陣、長・藝・石州・備前等之暴兵ト謀合、  
直ニ上坂之上ハ、此方之蒸氣船ヲ長へ貸シ渡シ候約定  
之由候、初メ京師ヨリ大久保一蔵・大山格之介兩人、  
長人要路之者三拾人計ニ、三田尻ニテ衆席、手段ヲ論  
判イタシ候処、長ニハ此節大垣迄御用有之付テハ、平  
穩ニ出掛候賦ニテ不受合候処、頻リニ兩人ヨリ及相談  
候処、長人モ兩三年之恩義ニ、無是非出軍之儀ニ承知  
イタシ、大久保ハ帰京、大山ハ直ニ馳歸リ候由、右様  
暴会之手段ニテ、其事御城中下洩レ聞大沸騰ニ成立、  
島津主殿始一日大議議ヲ起シ候テ、無名之出兵不相成  
(采)候儀(島津圖書)宮之城公子(供々)直諫諸士之建白有之、事起ルノ勢  
(島津久光)候処、二之丸公之御書取出候、稍鎮靜所置ニ振替リ、

却テ出京取鎮之手段ニ成立候上、長崎・下之關・九州  
筋・肥後・大坂辺迄モ御書取之事流布、風説ヲ計ミ候、  
忽チ長崎等へハ流布相成リ、巷説ニ長人モ疑惑シテ、  
(采)忽チ出軍ヲ取止、十月十八日態々長ヨリ側役其外役筋  
(島津ノ説)乗付、蒸氣船ニテ鹿府へ下リ来リテ、出軍御断相成候  
時機ニテ候由、彼ノ暴論共手段致相違候事、実ニ国家  
ノ幸ニテ候、右ニ付主殿殿一隊之船ハ、中之關辺へ留  
(采)置、自身ハ上陸、密ニ上坂相成候由、左候テ三島彌兵  
(備前名)衛ヲ以テ、京師へ一左右申入相成候処、一日帰着之首  
尾相成候砌ニテ、小松・西郷・大久保・伊地知・吉井  
其外奈良原幸五郎・海江田武二(信義)杯之輩、一緒ニ近々下  
坂之式ニ相成リ候由、  
右ハ此節為軍家辞職相成リ候処、  
朝廷ニヲヒテ御採用相成リ、右ニ付薩摩・尾張・土州・  
越前・宇和島・藝州・因幡・備前杯早々上京、其外拾  
万石以上登京被仰越候ヨシ、太守公御上京奉促候為  
ニ、彼輩一日下国ニ相成候事之由、実ニ世之大変不及  
是非候由、爰元ヨリ永吉供ニ罷下リ候者共、昨日歸リ  
候テ、六日付之書状相届候、右之事情巨細ニ候、

四三九ノ二  
七月七日

去ル三日主殿殿ニモ蒸気船ヨリ出帆相成候之由、兵士千五百人監軍ニテ大脇彌右衛門・伊東仙大夫・山之内一郎等也、於御城下モ此度京師ニテ討幕論区々之風説ニテ、紛擾ニ候、

中將公ヨリ此度出軍之儀ニ御書取仰出有之候由、有馬柳泉ヨリ書状遣ス、又有川喜左衛門ヨリモ京師模様書相届候、先ツ初論変入正論ニ帰候哉、此節長州ニモ平常ニ優申候、(高峯 佐伯藩士)吉川監物大坂迄呼出相成候由、右ニ付変乱モ生シ、用心之為出兵之由也、何分京師之暴論共長州之為ニ指御セラレ、姦賊徒之名義ヲ不弁荷担之儀、遺憾之事共也、是力為ニ国家社稷モ危険ニ至ル事痛哭之至リナリ、小川源五右衛門参り候、当所軍備向細聞候、

四三九ノ三  
七日

此節京師出軍之儀ハ夷ニ国家危険之訳ニテ、鹿府中一統ニ紛擾ニ成立、第一主殿殿総督被仰付候儀大議論有之、御本丸并ニ二ノ丸ヘモ兩度程拜謁、或ハ宮之城公(朱)子ヘ御相談相成り種々評定、是非国家危急存亡之訳明

白ニ建言相成候由、右ニ付諸士中ニモ十分之九分丈ケハ正義徒ニテ、決死之者不少、夫故建白等夥敷、必死之義徒ハ破切之論迄ニテ、就中川上助八郎決死ニテ拜謁建言之由共内聞候、当分出勤等差扣居候人不少、大混雑之向ニ候由、(朱)有川喜州ヨリモ同様内聞候、長大息之時機ニ候、此末如何可相成哉、

四四〇 〔御手許金ヲ海陸軍方ヘ差出ス達書〕

金一万兩  
右 二丸御手許御格護金ニテ被下ケ置候処、軍備為御用途海陸軍方ヘ御差出相成候条、可承向ヘ可申渡候、  
七月八日 帶刀小松

四四一 洋行書生建言 (白山雇入レニ就テ)

〔包紙〕 大久保一藏様 御用伺 岩下佐次右衛門  
建白写ハ外ヘ御廻シ可被下候、  
別紙差上申候、自分手紙ハ為差事も見得不申候得共、

差上候、以上、

七月九日

大久保様

岩下

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

#### 四四二 与力・御小人等支配替達書

御納戸与力并御小人・御広敷与力・足輕之儀、御兵具方へ合併被仰付候テハ、御納戸・御広敷支配之儀被相除、都テ御兵具方支配被仰付候、左候テ御小人之儀ハ足輕ト可相唱候、此旨申渡可承向へモ可申渡候、

七月十日

右衛門桂

#### 四四三 〔吉田清成等ノ建白書〕

微臣等寡少之識、且即今之世態ヲモ不明ニシテ建白仕候儀、聊恐多奉存候へ共、存付候儀ヲ閉口仕居候テハ、却テ如何ト奉行衆議之趣、並承得候事情書等相添、左ニ申上候間、何卒御披露被成下度奉頼候、

此節モンプラン並數多之仏人等岩下家御同船、御国之

〔Montano〕

〔朱「分平」〕

様出船仕ル之段承り、如何成趣向ヲ以斯ク遠路へ勞ヲ

不厭罷越候哉ト、央疑惑ニ及罷居申候処、幸岩下家杯

御入英相成、委細承知仕候処、此節白山之趣向ニハ、

御前へ罷出御直ニ天下之事情、且社中取結等之件ヲ建

言可仕トノ段承申候、就テハ私共最初ヨリ白山之尽力

ニ付テハ、一向信用立兼候故、始終注意仕居候へ共、

只今ニ至リ其真実ヲ見当リ不申、唯彼ノ言ニハ、御国

ノ為ニ尽力ストノ趣數々承候得共、彼比義之貴戚大的

ナクシテ、何故薩ノ為尽力可仕哉、況乎薩藩之臣ト唱

可申哉、又仮令志ハ左モアルニセヨ、国内之事情ハ貫

通セスシテ、誰カ其国政一片ヲ任セラルベキ道理、更

ニ有御座間敷奉存候、最初ヨリ私共承知仕候ニハ、白

山へ万事御国内ノ形勢等、逐一ニ相通シ無之候段、然

ハ如何シテ彼ノ議論之適當スベキ道理、更ニ有御座間

敷奉存候、真実モンプラン御国家之為ニ尽力ノ意、夢

々無覺束奉存候、故ニ私共申談、彼等之航ヲ相仕候儀

実ニ六ヶ敷、勿論万事只今迄委任相成居候儀ナレバ、

此節無理ニ抵抗シ議論ニ及候ハ、全絶之外有之間敷、

故ニ何分此節御国へ来着之上、断然之御所置被相立候

外、更ニ手術無之トノ段承り、無和理黙止居候次第御

座候、扱彼等来着ノ上ハ、自ラ大小トナク建白可申ハ  
 当然ニテ、真夷臣等之恐怖スル廉ハ、當時於御国許白  
 山余程名譽、且一入御国家ノ為ニ無ニ尽力ストノ段  
 相聞得居候由承候故、若モ不通情ノ件数多有之、乍恐  
 不凶御動揺、彼ノ建策ヲ御許相成儀モ難計奉存、実  
 ニ寢食ヲモ安セズ、御聴慮ヲ以テ旁御酌の有御座度、  
 千万奉祈訟候、  
 先達テカラ<sup>Godan</sup>対面之折、白山江カラパノ言候テハ、汝  
 多財ヲ薩へ貸ストイヘドモ、当時薩藩頻ニ疲弊シ、迎  
 モ返財ノ儀既ニ無覚束ナト、云々、然ルニ白山言ヘラ  
 ク、若薩国ガ返財セヌトキハ、早速佛ノ軍艦ヲ横濱ヨ  
 リ彼地へ相向ケ可申、故ニ全ク恐ル、処無之ト言シト、  
 カラパ之直咄承候、英人ヨリ承リ候次第御座候、実ニ  
 央可恐ノ期ニ御座候半ト奉存候、別儀ニモ段々古今之  
 事実ヲ記載セシ通、欧土ノ人宇宙ニ災害ヲ布流セシコ  
 ト難數、唯常一ノ歐人己ノ利ヲ思ハス、人ノ為ニ赤心  
 ヲ尽セル例、古今ノ歴史ニ不見得ト、或翁之説ヲ承リ、  
 尤私共ニモ夫等ノ処ハ深ク注意罷在申候へ共、未常ニ  
 見聞ニ及不申候、就中佛ノ歴史等ヲ閱ミスルニ、利欲  
 傲驕ノ余ニハ、帝ニ反シテ或ハ流罪シ、父母兄弟離散

シ、友ヲ棄、甚數ニ至リテハ帝ヲ斬罪シ、高位ノ族ヲ  
 悉ク斬罪シ、罪ニ所セシ例數多ナリ、當時ノ佛帝ニ<sup>（朱）（ル）十四</sup>  
 ヒテヲヤ、己レノ帝ヲ追放シ、四年ヲ限テ誓詞シ、大  
 統領トナリ、其期ノ終ヘル期ニ当リテ戰ヲナシ、良臣  
 ヲ追払ヒ、万民ヲ推置、自ラ号テ帝ト称シ、○至命佛都  
 ニ止リ、抵抗セシ者ヲ悉ク砲劔ノ牲トナシ、殆ト道路  
 ニ血流セシトナン、○私共当国へ到着仕候御ハ、朦々  
 タル耳目ノ為ニ奪ハレ、万端歎賞ニノミ相傾キ居申候  
 処、日ヲ経ルマ、ニ、<sup>（佛カ）</sup>恐避スヘキノ節漸ク相頭、當時  
 ニ至リ一々善友ヲ求得、歐羅巴州ハ勿論、米州ノ風情  
 モ委曲承リ、唯取ルヘキノ小ナルト、避ベキノ大ナル  
 トヲ理解セシ次第御座候、英之政府ノ形勢モ、外面ハ  
 成程公平ノ哉ニモ、衆眉ハ相見得候へ共、反テ左ニア  
 ラズ、皆技巧權暴ノミト此英ノ説<sup>（俄カ）</sup>ヲモ承リ、実ニ其通  
 之事御座候、○己レヲ利センニハ、全ク道ヲ打忘、諸  
 州諸島ヲ掠奪シ、反強拒弱ハ欧州・米州ノ質ナリトモ  
 可謂歟、  
 別紙ニ通内一通ハ、右英人ヨリフハント氏へ乞求テ、  
 彼ノ真筆ヨリ荒増翻訳仕候、一通ハ同シク事情書、  
 右之通疎暴之文面等ヲ以テ恐奉申上候間、宜御披露

被下度奉頼候、恐々謹言、  
本ノマ、(五慶元九年)  
辛七月十日

(吉田備成)  
永井五百助

(數島尚信)  
野田仲平

(森有九)  
澤井鐵馬

(糸來和彦)  
松村淳藏

(畠山義成)  
杉浦弘藏

大久保一藏様

伊集院左中様

#### 四四四 〔職制改メ〕

御納戸并御広敷支配与力之儀、都テ御兵具方支配被仰  
付候ヘトモ、勤方有之者ハ、当分之通相勤候様可申渡  
候、

七月十日

(准久武)  
右衛門

#### 四四五 三島彌兵衛開墾ノ事実

七月十二日 晴

三島彌兵衛殿、一昨九日ヨリ滞在ニテ則宿ヲ賜候、大

和芝村織田豊後守侯之藩臣ニテ、浪人イタシ居候町田  
内膳殿召列被下候者之由、夫ニ河内之百姓一人召列候、  
木綿等作方能スル人ニテ候由、此節一列ニ地方檢者樋  
口休右衛門殿也、

#### 四四六 〔京説云々〕

七月廿一日

(采)(巖田名)

一昨日カ京都ヨリ大山彌介下り候由、京説種々有之候、  
會津・桑名両家守護職御免相成、帰国被為命候由、然  
処両家不致承服候テ、既ニ此挙薩藩ノ仕業ト奮激致シ、  
今月十一日既ニ両家兵ヲ繰出シ、戦争ニ及候勢ニ成立  
候テ、薩藩ヨリモ手当相成リ、太守様并(采)(珍彦旧名)重富備後殿  
日之御門御堅御出張相成候由、然処越前侯・尾州侯中  
ニ入り、漸々鎮靜相成候由、  
將軍家ニモ辞職御免ニテ、關東へ帰国被為命候由、且  
ツ五摂家被為廢候テ、議定職薩・越・土等五家へ被仰  
付候由、摂政・関白等ヲ廢候由、大變革稀代ノ珍事ニ  
テ候由、



四四七 兵庫開港ニ就テ種々ノ説

七月二十二日

此度兵庫開港ニ付、江都・浪華ノ人氣大ニ沸騰シ、日々種々ノ新聞承知仕候、就中大坂御舟番所御舟藏地面ハ、近々御渡シニモ可相成、ミニストル・コンシユウル及テヨウチ等罷越申候趣ニ御座候、

一別紙町触之通り大産物会所ヲ建テ、諸国ノ産物税ヲ取り、且又大坂商人ノ金ヲ以テ国々ノ物品ヲ引出サセ、幕之一手ニテ外人ニ直渡シ致候様ノ曲策、只今シキリニ相計リ居申候由、

一右変革大ニ運ヒ申候得ハ、追々諸藩相苦申候ハ必然之至ニ御座候、是レ不容易義ト存込、(朱)龍馬・淳輔ナト、(坂本)相計リ、龍馬ハ此度入御一覽候冊ヲ作り、(伊藤俊介)過日京発仕、(朱)彼ノ地ニ於テ藝州ノ家老ヲ解キ、(伊藤俊介)土ノ手不出シテ、幕ノ策ヲ破裂セシメンカ為ナリ、大坂ニテハ淳輔・谷崎七右衛門ニ、此度ノ改革ヲ探索為致、近々龍馬帰坂之上大ニ尽力シテ、此度ノ変政ニ応シ、浪華中ノ人望ヲ取可申候、左候時ハ商法盛大ニ運ヒ可申哉、大愉快ノ至ニ御座候、何ハトモアレ此度ノ大機會ヲ失シ候テハ、

何事モ水ノ泡ト相成リ可申、ヨク〱御賢察可被下奉願候、閣筆、

七月廿二日

静海拜

大東君

再言申上度義ハ、如山御座候得共、御存之通能筆ニ御座候間、無是非次第々々浪華形勢直之進ヨリ、委細御承知可申上候也、

四四八 久光公御帰国

四四八ノ一

七月廿四日

中将様大坂ヨリ御病氣ニテ、蒸氣船ヨリ御下国御光着被為在候由、且此節諸郷衆中七小隊上京被仰付候由、

四四八ノ二

七月廿六日晴

今朝四ツ時主殿殿御帰リニテ候、昨日飛脚ノ音ニ、今般諸郷兵士七小隊上京被仰付候付、主殿殿総督ニテ被召登トノ世評之由、

四四九 本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

(鹿兒島ノ形況)

京師

大久保一蔵様

本田彌右衛門(親雄)

平静要詞

尚々時季折角御自愛專要奉存候、

翔鳳丸出坂ニ付、一筆啓上仕候、残暑未退候得共、弥御健康被成御在京、奉遙慶候、扱も暮・長闘戦之次第、追々御聞達候半、十余度之敗績、惣督さへ帰国之申出

ニ成立、且小倉表各藩人氣不平、小閣老無謀狂策も、

今ハ施ニ術尽候様子、細縷他より申上候半、閣筆申候、

先比より度々御下坂も有之候由、実ニ大事之御場合、

東西御配慮奉推計候、猶此末如何之形勢ニ可相成哉、

不差支事件ハ御洩可被下候、御当地海陸軍局御取起、

人心一涯振興り可申之御素地、殊ニ非常之御改革被

仰出、君辺より第一冗費御省キニテ候故、已来ハ本

途ニ被行申候半と、実ニ以愉快之御処置と存申候て、

感服ニ不堪次第、(朱)(久光公)二城公御用途金之内、一万兩ハ兩

軍局(朱)(前記別懸)へ御下ケ渡被仰出、恐縮之至、御趣意難有次第ニ

て、此時ニして海軍も不振ハ、是限之事と存申候、吉(朱)(幸)

井(幸五郎)・奈良原杯混物はまりニテ、小松大夫大抵ハ海軍局

へ御出席ニテ候、尤都之城跡へ御直し之一条、不容易

内情も彼是有之、運ひ兼候形勢も候処、二城公御英

断今ニ不始事ながら、感服之事共筆紙上ニ難申尽候、

是非一日も早く海軍を振興第一と存申候、小拙杯ニ至

り微力之及候丈と心力を尽し申候、御遙察可被下候、

海軍兵士英式調練も随分出精、折角練磨最中ニテ候、

此内より一翰奉捧候含之処、何鹿兎紛擾御不沙汰申上

候、乍筆末愚弟謙介、当四月上京いたし、今以相詰居

申候付、万事可然御差凶御叱り被下候て、宜御頼申上

候、(朱)(政風)(良節)(正徳)内田・藤井・高崎諸賢へ乍憚御伝声奉頼上候、

周防なる岩國山のやまをろし

はけしく吹くといふハまことか

御笑吟可被下候、是ハ先日之出船より差上候含之処、

取残申候付、今日書認申候、種子島へ漂流之英人三人、

内老人ハ船長次官之次ニ列候水夫方取払勘定方、老人

ハ第一等之水夫ニテ、老人ハ黒夷料理役、皆共船業ハ

熟切之者と相見得候、去ル廿日慶府へ来着ニテ、当分衣

類等を給与し、丁寧ニ会釈いたし申候事ニ御座候、先ハ

一書御伺迄如斯御座候、猶奉期后音之時候、恐惶謹言、

七月廿七日

本田彌右衛門

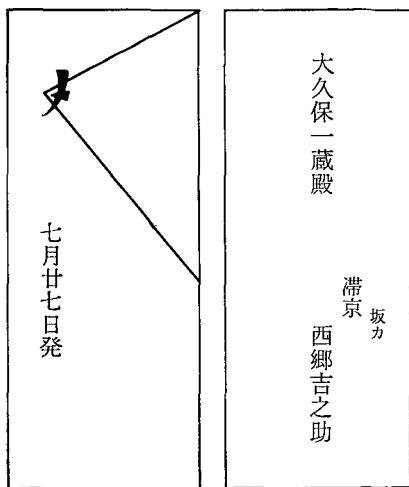
大久保一蔵様

侍史

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四五〇 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

表 面



昨朝六ツ時分着坂仕、英人之旅宿相尋候処、当春参居  
 候節罷在候寺江宿いたし居候趣相分候付、(本) 〔本〕時書記居  
〔兼通弁〕 早速薩道江、(サト) 之  
 懸合いたし、今日何時ニ参候て可宜哉尋遣候処、七時

ニ可参旨申来候付、右刻限差越候処、只今寢覚候処ニ  
 て御座候故、二階江伴行候付、ミニストル着坂之段  
 御承知被遊、態と使者を以時候安否御尋として被差遣  
 候段、一ト通挨拶申入候処、今日ハ本國江飛脚差立候  
 付、十時迄ニ相仕舞、十一時半頃より登城之由承候付、  
 格別要事有之義ニテハ無之、只着坂之祝儀旁々見舞之  
 為ニ参候事故、多忙中却て煩敷候間、面会ハ不致候付、  
 宜敷ミニストル江申入呉候様申述候処、ミニストルニ  
 ハ是非面会いたし度候得共、至極取込居候間、今日ハ  
 御断可申入との事ニ御座候、今両三日ハ滞坂之賦と申  
 聞候処、是非逢度との事ニ御座候間、両三日中ニハ面  
 会可致も不被計候、来月二日ニは爰許出帆いたし、江  
 戸之様罷歸賦と被相聞申候、  
 扱薩道江逢取見候処、全已前通之訳ニテ、格別何も相  
 替候向とハ相見得不申、依然たる次第ニテ、柴山之疑  
 迷とハ大ニ違ひ申候故、先日より御咄申上居候通、大  
 坂商社仏人と取結、大ニ利を計候趣委敷申聞、仏人之  
 つかわれものと御咄之通言掛、些腹を立させて見度賦  
 ニ御座候故、佛ニ憤激いたし候様説込候処、大ニ能ク  
 乗り、思ひ通ニ為被發候処、段々意底を咄出し申候間、

左之通御座候、

一 仏人より日本之形勢を論し試度申掛候付、随分議論いたし度、薩道より返答ニ及申候処、仏人申ニハ、いつれ日本も西洋各国之通、政府一般之ものニ相成、大名之威權を不除候てハ不相濟候付、第一長、薩之二国を打亡し度候付、俱ニ打平候方宜敷ハ有之間敷哉と申掛たるよし、其節薩道より相答候ニハ、先度之再討之次第を以可見、纔之長州一国さへ打てざる政府にて、諸大名之權を除杯と申義ハ、顯然不相叶事ニ御座候、左様之弱きものを、如何して助らるゝものニ候哉と申述候処、一言もなく夫形論ハ不出来と相咄居申候、右等之論を公然と仕出す事候間、必政府を相助候て、諸侯を打之策を廻し候義ハ相違無之、兩三年之内金を集め、機械を備、佛之応援を頼ミ、戦を始め候所存と被相同申候間、其節ハ必佛も軍兵を發し応援可致候間、いつれ相對する所之大国を応援ニ不備置候てハ、危き事ニ成行候半、其節ハ英国ニおひて同じく軍兵を押し出し、守護可致と申触れ候へハ、佛之援兵ハ決て動かし候義ハ不相叶候間、前以能々相結候処肝要と相咄事ニ御座候、  
第一 英国之所存ハ日本国

王政柄を握らせられ、其下ニ諸侯を置いて、国体之立方万国ニひとしき制度ニ相成候処、第一ニ願居候訳にて、此度も英国王より

日本国王江之書翰を幕府江差出候由、右ハ全体

先帝崩御之儀承候て、御悔状差出候趣と相聞れ申候、是もいつれ

帝王江幕府より被差上、右之御返翰無之候てハ不相濟事候へ共、いまた返翰も無之と申居候、夫程日本

皇帝之処主張いたし候へ共、京都にてハ其 思食ハ更無之、京地ニ異人を入れ候てハ、汚れ候杯との説のミ

之よし、右等之ものにてハ不相濟候付、万国江被對確乎たる政体を以、交際之処も普通之ものニ不相成候て

ハ、相濟間敷と申居候、何ぞ英国江御相談被成度義も御座候ハ、承知いたし度と申掛、応援相頼候ハ、

引受可申との口氣にて御座候故、日本政体変革之処ハ、いつれ共我々尽力可致筋にて、外国之人ニ対面皮もなき訳と返答いたし置申候、

一 仏人横濱ニおひても利を貪り、自分勝手ニ取組候始末、

一 円不承知と相聞れ申候、全英国ハ商法を以相立候国柄にて、此商法之妨をいたし候義ハ、どこ迄も不承知

と至極憤激之体ニ御座候、

一長崎ニおひて英人船頭を兩人殺し候もの有之、いまた相手不相候由、全土州人之仕業と申触し候趣ニ被相聞申候、余程土州を悪しく申含候向ニ被相聞申候、薩道杯越前より陸行之節も、伏見辺江土州人待伏居候杯、其外京師にて乱妨いたす杯し、又ハ博徒を集候杯との説余程言込候向ニ被相聞申候、長崎之異人殺し土州人共ニて御座候と、大ニ害を成す事と苦察いたし居申候、一越前江參候節ハ、誰人も出迎無之、田舎ニてハ郡奉行杯出会いたしたる由御座候へ共、城下ニてハ全誰も不出候て、酒肴杯之馳走ハ余程いたし候由、薩道不合点と相見得居申候、

右之通要用迄荒々如此御座候、明日八十時より薩道此方江參との事ニ御座候間、尚又咄も可有之と相考居申候、今西三日ハ滞在可仕候間、左様御舎可被下候、至極薩道之口氣ハ幕府を罵居申候、委敷義ハ御直話と申残候、恐々謹言、

西郷吉之助

七月廿七日

大久保一蔵様

〔大久保利護氏所蔵本にて校訂〕

四五 一 五藩御届書 (五卿帰洛ニ就テ)

筑前太宰府表ニ在留之五卿方、御帰京ノ儀ニ付テハ、当春公辺ヨリ被仰出通ニ付、一刻モ早ク其運ニ相成可申筈之処、三條實美公御所勞、依テ是迄遅延ニ相成居候、然処、最早漸々御快復、何時ニモ御帰京不苦候へ共、長防寛大之御所置被 仰出候処ニテハ、右御所置之処相分候上、帰京相成候後、順席ヲ得可然トノ趣、大隅守殿存慮ニ付、右之通ニテハ如何可有之哉之段、於薩邸各藩集會及談合候処、重役共登京ハイタシ居候へ共、何分此件ニ限り取極儀儀難相成、国元々々へ通議之上ナラテハ決シ兼候付、各藩急飛ヲ以及通議置、相決候上治定之儀御届可仕ト申談相整候処、通議海陸相隔反復今暫隙取可申候間、此段不取敢御届仕置候、以上、

七月廿九日

五藩留守居

連名

四五 二 洋風流行ニ就テ諭達

西洋各国之事情追々相開、学問ハ勿論、技芸ニ至迄日々新ナル次第候処、只彼ノ所作而已心ヲ留候テハ、国家振興之道無覚束、終ニ外国之制度ニ推移候様相成候テハ、専皇國之体ヲ失候事ニテ、人氣不相振基ニ候、就テハ英國杯ニヨヒテハ、我之國体ヲ振立候儀重一之<sup>(イ)</sup>処ヨリ、治乱之政事モ并進、人民競起候訳ト相考候付、風土人質ニ依リ制度マテ自然相替訳候得ハ、我之國体ノ振立、彼之所用之良事ハ必取用、時勢ニ応シ斟酌有之候様可申渡旨被 仰出候条、此旨向々へ不洩様可申渡候、

七月晦日 右衛門

帶刀

伊勢

但馬

#### 四五三 久光公御帰國ニ就テノ風説(事實)

七月

<sup>(采)</sup>「久光」

中將様廿一日御光着相成候、御供養田傳兵衛殿・田尻<sup>(長胤)</sup>  
<sup>(種彦)</sup>務殿ニテ候、上町行屋開成所下ヨリ御着岸、御光着之

由ニ候、御病氣之由候、京師之模様不穩、此節諸郷七小隊被差出候由、御城下一隊都合一大隊之由候、此兵廿八日方出帆之由候、主殿殿ニモ一昨日帰路、中途<sup>(采)</sup>「全殿表巻」迄島津登殿外ニ一人迎ニ被参掛候由、右ニ付大窪泊之賦之処、直ニ泊リモ無之、夜通シニ陸地帰リ相成候由、何カ火急之事ト被察候、又今日之説ニ、京師へ小松帶刀殿・關山<sup>(金生)</sup>紮殿居留リ相成候、西郷吉之助・大久保一藏モ同断、暴論相企候風聞也、主殿殿此節御前御用之儀ハ、御役入之上、直ニ上京相成候半、付当世態ヲ以送別之一首、

なみ風のたつのさはきもきみかてに

おさめぬあまのみやこならまし

#### 四五四 (上京ニ就テ乗船計画書)

七月

<sup>(采)</sup>「我久光」

太守様ニハ、来ル十三日御乗船之賦之由、段々京師之模様モ物議沸騰、諸人危険之念不少故、色々申立候哉、先ツ穩之向ニ都合相成候由、小松・西郷モ此涯上京ハ無之由候、主殿殿ニハ病氣快氣次第近々出立之筈ニ、

書付ヲ以伺相成候由、御供御家老島津伊勢殿、御側役  
島津求馬・田尻務・蓑田傳兵衛、海軍方ハ与頭島津相  
馬、陸軍方ハ島津式部・島津小平太・島津藤十郎・末  
川主税四人ニテ候、

御召船 三邦丸

御軍艦 御家老 陸軍掛御用人 御軍賦役頭取

御軍賦役 御供目付

豊瑞丸 大砲隊 遊撃隊

翔鳳丸 一番隊ヨリ 三番隊迄

平運丸 四番隊ヨリ 六番隊迄

此節御上京御供方総テ船中御賄、并御用物諸人荷物運  
賃上納ニ不及、返銀荷物積卸、上船中御賄方銘々御船  
船頭受持被仰付候由、且ツ諸所荷物船・伏見川船手当  
之儀、銘々諸隊役掛ヨリ受持被仰付候由、

四五五 對州藩多田捕縛セラル

對州脱藩多田壯藏

改 名橋為一郎

又 立花與一郎

右七月十八日鶴嶋荒神江川端町家ニヲヒテ、新選組へ  
被召捕、妾并下女共町奉行方へ引渡、

右之者元来去ル子年七月、長藩士天王山へ屯集之砌、  
京都邸内ニ有之テ、長藩毎度之歎願ニ付テハ尽力イタ  
シ、同十二三日比天王山へ組入、暴挙ノ砌モ境町之手  
へ加リ、敗軍之後尾老公御討長之比ハ、筑前博多對州  
屋敷へ、同脱藩加納節心・久留米淵上幾太郎・大和落  
林芳太郎・因州南長次郎等五人同所ニ罷在、翌々寅五  
月對州内願之砌、平田大江ニ党シ、回天隊之者ヲ引纏  
ヒ本州へ討入、其後又々博多へ寓住シ、或ハ薩・長之  
間ニ有テ周旋シ、当表へ来リ、二本松ノ薩州邸内ニ櫻  
井庄次郎對州脱藩ト名乗リ潜伏、其後今般之町家ヨリ  
薩藩之趣ヲ以寓居シ、尤薩之下宿札ヲ張り、公然ト罷  
在候処、何事ヨリカ発覺シ被召捕、但櫻井庄次郎事  
ハ、去ル九日当地出立、帰薩イタシ候由、

四五六 現今時藩ノ時情ニ就テ布達

近年

皇国不容易形勢ニテ、臣子之御情合御徒居難被遊、御

相談之上〔卷一久光〕 中将様御儀御上京、天下之御為可被遊御尽

力ト之趣ハ、当二月委曲被 仰出置候通ニテ、 中将

様御上京之上、折角御尽力被遊候へ共、何分不容易形

勢之段被仰越、御模様次第ニハ、当春中被仰出置候通、

太守様御上京ニテ、至当之可被遊御忠勤 思召ニテ、

朝廷之御為不被為止時機相及候節ハ、如何之事實ニ可

立到モ難計候ニ付、人々 御趣意之程、兼テ厚相心得

居候様被 仰出候、此旨不洩様致通達、諸郷・私領へ

モ早々申渡候様、地頭・領主へ可申渡候、

七月

圖 書島津久治

右衛門柱久武

伊 勢島津廣兼

龍 衛川上久齡

刑 部新納久齋

内 膳町田久齋

此布達ハ藩内佐幕ノ俗論頻リニ起リ、西郷等ガ討幕説

ヲ主張シ、或ハ佐長之所為アルヲ忿カリタルモアリ、

交々ニシテ人心一致セズ、紛紜タルニ因リ、如此時勢

ノ急迫ナルヲ示サレタル者ナリ、

#### 四五七 岡藩士山縣小太郎小松帶刀ニ就テ意見書

御内覽

当今急務之事件ハ、即長防并兵庫開鎖之御所置ニ候処、

去月下旬殿下始新將其他御参代被為遊、恐多クモ幼

帝ヲ脅制奉リ、兵庫開港弥勅許ニ御取極相成候条、下

々迄追々詳知仕候処、先々事之先後ヲ以推究仕候得ハ、

第一長防御所置コソ先務ト奉存候処、左ハ無之、却テ

兵庫理不尽ニ御取開相成候始末、計ルニ遠略可有御座

候次第ハ、近年逆政甚敷、人心戰慄、物議天ヲ衝ニ至

ル、依テ幕意甚不平之場合モ可有御座候得共、少々差

支之意味モ候得ハ、其勢十分主張難相成ニ付、既昨年

來別テ佛夷ニ深取結、緩急応援之手配、其ヲ不待明白

ニ御座候、然トモ當時大小侯伯之御中ニテ忌嫌甚敷ハ、

唯御尊藩而已ニ候得共、百方施ニ術ナク、殆苦心之模

様洞察被致候、旁以今般開港取急、不日攝海へ異船呼

回シ、彼地へ根拠ヲ構、西国・九州海陸之咽喉ヲ断切、

朝勤之通路閉塞之上、心安ク 帝京ヲ挾、四方へ令シ

テ、天下ヲ恣ニ制御可致之籌策、必疑御座間敷候、扱

先達テ中ヨリ、 御尊藩外三侯夫々御尽力被為遊候得



共、乍恐于今御計取不被為行候儀ハ、全助幕ノ内奸  
天日ヲ障蔽イタシ、奸計死力ヲ窮候故大義通徹セス、  
朝憲被為立カタク候様窃奉相窺候、迎モ内々ヨリ御尽  
力被為遊候共、御成功連帯仕可申哉ニ奉存候、乍去今  
日輕拳ハ猶更難出情状、右ニ付愚慮仕候処、差当リ急  
務之第一策ハ、則追々之御尽力ヲ以長防事件寛大之御  
沙汰ヲ以、三條制札モ取除候事奇代ノ機會、此凶ニ応  
シ彼之候速ニ御登京、御尽力被為遊度、尤其術計ニ至  
テハ筆端ニテハ弁解仕カタク、御高断可被成下候、且  
兵庫 勅許之儀其事情最早四方へ相達候ハ、豪傑勤  
王之士ハ勿論、無知之凡民ニ至迄痛憤切齒、死力ヲ以  
邦家へ尽し可奉之秋、殊ニ藝州侯モ御出京、彼是以  
大機會ト奉存候間、何卒長州侯御登京之術施行被為在  
度奉存候、何分尋常之道ヲ以、順序ニ御尽力被為在候  
トモ、彼還テ非常之政ヲ以反詐窮カタキ奸計ニ出、忠  
良ヲ庄倒セントノ勢判然之事ニ御座候間、何卒非常之  
御大策ヲ以奸凶掃除ヲ遂、速ニ御成功被為在候様、怖  
伏テ奉懇願候、誠ニ蛇足之勞ヲ不顧、頑愚為国家ト相  
心得、奉冒嚴威候儀、御仁恕偏奉仰候、恐々昧死敬白、

本岡藩

〔卷〕  
「丁卯七月」

山縣小太郎  
〔通政〕  
〔寫德藏氏所藏本にて校訂〕

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
慶應三年 自八月  
至九月

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり  
(紙数五十四枚)〕

## 目録

- 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰
- 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕
- 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕
- 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕
- 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

- 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰
- 島津中将・宇和島少将建言書
- 紙幣発行布告
- 本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ密翰
- 久光公下坂願書
- 久光公下坂ノ布告
- 預リ紙幣交換ノ布告
- 外国人ニ対スル論達
- 漢医学稽古云々布達
- 紙幣交換布告
- 銀相場布告
- 医道振興云々ノ布告
- 山田孫一郎父母へ永別ノ書翰
- 久光公御帰国之御願書
- 藩令
- 西洋形汽船ノ数
- 他国人止宿取締布達
- 切支丹宗門取締布達
- 菱刈・真幸ノ各郷地頭職居地変更ノ達書
- 討幕説停止論達
- 佐々木寛蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

薩藩小松帯刀建白写外国条約事件

四五八 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

(高輪借地云々)

九月朔日辰刻

三時限

大久保一蔵殿

西郷吉之助

芳翰忝拝誦仕候、陳ハミニヘル銃(朱)(負意)かれ結等之義早々御遣被下、慥ニ御受取申上候、將(朱)(良助)又柴山東下之義、何様之御用欵ハ不相分候得共、フロイセンミニストルニハ、近日着坂之模様申来候、先月廿九日横濱出帆と之噂ニ御座候、当地ニテハ早宿等之手当ニハ相成居候由御座候、高輪借地(朱)(輪敷山)之義ハ、右様之振合御座候ハ、江戸ニテハ相調申間敷欵、いつれ当地ニテ御談判被成度事と相考居申候、此段ハ為御心得申上置候、頓首、

西郷吉之助

八月朔日

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

四五九 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

大坂

京都

大久保一蔵殿

西郷吉之助

中将様御機嫌能

御着坂被遊、尚御通り御塩梅も不被為替候段承知仕、

恐悅之御義難有奉存候、陳ハ

御交代之場ニ相運候へハ、

朝廷江被為対候ても、同盟之諸侯江対せられ候ても名分実義相立、無此上も御場合ニ到り可申と、是而已相祈居申候、御堀耕助も明日ハ爰許可致出立との事、国元ニおひても余程相待居候由ニ御座候間、差立候様可致候間、其許ニおひて宜敷御計可被下候、別段御留守居江も不申遣候付、宿等之義も宜敷御下知可被成下候、扱御堀一人昨夜私宅江参り、先一人之存慮と申訳にて申立候趣ハ、幸此度ハ末藩等上坂を被命候付、一挙之期限相定候ハ、三日前ニ上坂いたし候都合ニ仕向候へハ、如何可有之哉と申事ニ御座候間、邸中も一同右之処希居候事と相答申候処、先右之処ニ相決し罷帰可申、尚国元ニおひても得と談合いたし、取究置可申との事

ニ御座候間、左様御舍居可被下候、決て此処ハ相違ハ有御座間敷と相考居申候、全体右辺之処打合可申ためニ上京いたし候筋と被相伺申候、此旨奉得御意候、頓首、

八月十六日

西郷吉之助

大久保一蔵様

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

#### 四六〇 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

(長崎ニ於テ土州人外国人殺害事件)

今朝福岡藤次(字徳)参り、昨夜土州ヨリ之一左右有之タル由ニテ、英船之談判モ一ト通相濟、都テ奸策ヲ可破トノ趣意ニ被相聞申候、去ル六日英船洲崎港(高知県須崎)へ着相成、直様後藤英船へ参候処、何レ談判ニ付テハ、幕府へ引合之上ナラテハ手順モ不立事故、土州ト英国ト計ニテハ不相調、乍然是迄懇信ヲ結居候訳柄ニテ、情実ハ可相咄トノ事ニ御座候由、全此節之処疑念之相手相知候得(卷一(下千人))ハ、土州ヲ疑居候事故、戦争相始打破テ、英之疑念ヲ可晴ト之趣ニテ御座候由、就テハ後藤ヨリ返答致候ニハ、全事跡不相分、疑念ヲ以可戦条理モ有之間敷、勿

論右様之戦ヲ相始メ候テハ、各国へ対シ英国之恥辱ニテハ有之間敷哉、乍然戦ハ不好訳ナカラ、是非可致トノ事候得ハ、道ニ於テ可決戦、得ト取調候様申置候テ、其日ハ相止候処、同夜薩道上陸致シ、後藤ト懇信之処(A B Start)ヲ以談判候処、横笛ト申風帆船ト小軍艦トニ疑ヲ掛候モノト被相聞候付、幸小軍艦ハ土国へ繋居候間、右之船將トヲ引合可申候ニ付、委敷可承旨申置、翌七日幕役ヲ初異人目前ニテ、列座之上長崎ヲ出帆致候テ、汐掛等之次第詳ニ申聞候処、全ク長崎之風説トハ大相違致シ、土州之処ハ氷解之様子ニ御座候、何レ此上ハ土州ヨリモ尚又相手探索可致ニ付、長崎ニ於テ取調、若土州之者暗殺致候ハ、可然処置可致トノ約定ニ相成、早々長崎へ向ケ同九日ニハ洲崎港ヲ出帆致候由、幕船ハ土州ヨリ帰坂之賦ニ御座候処、英人ヨリ被相迫、是モ同様長崎へ相廻リ、土州ヨリモ坂本龍馬等数人乗組ニテ薩道ヲ乗セ、長崎へ相廻リ候由、ミニストルニハ横濱へ罷帰候向ニ被相聞申候、薩道ハ跡ニ残り候故、城下之方浦戸(高知県)へ相廻シ、城下ニオヒテ容堂侯御逢ヒ相成候由、ミニストルニハ未談判不相決候故、御断申上候由ニ御座候、長崎ニオヒテハ後藤

杯之留主ヲ窺ヒ、肥州刃カ又ハ幕吏共奸吏共奸策ヲ施

要詞

シ候事ト、土州ニ於テハ引受候向ニ被相聞、是非幕府之探索不出来内、相手ヲ土州ヨリ探シ出ヘシトノ心組ト被相聞候付、願クハ相手知レ度事ニ御座候、然レ共相手不相分ト申テモ、土州ト戦争ニ相成ル氣遣ハ無之処迄ニハ相運候筋ニ被相聞申候、薩道へ御逢ヒ相成候一条ハ、余程土州中之議論相起候テ、役人大心配致候筋ニ相見得申候、此報知之為ニ蒸氣船参リタル由御座候得共、是ハ兵之助公子ヲ御乗セ候テ帰国致シ、夫ヨリ直様後藤杯上京ト申都合ニ相決居候由ニ御座候間、不遠上京相成事ト待遠キ事ニハ御座候得共、先一ト安心ハ致候事ニ御座候、此旨荒々申上候、御都合ヲ以達御聴候儀共ハ、宜敷御取計可被下候、頓首、

八月十六日

西郷吉之助

大久保一蔵様

四六一 西郷吉之助ヨリ大久保一蔵へ書翰

〔大村兵士事件〕

〔巻封〕

大久保一蔵様

西郷吉之助

今朝渡邊清左衛門より国情之訳も有之、只今御差出相成居候大村勢、皆々引取候姿を以、拾七人丈ケハ是非相残され度、其内九人丈ハ、邸内江召置呉候様との事承候得共、何分込合居候邸中之事故、御即答ハ出来兼候間、得と取調いたし、何分御返詞可申上旨申置候、全体嫌疑を遮候手段と被相伺申候故、不残惣体御引扱被成候方、宜敷ハ有御座間敷哉と問掛候得共、是ハ得出来不申由ニ相見得、実情 御国江依頼之向ハ、相見得居候事ニハ御座候得共、長崎辺之小説を以相驚、役人中心配之筋ニ被相聞申候、いつれ明日より下坂可致候付、貴兄江御談し置可申候付、尚又御引合被成候様申置候間、左様御合置被下、宜敷御取計被下度奉合掌候、〔来一送巻〕別封大坂より、参候ニ付差上申候、御落手可被下候、此旨奉得御意候、頓首、

八月廿二日

〔大久保利護氏所藏本にて校訂〕

四六二 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔巻封〕

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

此度着坂相成候人数丈ハ、逆も滞在相調間敷候間、備後殿丈ケ御滞坂相成、余ハ皆次第々々ニ上京被仰付候方、宜敷ハ有御座間敷哉、左候て兩日中ニハ後藤之引〔采〕〔天政奉還〕合も可有之候付、決議之上ハいづれ成御伺ニ相成候て、御決定之御運ニ相成事候ニ付、其節ハ大夫御下坂被成下、御定策を以、御跡之処全御委任被為在候ヘハ、何篇都合可宜と愚考仕候付、又々卒度乍略義以書中奉得御意候、頓首、

九月七日

〔天久保利謙氏所藏本にて校訂〕

四六三 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔巻封〕

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

兩日ハ不奉得鳳眉候処、弥以御安康奉賀候、陳ハ世良〔盛徳〕より御取替之義願出、罷出候て御相談可申上相考居候処、家内病氣兩人臥居候て不得罷出、自由之働御座候得共、以書中御相談申上候、先日も品川より御取替相〔采〕〔松三郎〕願候由、同人着迄之処百五十円丈翻譯書板木相頼置候

処、急ニ金子不差遣候て不相濟由、品川着いたし候ヘハ

持參之賦ニて、其内御取替被成下候処、頻ニ歎願之事御座候間、暫時御取替ニ御座候故、鉄砲代も相巴居候付、其内より御取替被成下候ても、宜敷ハ有御座間敷哉、何分御賢慮伺試申候、何卒御返詞可被下候、将又別紙到来いたし候間差上候付、御落手可被下候、此旨奉得御意候、頓首、

九月廿七日

〔天久保利謙氏所藏本にて校訂〕

四六四 〔西郷隆盛ヨリ大久保利通へ書翰〕

〔巻封〕

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

御不快之由、甚以御不音いたし居申候、折角御養生可被成候、兩人看病方ニて夜白難渋いたし申候、実ニ難症ニて込入居申候、扱土州之後藤より、又々御相談之趣御座候由、大夫御宅江貴兄之処より帰掛參候て、尚又申述候由御座候間、貴兄御賢考之通、今日ハ建白書〔采〕〔天政奉還〕差出候様、御返答相成申候間、左様御納得可被下候、此旨乍略義以書中奉得御意候、頓首、

九月廿九日

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

四六五 五代才助ヨリ桂右衛門へ書翰

(岩下へ随行員帰朝云々)

長崎より

桂 右衛門様

五代才助

侍史 要詞

一筆啓上仕候、残暑難凌御座候処、愈御壮栄可被成御座、欣喜雀躍候、然は去月ハ澁谷・蕨田兩人帰朝、佛国之事情細々御聞取被下候半、就てはモンブラン<sup>(Mountain)</sup>杯多人数罷出候由、又老ツ之難体堪兼申候、私ニも両三日中より上海行いたし、使節其外待受、夫々談判仕候筈、壮之丞杯評議仕候付、其段は今日壮之丞罷帰申候付、御直ニ御聞取被遊被下度、私ニも其上使節一同罷帰候様仕度奉存候付、其上何事も御直ニ奉申上候様仕度、此節翔鳳丸便より、石炭方掛同郷安田五兵衛罷歸<sup>(朱)</sup>申候付、私方事件御咄申上置候様相託置候付、御多忙中恐入奉存候得共、御目通被仰付被下、御聞取被成下度奉希上候、乍末毫時候御自愛被遊被下度奉專念候、

先は御伺旁奉得尊意候、恐惶謹言、

八月朔日

五代才助

右衛門様

侍史中へ

追て、大小砲代金之儀、此節壯之丞必至之周旋にて

目当相付候由、老ツ也とも恐悅奉存候、段々申上度

事件も御座候得共、何れ不遠罷帰候上、御直ニ奉申

上度奉存候、

〔桂久春氏所蔵本にて校訂〕

四六六 〔島津中将・宇和島少将建言書〕

先般兵庫開港御差許相成候、就御達振事実顛倒仕候故、猶亦奉同趣御座候処、兩事件銘々見込遅速之異同ハ有之候得共、大樹・大蔵大輔・伊豫守参内之上、寛開之帰着ハ同様ニ付、御取捨ノ上被仰出候云々御達之御書面奉拜見候、防長之儀ハ大膳父子官位復旧、平常之御沙汰被及、幕府反正之実跡顯然タル上ハ、天下人心安堵仕、国内一定之基本モ可相居筋ニ御座候得ハ、第二之外夷之事ニ及、兵庫開港時務相当之御所置相成候テ、順序可相通トノ鄙見御座候得ハ、固ヨリ寛開之

掃着ハ同様ニテ更異儀無御座候得共、順序遲速之異同ハ瞭然相分レ候儀ニ御座候処、其段ハ趣意徹底被為聞食置候由、難有奉存候、就テハ当節上京之四藩モ申上候間、誠ニ不被為得止 御差許相成候トノ御文言御座候、(得其腕力)的当不仕、何等之儀申上候テ、不被為得止 御差許相成候廉ニ可有御座哉、御取捨之上

公裁之御旨趣一円安堵難仕、当惑之至ニ御座候、其節之模様大樹江可承合 御沙汰ニハ御座候得共、不容易朝議之枢機筋違江可承合道理無御座、再庇聖諭之趣ハ奉恐入候得共、前文之次第柄ニ付テハ、御請可奉申上条理弁別難仕候付、不顧多罪奉伺候、以上、

八月六日

島津久光中将  
(伊達宗政)  
宇和島少將

#### 四六七 紙幣発行布告

此節三貫文・四貫文預札之儀、検査文字裏印紙札ヲ以引替申渡候ニ付テ、諸御藏々并御普請場等今日ヨリ右三貫文之札丈ハ入払差留、上納分等有之者ハ、当人ニテ検査ノ裏印紙札、又ハ分札ノ内四拾八文ノ札ニ引替

致、上納候様申付候、此旨向々へ申渡、諸郷・私領へモ可申渡候、

八月

右衛門

明八日ヨリ検査文字ノ紙札、是迄通融ノ紙札都テ引替申付候条、御当地并諸郷・私領共ニ持合ノモノハ、下津端琉球砂糖卸場へ、札方掛御役々等出役被仰付候ニ付、同所へ可差出候、尤引替方ニ付テハ、金・銀・錢同様壹貫文付四文ツ、掛錢申付候、左候テ商人共右紙札ヲ以、荷為替願ノ者ハ、札方掛御役々へ相付可申出候、此旨向々へ致通達、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

八月七日

右衛門

#### 四六八 本田彌右衛門ヨリ大久保一藏へ密翰

(俗論蜂起其外)

尚々時分柄無御痛様、為国家御自愛專要奉存候、本文相認置申候処、今日之御艦宗卷(金五郎)より奈良原氏上京ニテ、就ハ内外之次第、同人より無残御聞取可相成、言外之情実愚毫之尽し得る所ニ無御座候間、相省申候、



昨年之冬さし上度存居候拙作排律卷首、御慰ニ奉入御笑覽候、

幸便一書奉拜呈候、晨夕秋涼相催申候処、益御勇健被成御座恐慶奉存候、久々御起居をも不奉伺候付、おもひ起し鴻信ニ旧誼を奉表候、野生無異区々罷在申候間、乍憚御放意可被下候、折々ハ高作とて詩共歌共人伝ニ拝聴いたし候て、誠ニ忙中之閑綽として余裕被為在候御事、とかく都下之氣韻欽望ニ不堪候、近来何となく騷友も乏敷、雅情掃地にて、塵埃中ニ致奔走候事、乍我遺憾不少御笑察可被下候、抑御上京已来 御建白等も屢被為在候処、十分御貫徹ニも至り兼候趣共伝承、彼是ニ付、御苦心御尽力之御事と独り奉遠察候、御一左右次第ニは、 太守公御登京可被為在候哉ニ付、二大隊余之御預備被仰出、当地当分外城衆中を始、夫々〔卷ニ番兵下唱ノ〕出府練兵毎度調練等有之、見る所甚以盛成形ニ候処、先年来御案内之通り折々之冗費不少、外国云々之引続キ府庫全く空虚、非常之御預儲は勿論、今日之御用途も日々と窮迫、出入之計算其權衡を被失候様ニ奉窺候付ては、心あらん人ニ限り、焦心慨歎いたし候折から之出兵云々ニ付は、第一京師之動靜如何にやと、唯日

々不時之變音を俟候て、忙然之外無之様子ニ相見得、早く大略を約て申候ニ、京攝之外形ハ、泰然無事、外藩も靜謐ニ時機を見る之形にて、〔采一當時一般如也〕我藩而已困苦して、強て事端を求るニ似たるとの迎慮説上下ニ押なへて、擾々たる次第ニ候、敬て窃ニ其由て来る所を推窮するニ、京・薩隔遠之地、音容ニツなから通し兼候て、時ニ臨候て馬耳風之論さへも浮起し、此節之出兵如キも、実ニ情意隔塞之処より、皆人駭驚いたし候ニ及たるなるべく被察申候、事變ニ臨てハ、唯義ノ在処を以、御進退有之は申までも無之、尊兄御始諸先生御熟評再三被尽織悉を、当地江も御掛合為有之筈とハ奉存候得共、不容易御大事件と奉恐察、似合ニ吾輩ニ至万分之一を奉伺、一心丈ニても安する所ニ安し申度、要路江も相候得共、於京地之 御深意万分之一之要領を承得ず、独長息いたし、欲已不得已愚説を申試候、此ニ至りてハ、誰そ可然を被差下候て、其地之大形勢并御熟評之始末、丁寧反復被仰進候て、今日之浮論を静鎮いたし、人心士氣を一定せしめ候事、肝要之御儀ニも哉候半と乍憚奉存候、折角陸軍局も被召建候て、御世話行届候御事なるへきニ、左もなくて出兵にても被仰出候ハ、

一涯士氣も振立可申を、只其向ふ所を不知様之有様にて、甚敷ハ此節之上京ニハ、病氣等申立候族多く、非常之形勢も汲受薄く、廉恥之道も無之、不可然云々之大夫御連名之御通達も、被仰出ニ立至り、浩歎ニ不堪ニテハ無之候哉、是前文にも申上候通、京・薩隔絶之なす処と乍憚奉存候、耳目之触る所大略右通ニテ、区々之長文にも及候得共、見る所を無腹蔵申上ルニテ、定て并蛙之御笑もとハ奉存候得共、更ニ不顧候、

一仏人モンフランと申者、海陸軍士官兩名ツ、・地学者兩人・商客兩人・從者壹人を岩下大夫被召列、不日入津之筈、小銃五千挺・大砲廿門、右之員數之仏服一襲ツ、強て御買入候様モンフラン申立、且兵式も佛則ニ可建と之云々、洋地ニおひて世話ニ相成候付、無下ニ理りも立兼候容子共、澁谷・蓼田之兩監馳帰候始末ニ付、伊地知壯州出崎、右銃砲之代価乍漸相調候て、此よりハ薩地江不乘入様理解之為、五代上海へ參る等、新納大夫御出崎、崎陽ニテ右仏人江御談判、海陸二事件御辭絶（久松）いづれも拙之拙成跡補、混雑之次第、逐一御承達相成候半と申省候得共、是等之事体ニテ府下一時騒然たる物議、能々御推計可被下候、一夷人之為ニ大ニ沸

騰を起し、野生にも掛被仰付候間、要路江も拙論を咄候事もさへ有之候位、内外之紛々傍觀ニ不堪、就中此佛一条ハ事微成ニ似て、其害不可謂事と只々慨歎仕候、上海之問答崎陽之結局、此末如何と案閱此事ニ御座候得共、天何そ可捨吾薩、しかし人事を尽して社と必至と思詰居申事、是等亦毫墨之不及所、深御察知可被下候、細悉之時態且心事申上候て、御教諭も承知仕度山々相合候得共、書不尽言候て実ニ残念之至、折ニふれ面論いたし、胸臆を申試度儀のミ千里之山川を隔候ては、一封之書たに信を通し申事稀ニテ、如何とも難成ハ是亦天也乎、御多忙ハ申迄もなく候得共、猷芹之微志御扶察不苦儀は至要之形勢、為御知奉渴望候、左候ハ、少は区々之胸懷を慰可申と奉存上候、先ハ御安否伺旁如是御座候、恐惶謹言、

卯八月十日

本田彌右衛門（親雄）

大久保一蔵様

侍史

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

四六九 久光公下坂願書

私事滯京仕候様、兼テ 御沙汰之趣難有承知仕居候得共、此内肺気症之煩ニテ、段々療養仕候得トモ全快不仕、頃日ニ至リ心下痞塞食事進兼、肺部痲痺起リ足不自由別テ難儀仕、全体病症夫地気候ニ不馴ヨリ差起、殊ニ秋冷相向候得ハ、外感等猶更大患ニ候段、療医ヨリモ申出候付、来ル十五日ヨリ一度下坂仕、精々保養仕度御座候、暫時御暇被成下候様、宜御執奏被成下度奉願候、以上、

八月十二日

島津大隅守

依所勞為保養下坂御暇願之趣、難黙止被聞召候付、願之通暫時賜 御暇候、聊ニテモ快方候得ハ、速ニ上京可有之

御沙汰候事、

四七〇 久光公下坂ノ布告

中将様御事此内ヨリ少々 御煩被為在、

御軽症ニテ追々御快方被為向候得共、秋冷ニモ相成、殊ニ土地之訳モ被為在、暫時御下坂 御療養被遊度、朝廷江御暇御願立之上、去ル十五日 御下坂、

御機嫌能被遊 御滞坂候段御到来候、依之御一列方并

島津左衛門一列、無役大身分・御役人限詰衆、明後朔

日御礼後居残席之謁ニテ、

太守様 中将様

可奉伺御機嫌候、

右之通向々江可致通達候、

〔島津久治  
圖書〕

四七一 預リ紙幣交換ノ布告

一三貫文・四貫文札

右預札ノ儀、検査文字裏印ノ紙札ヲ以引替可申渡置候処、追々濟寄候付、明後朔日ヨリ通融差留候条、

御当地ノ儀ハ来月八日迄、諸郷・私領ノ儀ハ同廿日限引替会所へ差出候様申付候、右日限相過差出候者

ハ、引替不相成候、

一錢五拾貫文・拾貫文札

但 白紙 判摺

右来月五日ヨリ引替申付候条、是迄ノ振合通ヲ以、札会所へ可差出候、左候テ諸御蔵々ノ儀ハ、明後朔日ヨ

り入浴差留、引付入之儀ハ、此節ノ新札ヲ以上納イタ  
シ候様申付候、(参)〔全〕下：西田ノ三町ヲ云三町ノ儀ハ町役共ヨリ取束差出、引替  
候様可致候、

右之通向々へ申渡、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

卯八月廿九日

右衛門

#### 四七二 外国人ニ対スル諭達

当時御当地ハ勿論、於他国モ異国人諸所致徘徊候処、  
全体日本ノ式礼向等致貫徹候訳ニ無之、尤書語ノ儀ハ  
猶更不相通、右様ノ処ヨリ不凶モ致失礼、打敷儀御座  
候モ難計、就テハ人々兼テ其勘弁モ有之、一涯謹慎ノ  
事ニ付、猶此上万一モ聊ノ儀ヨリ事起リ、終ニ及殺害  
候儀共有之候テハ、第一信義ヲ破リ候儀ハ無申迄、何  
レ罪ハ 上ニ歸候訳ニテ、甚以不軽事件、尤当時切迫  
ノ折柄、猶更無此上御国難相醸、不容易事候間、大小  
軽重深ク致斟酌、兼テ謹慎相守、法外ノ儀共無之様心  
掛第一ノ事ニ候、乍此上自然難閣時宜モ其場相忍、筋  
々ニ早々形行可申出、且詰合等無之場所ハ、彼方官吏  
ハ面会、理非曲直分明ニ相糺シ、相当ノ取計可致事候

条、比旨分テ可申渡旨被 仰出候条一統奉承知、聊心  
得違ノ儀共無之様、向々へ不洩様致通達、諸地頭・領  
主へ可申渡候、

八月

(島津久徳)

圖書

(桂久武)

右衛門

(島津広兼)

伊勢

(川上久齡)

龍衛

(町田久憲)

内膳

#### 四七三 漢医学稽古云々布達 (久光公特旨)

漢医学為稽古京・江戸其外へ差越度者ハ、以来  
御城下ハ勿論、諸郷・私領共医学院へ相付可願出候、  
左候テ掛奥医師其外篤ト吟味ノ上、兼テ医業心掛宜敷  
者人柄儘ニ有之、往々御用立者ハ形行ヲ以、奥医師委  
細致次書申出候様申付候条、此旨奥医師へ被申渡、向  
々へモ可申渡候、

八月

右衛門

四七四 紙幣交換布告

別紙之通検査之文字、紙札ヲ以引替方ニ付、左之通、

一三貫文

一四貫文

右式行此涯引替被仰付候、

一色札銅判札(券)〔文久二年ノ部參看〕

但

五百文・壹貫文・拾貫文

一白紙右同

但

拾貫文・五拾貫文

右式札ノ儀ハ、三貫・四貫文札引替済ノ上、引替被

仰付候間、比合ノ儀ハ追テ可被仰渡候、

右之通被仰付候事、

御藏々御在合紙札ノ内、三貫文・四貫文文ケ此涯引替

被仰付候間、於向々ニ取調ノ上、札方掛御役々へ向ケ

差越引替方イタシ、其内偽札有之候ハ、其分ハ御藏

々出入私ノ首尾イタシ置、何分被仰渡迄ノ間、札方へ

格護被仰付候事、

此節引替相成候紙札ノ内、四拾八文・拾六文ノ錢ハ、  
検査ノ文字押方ニ不及通融申付候条、此旨向々へ致通

達、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

八月

右衛門

四七五 銀相場布告

銀壹匁ニ付

錢百文

右ハ此節紙札引替相成候ニ付テハ、銀・錢取遣候儀通  
融申付候条、此旨向々へ不洩様致通達、諸郷・私領へ

モ可申渡候、

八月

右衛門

四七六 医道振興云々ノ布告

一本科・外科・鍼科之訳

一何某門人之訳

一年輩

一居所

右ハ医道致振興候様トノ趣ハ、追々手厚申渡置候通ニテ、自分医功有之者御登庸相成候儀共、勿論ノ事候、右ニ付無役医師明細書見合相成候間、御城下・諸郷・私領末々当分医道稽古ノ諸生人数モ、右之振合ニテ相認、支配頭主人等ヨリ取束、此涯医学院へ差出候様可申渡事、

但

已来共医道致稽古候者ハ、無間違可差出候、尤死失并医道取止候者モ可申出候、

#### 四七七 山田孫一郎父母へ永別ノ書翰

一翰啓上候、日々秋冷相催候得共、益御機嫌克被為遊御座候半、奉恐賀候、爰許中將様御病氣少ハ御快方ニ被為向、無此上難有義ニ奉存候、随テ私ニモ無異儀滞坂仕申候間、乍恐御尊意思召被遊被下度、倍此度中將公奉初、外三侯被為揃御上京被遊、  
(采) (一) 趣・字・土・權ノ四侯ヲ云  
皇国之御為幾度モ

天朝へ御献言、幕府へ御建白被為遊候得共、皆一橋・會藩之如キ奸臣謀策ヲ以テ、親王・公卿方へ四公ノ

御献言旁惡様ニ申込、一橋兵隊ヲ引率シ、(采)「兵隊引率云々風説」関白殿下

へ相迫ル等之儀多々有之、実ニ臣下之情合不可為之暴事ヲ行候奸臣ニ御座候へハ、天地ニモ不入之処、況天下之人民徒然仕候場合ニテハ無之義ト、感慨罷在候折柄、外三侯ニハ終ニ因循之御志被為起候哉、追々御帰国相成申候得共、君公ニハ此度ハ事不成、再御帰国之思召モ不為在、断然被為揚義旗王臣ノ御分ヲ被為尽思召ト、密ニ伝承仕候へハ、私ニハ毛頭再帰国仕儀更ニ考不申、

君被恥臣死スルノ秋トノミ存込罷在申候間、自然其時宜ニ罷成、君公被為揚御大事候へハ、私ニハ御先鋒ヲ相勸遂快死候テ、是迄之御国恩奉報、(采) (一) 御左衛門傳安父母・祖父君之御名モ顕シ、私之存分ヲ尽度日夜感慨罷在申候間、乍恐左様御安心、思召被遊被下度奉願上候、先ハ此段御暇乞旁奉申上置候、恐々敬白、

慶應丁卯

九月三日

山田孫一郎

有義 五

父上様

祖母上様

貴下

述懐ノコ、口御推覽可被下候、

玉敷の都へかへる浮くもを

秋たつ風にかけて払はむ

父君

有義

私儀一涯尽療養、少々得快気候ハ、早々上京可仕候  
ニ付、右之趣宜敷御執奏被成下、願意御許容被仰付候  
様奉伏冀候、誠惶頓首、

慶應三卯九月九日

島津大隅守

四七八 久光公御帰国之御願書

私事就所勞為療養下坂御暇、願之通御許容被仰付、早  
速下坂之上精々保養百端懸其術候得共、心下痞塞食事  
進兼、殊ニ脚部麻痺増長頃日ニ不相調、病因益加、精  
氣日耗、治術之功寸分相見得不申、既ニ經二旬如斯様  
体ニテハ、涯々順快仕候儀無覚束、別テ痛心仕候、兼  
テ滞京仕候様御沙汰之趣、且又少々得快気候ハ、速ニ  
上京可仕段、不容易 重命之趣モ奉拝承候上、奉恐入  
候得共、今形ニテハ仮令御用之品蒙 命候テモ、弁別  
拝趨之任ニ難奉堪、実以無致方次第御座候間、一往帰  
邑之上保養仕度候付、右之事実御洞察被仰付、以御重  
憐御暇被成下候様奉願候、今般島津備後上坂仕候ニ付、  
為名代滞京仕、御警衛且似合之御用途ニ相備候様仕度、

四七九 藩令 (紙幣交換并中将公御所勞御帰国云々)

一錢五拾貫文并拾貫文

但

白紙銅判摺

右ハ紙札去ル五日ヨリ引替方申渡置候処、追々濟寄  
候ニ付、明後廿二日ヨリ通融差留、御当地ノ儀来ル  
廿九日迄、諸郷・私領ノ儀ハ来月十五日限引替会所  
へ差出候様申付候、右日限相過差出候者ハ、引替方  
不相成候、

柿色銅判摺

一錢五百文

中将様御所勞付、涯々 御順快不被為在、一応御帰邑御  
保養御暇被成下度、左候テ備後殿上坂ニ付、為御名代

御滯京、御警衛向御勤、朝廷へ御願被仰上候処、去ル

十四日伝奏飛鳥井中納言様(雅奥)ヨリ被相達儀有之、可罷出

旨難掌中ヨリノ御切紙到来、御留守居罷出候処、今般

御所勞ニ付テハ、御残念ニ被 思召候得共、情実難被

黙止、一先賜御暇候、精々加養順快次第再ヒ上京可有

之、備後殿上坂ニ付滯京、御警衛且御用向被致勤仕度

旨、神妙ニ被 思召候条、為名代可有上京被為蒙 勅

命候、右ニ付御狩衣一領・夏扇一箱御拝領、且御脇息

一御道中用ニモ可相成旨、被遊御拝領候旨御到来候、

依之地頭ノ儀、書状ヲ以御祝儀可被申上候、御当地へ

参居候分ハ、今廿一日御光着、御祝儀後席々謁、御家

老可被申上候、談合役并地頭用且嘸・与頭ノ儀ハ、於

仮屋同断可被申上候、御当地へ参居ノ分ハ、有来通可

申上候、

右之通 太守様 中將様へ御祝儀被申上候様、向々

へ可致通達候、

卯九月廿一日

伊勢

内膳

龍衛

取頭

伊集院十右衛門

#### 四八〇 西洋形汽船ノ数

一 開闢丸

右長崎表へ板類其外御商法品送、

一 三邦丸

右此涯為御試、全ク之御勝手方支配開成所附、

一 萬年丸

右越前卜商法運漕、

一 翔鳳丸

右同、船都合ニ依リ御商法運漕、

一 豊瑞丸

右此涯大島白糖方へ宛行、

一 乾行丸(軍艦)

右銅庫入替之上攝海備付、

一 小蝶丸

右ホードイム方へ御払、

一 平運丸

右長崎表御払前補之為御売却之賦、



都テ蒸氣船 八艘

内式艘 御払

現 六艘

右之通船賦被定置候、

外ニ

櫻島丸〔朱〕〔藩名ヲ以長藩ニ買入ル〕

風帆船

立田丸〔采〕〔全上〕

右式艘ハ船賦ニ不被召入、

#### 四八一 他国人止宿取締布達

当年モ野繫・苧敷・草切等最早相成、去年モ今時分段々放馬・盜馬等有之、其段ハ其節申渡候通ニテ、弥掛念之至ニ付、兼テ取締ハ有之事候得共、夜行或ハ堂泊、何方ニテモ他国人抔止宿為致候事抔吟味被致候テ、上場又ハ諸村辺鄙之在々不知処之者、一切通行見咎目候様、屹卜取締向行届候様可申達旨、御地頭被仰付候、此旨申、

九月

旗預〔朱〕〔軍政改革後一郷ノ長官ノ名〕

#### 四八二 切支丹宗門取締布達〔長崎浦上村云々〕

切支丹宗門 御大禁ノ儀ハ、一同承知ノ事候間、従前々嚴敷御取締被仰渡候処、近頃長崎表へ邪宗致帰依候者余多有之、御奉行所ヨリ被召捕候段相聞得、右ニ付テハ与党之者共、宗旨引入方トシテ、近国諸所へ差越候段モ相聞得、御領内へ忍入モ難計、殊更商人等ノ儀ハ、彼表諸所往来イタス事候得共、自然彼カ妄説ヲ以邪道ニ引入候惡計モ難計、右宗旨ノ儀邪法ハ申迄モナク、人倫ノ大法ヲ乱シ、於 皇国ハ第一神明ノ被為惡計、合ニ付、聊取違無之様可相心得候、万一御禁制ヲ犯、右宗旨致執行候者於有之ハ、屹度可被処嚴科候間、此旨向々支配頭又ハ主人等ヨリ嚴敷可被申渡旨、向々へ不洩様致通達、諸郷・私領へモ早々可被申渡旨、地頭・領主へ可申渡候、

九月

右衛門

#### 四八三 菱刈・真幸ノ各郷地頭職居地變更ノ達書

一大口 山野 鶴田 羽月 湯ノ尾 馬越 曾木 本城

横川 溝邊 (地頭)

但

当分通大口へ可罷在候、

伊集院伊膳(久盛)

一 加久藤 吉松 栗野 諸真郡吉田 馬關田 飯野

地頭

高崎兵部(五六旧名)

外郷々略ス、

右ハ此節英式軍制ヲ以諸郷々兵隊ノ組合被相替候処、  
当分通地頭組合ノ俣ニテハ、一隊中ノ郷々入交リ、不  
便利ノ場所モ有之候付、不差障場所ハ当分通ニテ、其  
外地頭組合被相替、左候テ一大隊与合中ニテ、二ヶ所  
ツ、要枢ノ場所候ニ付、右郷々へ右ノ通地頭被召置、  
攻守応援ノ時宜ニ随ヒ、御城下藩屏ノ任ヲ尽シ候様被  
仰付候、

右ノ通被仰付候旨被 仰出候条、此旨申渡、向々へ  
致通達、諸郷々(采)〔御主等ノ改題〕中並私領へモ可申渡候、

九月

伊勢

取頭御用人

上村直兵衛

#### 四八四 討幕説停止諭達

家老中へ

天下之形勢紛々擾々タル姿ニ立到、慷慨悲歎ニタヘス  
候折柄、当春越前・土州・宇和島三藩へ深申談、

朝廷ハ勿論、幕府へモ人事之限建白致候得共、御採用  
之義無之、唯吞声涕淚之外無他候処、豈料乎我等趣意  
勿体ナクモ、於京師無名之干戈ヲ以、討幕之挙動相催  
候儀ト心得違、議論区々末々ニ至テハ有之哉ニ候、甚  
以意外千万之至候、今度又々出兵相違候ハ、長州末家  
之者浪華迄御召呼被仰出候付、如何様變動相生シ候モ  
難計候間、

禁闕爲御警衛右式ニ相及候次第ニ候、万一非常相生候  
節ハ、上奉安

叡慮、下万民ノ騒動ヲ鎮静シ、聊卒尔之働無之様、京  
都詰重役共へ申聞置候間、其旨宜相心得、諸士へモ右  
之趣意貫徹候様可取計事、 中将様御上京中爲

皇国被遊御尽力、且非常御警衛トシテ、此節出兵被仰  
付候御趣意之趣、御別紙之通御書取ヲ以被仰出、何共

奉恐入難有次第二候、依之一統謹テ奉承知、御旨趣深致貫徹、屹卜心得違有之間敷候、此旨向々へ不洩様早々致通達、諸郷・私領へモ不洩様可被申渡候、

慶應三年卯九月廿八日

圖書

右衛門

伊勢

龍衛

内膳

四八五 佐々木寛藏ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号九一と同文により削除〕

四八六 薩藩小松帯刀建白写(外国条約事件)

此度改テ条約

官許相成候ニ付テハ、交易ノ分一輪于

官トノ御建言被為在候御方在之候由、是ハ如何ノ御儀

ニ候哉、根元此度ノ条約

御許容トハ乍申、誠ニ不被為得止、被

仰出候御儀ニテ、是迄ノ条約面不応

叡慮、新ニ取調、諸藩衆評之上、御取極ニ可相成筈ニ候得ハ、一旦御許容トハ申モノ、是ハ一時ノ権宜

ニ候得ハ、追テ大將軍ヨリ御伺ノ時宜ニ寄、弥必翻

然被改

叡慮、是迄仕来候交易同様、御差許トテハ在之間敷候、

然ルニ早分一ノ利等ニ目ヲ任候テハ、彼醜夷等カ所業

ヲ学ヒ、利慾ニ心ヲ懸候様ニ相成、十ヶ年已来誓

神明、布告天下被遊候攘夷鎖港等ノ字面ハ、如何相成

可申哉、攘夷ヲ変シテ鎖港ト成、鎖港ヲ変シテ

勅許ト成、如斯変シ候テハ、猶此末如何相変候哉、変

ノ極ル所ヲ知ラス、豈不可歎息哉、且此度之

勅許ト申ハ、強梁跋扈之迪面申請候事ニテ、万々

朝廷ノ御本意ニテハ無之由、然ハ何ソ分一ノ利ヲ貪リ

テ、沾蛮販貊ノ響ニ倣ハンヤ、此事努々御採用被為在

間敷候、諸藩衆議十二八九

御許容ニテモ可然哉ノ衆説ノ由ニ候得共、今一二分之

処異同有之由、是全和魂ノ未墜地所ニシテ、義氣之所

発見ナリ、譬ハ顛木之由藥有ルカ如ク、追々暢茂繁衍

スレハ、終ニハ大木トモ可相成、屹ト棟梁之御用ニモ

可立、左有時ハ棟橈之懼モ無ク、再国運挽回

叡慮貫徹ノ期モ有ヘク、夫迄ノ処唯々

御恭黙被遊候テ、決テ尤<sup>本ノ</sup>メニ倣フテ、利慾ニ泥ミ、赫

々堂々タル 神統御汚シ不被為遊候様、御輔弼之御尽

力奉仰上候、

九月

慶應3年(1867)

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
慶應三年十月

## 目録

木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰  
 (木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰)  
 上京請願者へ諭達  
 島津主殿上京  
 長州ノ汽船入港  
 大政奉還ニ就テ日記  
 大政奉還云々藩内布告  
 茂久公御召御封物

佐幕論者建言ニ就テ御訓諭  
 諸家重臣留守居等御呼出廻達  
 諸藩重臣御喚出  
 渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰  
 幕府ヨリ八ヶ条伺  
 徳川家ヨリ伺書へ御張紙之写八ヶ条伺ニ就テ  
 小松帯刀ヨリ伊地知へ書翰  
 諸藩上京御達書報告  
 吉井幸輔ヨリ在江戸益満・伊牟田へ密書  
 松平大隅守ヨリ達  
 廣澤兵助ヨリ黒田・東郷へ書翰  
 前原・藤井ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰  
 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰  
 藩内守備命令  
 言路洞開布達  
 出軍請願者へ諭達  
 無名ノ紀事  
 鹿兒島ノ形勢及ヒ俗論党ノ流言  
 赤松小三郎暗殺セラル  
 兵庫小豆屋ヨリ届

岩下・市來帰朝

仏人モンプラン及ヒ職工等來ル

太守様御上京布告

竹下盛徳日帳抄

島津忠寛來慶諫言

岩下・五代對話五代演舌ノ大意

島津修理大夫・松平安藝守・松平土佐守議奏

#### 四八七 木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

拝啓、秋冷之節に御座候処、弥御清適に被為居、大賀

此事に奉存候、近来打絶御疎濶に申上奉恐入候、京地・

長崎等においては、同藩之もの逐々御厄害に相成、蒙

御高意候段難有奉存候、于時先日大久保・大山二先生

弊国御來光、京地近況をも相窺、乍恐

君上奉始御一統様不容易御苦慮之段奉恐察候、然る処

其後逐々上国風説等承知仕候辺にては、種々之流説等

も有之、且時機も自然と相移り候有様に付、寡君父子

において、必竟為

皇国煩念に堪へられず、此度稻原治人・野村靖之介と

申候ものを貴国に被差出、思召をも被相窺度所存に御

座候間、万端よろしく御駆引被仰付度奉願候、熟々当

今之光景愚考仕候処、前途之勢益不安模樣、勿体なくも

皇基之処奉恐按候、就ては何分將來之処、弥御懇親に

被申上御驥尾に被随、微志を被尽度存念に御座候間、

何卒前途之御見込等も、毛頭無御腹臆兩人ともへも御

存分に被仰聞、千載御一致之辺不堪千折万禱候、此段

於私共も奉懇願候、右御願旁、桂大夫を始一書捧呈仕

候心得に御座候処、兩人ども、已に只今より発途仕

候仕合に付、失敬申上候、此辺宜御致意奉願候、其中

時下別て御自玉、天下之御為肝要之御事に奉存候、匆

々頓首九拜、

十月五日

黒田嘉右衛門様

御内拆

木戸準一郎

#### 四八八 〔木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

拝啓、先以 御清適ニ被為 居、恐賀此事ニ奉存候、

サテ此度ハ御当所へ罷出、不図諸君へモ拜青仕、御高

話相窺奉本懐候、弥以御上下不容易御尽誠、終ニ五卿様方ニモ、不日御帰洛之御都合ニ被為至候御様子、恐賀無此上奉存候、尚 君上様ニモ頃日御上京(被脱之)為遊候御都合之辺窃ニ相窺、 皇国之御基本是ヨリ相立候御事ト、乍陰難有奉存候、于時御多務之中御面御願仕候義、千万奉恐入候得トモ、如御覽弊国之情態、久敷四方之交通モ不得仕、少壮聊有志ノモノモ、只眼前之敵而已ヲ知り、世間ノ大勢甚迂遠ニ打過、何トモ遺憾ニ存候、就テハ一両輩上(品川・広沢等)国差出度、自然モ来月中旬頃ニテモ、馬關辺御通行之御方モ被為在候ハ、御供被仰付候義相叶申間敷哉、乍略儀御序ヲ以奉願置申候、乍然自然態々ト御立寄ト申義ニテハ、奉恐入候間、此辺相叶候義ニ御座候ハ、御都合相ヲ以可然奉願候、先ハ右御願迄一書捧呈仕候、其中時下御自玉、邦家ノ御為肝要至極ニ奉存候、匆々頓首九拜、

十月十九日

尚々乍毫末御序被為在候ハ、諸賢合へ可然御致意奉願候、敬白、

黒田嘉右衛門様

木戸準一郎

拜呈御直折

天道未知是耶非 陰雲四塞日光微 我君邸閣見難見

春雨和統滿破衣

勤王拳事已多歲 何物人間事甚悠 此夕淀舟無限恨

滿川流水不堪憂

四八九 上京請願者へ諭達

禁廷為御警衛、依時宜

太守様可被遊 御出馬トノ趣ハ、兼テ被 仰出置候通

ニテ、此節島津(久壽)主殿へ諸郷一大隊被召付、

御先ニ上京被仰付候ニ付、一大隊外御旗本兵隊等ノ内、

此節 御先ニ上京、万一變動生シ候時ハ、粉骨碎身御

国恩奉報度、右赤心ヲ以歎願イタシ候者モ有之哉ニ被

聞召上、於志情ハ神妙ノ至、別テ御感悦不淺被 思召

上候、乍然不日御出馬被為在候節ハ、御領内ノ儀モ、

相心人数残置、海陸ノ御手当猶更嚴重無之候テハ不相

濟事候処、御旗本備御手薄候テハ不相成候ニ付、右体

至重ノ任ヲ蒙リナカラ、小ヲ取大ヲ捨候様ニテハ、却

テ忠義ノ志操取違候訳ニモ相成候ニ付、前後遅速ノ差

別有之迄ノ儀ニ候間、右等ノ処深ク奉汲受、若自然ノ  
場合へ立到候ハ、存分ノ御奉公相勤、奉報 御国恩候  
様厚可心掛旨、御軍賦役頭ヨリ丁寧可申間旨、被 仰  
出候条、此旨申渡向々へモ可致通達候、

卯十月七日

(桂久武)  
右衛門  
(島津広兼)  
伊勢

#### 四九〇 島津主殿上京

島津主殿

右ハ此節諸郷一大隊惣辛ニテ、上京被仰付候ニ付テハ、  
進退等諸事御委任被 仰付候、此旨上京ノ面々へ早々  
申渡、向々へモ可致通達候、

卯十月七日

右衛門

#### 四九一 長州ノ汽船入港

十月十日方

長州ノ蒸汽舟入津、何事ニテ差越候ヤト噂有之候得共、  
不相知候、十六七日ニ相成候処、(本)チン(少シツ、ノ方意)相知レ、大

久保市蔵・大山格之介被参、出勢之催有之、中途迄出  
勢相成候得共、国中段々混雜之訳有之、二派ニ分レド  
ウモ出勢不相調、右之断ノ為差越候ヨシ、

#### 四九二 大政奉還ニ就テ日記

十月十四日(大政奉還ヲ奏上ス、○薩  
長ニ藩ニ討幕ノ詔下ル)

一内大臣徳川慶喜上表大政返上ヲ請フ、  
十五日

一制シテ大政返上ノ請ヲ可トス、

一大政返上ニ付、十万石以上諸藩ヲ召サル、就中土佐・

肥前・宇和島ハ、特ニ容堂(山内豊信)閑臈(鍋島齊正)伊豫守ヲ召サル、

十七日

一十万石以上諸藩ヲ召サル、

一内府ヨリ前日御達ニ付建白、

一同上伺書

廿日

一同上八条伺書

一徳川内府及四十五藩士ヲ召シ、内府へ五卿上坂ノ件、

藩士へ外国事件及前件八条御下問アリ、



廿一日

一諸藩答議ヲ上ル、大略諸侯參集會議ヲ可トス、且外國ノ事尤重大輕忽ニスヘカラズ、參集マテ従前ニ仍ル可キヲ白ス、特リ藤堂和泉守(高松)及紀州藩異議ヲ上ル、

廿二日

一廿日御下問之件、下札ヲ以テ達セララル、

廿四日(徳川内府將軍職ヲ辞ス)

一徳川内府將軍職辞表ヲ上ル、

一諸藩上京十一月期限ノ令アリ、

十一月八日

一諸藩惣召ニ付、徳川内府ヨリ伺ヒ、

十七日

一徳川内府及列藩へ御達、

十八日

一徳川内府上書、

十二月二日

一長藩歎願書ヲ薩・藝ニ託ス、

八日

一大政一新ノ始、人心一和專要ニ付、御沙汰ニ通及外國

事件一条、

九日(王政復古)

一大政一新、三職ヲ置キ、將軍職ヲ免シ、撰籤門及諸職ヲ廢シ、守護・所司代ヲ罷メ、左右大臣・賀陽宮以下ノ參

内ヲ止メ、壬戌・癸丑幽閉之公卿ヲ解キ、言路ヲ開キ、人材ヲ徵シ、五卿及毛利父子復位入京、會・桑婦国等ノ御発令アリ、

十日

一六藩士ヲ召シテ大政ニ参与セシム、

一徳川内府上書、

十二日(徳川内府二條城ヲ去ル)

一参与役所ヲ仮ニ一乘院里坊ニ置キ、従前武伝取扱之事務ヲ司ラシム、山内容堂上書、

一同夜内府會・桑ヲ率ヒ浪花ニ下ル、尾張大納言・松平(慶應)大藏大輔書ヲ上リ、其由ヲ述ブ、

十三日

一御一新大御布令并御達書ナリ、

一徳川氏大目付、松平大隅守内府ノ書ヲ上ル、

十五日

一更ニ嶋津大隅守ヲ召サル、

十六日

一高野山僧、侍從鷲尾隆聚、本月十三日義徒ヲ卒ヒ登山ノ事ヲ告ク、

十八日

一尾・越へ會・桑兵ヲ山崎ニ出ノ由ヲ以テ、至急歸國セシム可キヲ命セラル、

十九日

一御復古ニ付外国へ御達書、親王以下諸藩へ御下問、

二十日

一昨日御下問ニ付、土・越・藝建言、

廿一日

一今度御变革多端ニ乘シ、狼藉者横行、人心不安趣ニ付、薩・藝・長・土へ伏見表鎮衛ヲ命セラル、

廿二日

一徳川内府官位貢獻二件ニ付、尾張大納言下坂御暇願出、仍テ 廷議尾張大納言へ御達、

一上件ニ付、諸藩へ御内諭アリ、

廿四日

一重テ長門宰相早急上京ヲ命セラル、

廿七日

一薩・藝・長・土練兵

一覽、此日三條前中納言始五卿入京、三條前中納言・伊藤素城天和島少將議定ニ、東久世前少將参与ニ拜任、福澤

晦日

一尾張大納言・越前宰相ヨリ、徳川内府兩事件ノ御請名代成瀬隼人正胤正ヲ以テ申出ル、

#### 四九三 大政奉還云々藩内布告

一祖宗以來御委任厚、御依頼被為在候得共、方今宇内之形勢ヲ考察シ、建白之旨趣尤被思召候間、被

聞食候、尚天下ト共ニ同心尽力致シ、

皇國ヲ維持、可奉安

宸襟

御沙汰候事、

一大事件外異一条ハ尽衆議、其外諸大名伺被仰出等ハ、朝廷於兩役取扱、自余之儀ハ、召之諸侯上京之上御決定可有之、夫迄之処徳川支配地市中取締等ハ、先是迄之通ニテ、追テ可被及

慶応3年(1867)

御沙汰候事、

一別紙之通被仰出候付テハ、被為在

御用候間、早々上京可有之旨、

御沙汰候事、

別紙之通

朝廷ヨリ被仰出候付、

太守様近々可被遊御上京旨、被仰出候、

但御日限之儀ハ、追テ可被仰出候、

右之通被仰出候間、被奉承知、諸郷衆中江申渡、無格

之面々江モ申渡、諸組与力之儀ハ、支配頭江可申渡候、

十月

圖書

(最津久造)

(桂久武)

右衛門

(小松傳麿)

帶刀

(島津広兼)

伊勢

(川上久齡)

龍衛

(町田久憲)

膳

右卯十月廿八日ナリ、

右ニ付御召之諸侯

此御方

尾州

右七藩

紀州 土州 宇和島 岡山 藝州

四九四 茂久公御召御封物

御封書 一通

但太守様江

右今八時二條御城江罷出候様、大御目付戸川伊豆守殿・

御目付設楽岩次郎殿ヨリ、御廻状相達罷出候処、大広

間・末之間一同着座、板倉伊賀守様・松平越中守様御

列座、此程之御趣意御建白相成候処、御沙汰之趣御

達相成候間、右御封書御国許江早速差廻候様、御演舌

ニテ御渡相成申候、

卯十月十六日

新納嘉藤二

(立夫)

帶刀様

#### 四九五 佐幕論者建言ニ就テ御訓諭

口達之覺

此節一大隊就令上京、出船前及直諫、又ハ役筋ヘ相付致諫訴、出船後封書ヲ以申出候モ有之、其趣大同小異ハ有之候得共、畢竟国家ヲ憂ヒ、社稷ヲ保安セント欲スル赤心ヨリ出候義、感賞不斜候、且沸騰モ起リ候様子、旁以諫訴ニ從度ハ候得共、尚又篤ト熟考致候ニ、君臣之交際ニ付テハ、義之一字ニアルコトニテ、多端牽合セシメ候テハ、落着之付所出来兼候モノニテハ有之間鋪哉、事ヲ処置スルニ大小輕重ヲ斟酌シ、コトト見ル所断然裁制シテ、宜ニ当ルヲ義ト云者カト存候、先帝崩御アラセ給ヒ候得共、今上御賢明ニ被為在候由ニテ、御統御無疑奉存上候、然共未 御即位ニ不被為及 御若年ニテ、諒暗中ニ被為居候 御時節ニ当リ、京師ハ勿論天下穩カナラサル世態、如何シテ御治安相成、上ハ奉安宸襟、下ハ万民ヲ安堵セシムヘキヤ、乍不及寢食モ忘奉案上候、(采) 中將様先達テ御上京被遊、三藩被仰合御尽力被為在、

朝廷幕府へ御建言之条々、悉クハ御採用ニ不相成候得共、御滞京ニテ猶又 御尽力有之候様、且 御養生御暇ニ付テモ、御沙汰之趣、賜品等 御待遇之至リ、御恩恵之程、如何様イタシ候テ可奉報哉ト、被為碎肺肝候御事ニ候、至我等弥以深肝ニ銘シ、起臥モ不安次第ニ候、天下右ノ形勢ニ就テハ、眼前如何様ナル事起リ候モ難計、実ニ念遣之至ニ候、若哉事起リ候得ハ、奉警護

禁闕ニ付テ、相応之人数無之候テハ難相遂、殊ニ遠境急速之儀不相調、兎角アラカシメ用意不致候テハ、間後レニ及ハンコトヲ恐レ、此節之人数為差出儀ニ候、何事モ央ヨリ相変スルト俄ニ難振起、或ハ瓦解ニ及モアラハ勢拔候例、ナキニシモアラス候得ハ、此節之人数等差留ニ相成候テハ、奉

朝命候儀ハ不相変迎モ、物事立行所ニ付テ、遲速緩急之訳モ有之、

朝廷ハ勿論諸藩侯ニ於テモ、信義ヲ失ヒ、吾社稷モ布テ危ニ不至共難申候、必正義ヲ不失所アリテこそ、国家社稷モ堅固ニ有之道理勿論ニ候、尤此方ヨリ無謀ニ事ヲ起シ候儀決テ無之、何処迄モ動靜変化、己ヲ捨テ

勅意ニ從ヒ奉ルトコロ、所謂義之一字ニテハ無之哉、  
斯ニ歸着不致シテ、万一之時動揺沸騰セシメ、事不立  
候テハ、夫限ニテハアルマシクヤ、仍テ何卒紛擾無之  
様一同致一和、急變之時ハ十分致尽力與候儀、我等各  
々々

朝廷江之忠節此上アルマシクト存候、依テ右申演候儀  
ヲ能々致勤考與度願存候事、

右慶応三年卯十月十八日、御筆ヲ以被仰出、翌十九日ニ一  
統江拜見被仰付候事、

四九六 諸家重臣留守居等御呼出廻達

別紙之通雜掌ヨリ到来仕、写相添此段申上候、以上、

十月十九日 (政風)  
内田仲之助

御用之儀有之候間、明廿日巳刻、無近之(本ノマ) 禁裏御所仮  
建所へ、重臣留主居家来之内參上可有之候、此段可相  
達旨両伝相達申候、以上、

両伝奏

卯十月十九日未刻

(島津茂久、薩州藩主)  
松平修理大夫様

雜掌

(黒田齊禮、筑前藩主) 松平美濃守様  
(池田茂政、岡山藩主) 松平備前守様  
(松井康英、棚倉藩主) 松平周防守様  
(伊達慶邦、仙台藩主) 松平陸奥守様  
御留守居中様

四九七 諸藩重臣御喚出

昨廿日巳之刻、御所御仮立へ御用被為在候間、重臣・  
留守居之内一人可罷上旨、伝奏日野大納言様ヨリ御達

有之、其段以首尾書申上候処、十万石以上諸家重臣等  
相揃候上、伝奏・雜掌早參之者ヨリ呼出、鶴之間・二

ノ間間涯ヨリ順々着座之上、議奏正親町三條卿・柳原

卿・長谷議奏・飛鳥井卿・日野卿御出座、別紙之通御

達ニテ、御引入相成申候、然処暫ク有之、亦々同様呼

出着座之上、左之通御達替相成申候、

右ニ付、土州様・藝州様御重臣等へ於同御座面会、右

御請答之件得卜相談、今日猶又藝州様御重役辻将曹方

へ出会、得卜評議之上、連名ヲ以テ御両役様之内へ、

以書付申上候方ニ談置申候間、其通ニテ御宜敷候ハ、

私罷越候様可仕候、右御廉ニ付テハ、專帶刀殿右兩藩  
へ御打合、御尽力被成置候末之儀ニ付、何レモ同様御  
聞方可宜哉ト奉存候、何分御吟味之様、早々被仰渡  
奉存、別紙写等相添、此段申上候、以上、

十月廿一日

内田仲之助

追テ申上候、帶刀殿御始御留守居中之儀ニ付、吉井  
幸輔・新納嘉藤次ニモ、私同様、今日出会候様御座  
候得ハ、尚其辺之儀有之間敷ト奉存候、此段モ申上  
候、

四九八 渡邊昇ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

(番号二二と同文により削除)

四九九 幕府ヨリ八ヶ条伺

一幕府ヨリ伺八ヶ条之事、

御附紙

右八ヶ条ハ、召之諸侯上京之上、規則被立候へ共、  
夫迄之処、是迄之通可相心得候事、

但当地三ヶ月詰并口々御固之大名割之一条ハ、是

迄之手続ニテ取調、於申渡ハ兩役取扱之事、  
一五卿上坂之事、

御附紙

自然上坂候へハ、諸侯上京迄之間ハ、於浪花御留之  
事、

但從 朝廷可申渡事、

一外国之事、

御附紙

召之諸侯上京之上、御決定可相成候得共、夫迄之処  
差向候儀有之候得ハ、諸侯上京迄差延候儀、外国之  
事情ニ通候兩三藩ト申合可取扱事、

五〇〇 徳川家ヨリ伺書へ御張紙之写

(八ヶ条伺ニ就テ)

一右八ヶ条召之諸侯上京之上、被立規則候得共、夫迄之  
処是迄之通可心得事、

但当地三ヶ月詰并口々御固メ大名割之一条ハ、是迄  
之手続ニテ取調、於申渡ハ兩役取扱之事、

一同断三條實美之事件、自然上坂候得ハ諸侯上京迄之処、  
於浪華滞留之事、

但從

朝廷可申渡候事、

一 同断外国之事件

召之諸侯上京之上、御決定ニ可相成候得共、夫迄之処  
差向候儀有之候得ハ、諸侯上京迄差延之儀、外国事情  
ニ通シ候両三藩ト申合可取扱候事、

右ハ一昨日御仮立<sup>マ</sup>へ罷出候節、今日巳之刻同所へ可罷  
出旨、致承知罷出候処、鶴之間へ十万石以上之藩士被<sup>諸家重臣</sup>  
差出、伝奏飛鳥井大納言様・議奏柳原大納言様御初御  
列座ニテ、諸藩見込モ御聞届之上、右之通御評決被  
仰出候間、拜見可仕旨被仰聞候付、写取罷帰候、

卯十月廿三日

御留守居

内田仲之助

五〇一 小松帶刀ヨリ伊地知へ書翰

甚寒之節、先々御多祥被成御起居、欣然之至奉賀候、  
陳ハ弟事、昨夜下坂、明日方ヨリ蒸艦ヲ以東下之含ニ  
御座候間、其内御面談イタシ置度件モ御座候間、何卒  
今日中亦ハ明朝迄、御都合次第御出被下間敷哉、参纏

旁申上候筈ナカラ、諸所江用向有之、奔走之暇無之候  
間、乍自由此段早々如此御座候、頓拜、

十月廿四日

伊地知様

小松

五〇二 諸藩上京御達書報告

一 諸藩上京之上追テ可有御沙汰、夫迄之処是迄之通相心  
得候様、御沙汰候事、

一 御用之儀有之被 召候、期限来月中ニ必ス可有上着候  
事、

但用意出来有之向ハ、不拘期限早々上着可有之事、  
一 御書付一通

但御用之儀有之被 召候、期限来月中ニ被遊御上着  
候様ト之儀、

伝奏

日野中納言様

雑掌

山科筑前守

右ヨリ御達被成候儀有之候ニ付、今日巳刻罷出候様、

雜掌中ヨリ之回状相達、罷出候様右筑前守ヲ以テ被成御渡候ニ付、御国許へ早々可申上旨申述置候ニ付、御書付差出申候、

右之通今日私共差支、御留守居付役吉井直之進相勤申候ニ付、御書付相添此段申上候、以上、

卯十月廿五日

内田仲之助

十月二十五日日野大納言様ヨリ雜掌ヲ以御達書、御用之儀有之候間被 召候、期限来月中ニ必可有上着、上意候事、

五〇三 吉井幸輔ヨリ在江戸益満・伊牟田へ密書

尔来御壮昌奉賀候、当地意外之形勢ニ立至リ、小子モ先頃浪華ヨリ帰京致、無事罷在候、乍憚御安意可被下候、右変態ニ付、君公早々御上京被為在候様

朝命相下リ、小松家始西(朱)(幣刃)・大ニモ宜帰国相成、来月中

旬迄ニハ御上京可被為在候ニ付、其節三十モ御供ニテ上京可有之候ニ付、云々之事状御見合可被成候、東西(喉力)繰違ニテハ大ニ不宜、尤モ何事モ諸侯會議之上、

朝議相居候節、御達ニモ相成居申候、此旨伊地知正治

申談、早々御掛合申上越候、以上、

十月廿五日

自京都

吉井幸輔(友表)

益満休之助様(行西)

爾牟田正平様(茂時)

再伸、前文相記置候処、唯今小笠原・別府之両士着

京、其地切迫之様子旁委曲致承知候、嗚御失望候半

卜相察候へトモ、君上御上京ニモ相成候機会、軽忽

之義有之候テハ、不都合之至ニ御座候間、御同志中

ニモ宜御執成被成度候、当分御邸内ニ潜居候方ニハ、

夫形ニテ可宜、必今一左右何レ之筋可申越候、其内

不目立様專要ニ候、

右此書状川崎氏へモ御廻シ給度、別段相認メ候儀、

今朝ハ大混雑ニテ相調不申候、

五〇四 十月廿七日各藩重役二條城へ喚出大目附

松平大隅守殿ヨリ達

臣慶喜昨秋相続仕候節、將軍職之儀固ク御辞退申上、

其後厚蒙



御沙汰候ニ付、御請仕奉職罷在候処、今般奏  
聞仕候次第有之候間、將軍職御辞退奉上度、此段奏  
聞仕候、以上、

十月廿四日

慶喜

御付紙

諸藩上京之上、追テ可有

御沙汰、夫迄之処是迄之通相心得候様、

御沙汰候事、

十月廿六日

五〇五 廣澤兵助ヨリ黒田・東郷へ書翰

今曉来之雨雪ニテ、殊更寒冷相募候得共、弥御清穆被  
成御滞在奉南山候、然(卷一)テ木戸事モ未夕帰着不致、只様  
御待遠奉恐入候、兼テ申上置候通、昨日中ニハ是非罷  
帰候様、申越候事故、何欵ニ差向キ用出来、無撫(宛)遅延  
押移候ニテ可有之哉、孰レ尊台方江御面会懇願之事ニ  
付、今明日中ニハ帰リ可申哉、相考居候事ニ御座候、  
其中今昼後於別席御寛話相親度、乍御足劳御賁臨被下  
度奉願候、折角貫治一同御集會仕度心得候処、前件之

次第故、残念之事ニ御座候、併渡辺江モ申合置候事故、  
必々御出之程奉待候、尤右時刻ニハ御同道仕度、御旅  
寓迄罷出可申候間、御待合被下度奉万禱候、他ハ拜眉  
縷々ト、為其草略如此御座候、頓首、

十月廿八日

黒田嘉右衛門様

廣澤兵助(實色)

東郷源四郎様

侍史

五〇六 前原・藤井ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

未奉得拝顔候得共呈腐毫候、先日御滞關被為在候御様  
子ハ、承知仕候得共、御伺不申上、失敬之段深奉恐縮  
候、御海恕奉希上候、陳又千万卒尔之申上候得共、小  
倉藩当曉来着仕、明早朝出帆、一先帰藩候、就テハ明  
曉迄ニ尊公様江是非願拝顔度候間、万々乍御苦勞、竹  
崎白石正(實風)一郎方宅迄、御賁臨相願具候様、申事ニ御座  
候、甚以如何敷儀申上候得共、小倉江可然御取合奉願  
上候、為夫不顧不敬呈腐毫候、頓首敬白、

前原彦太郎事原 猶介

藤井七郎左衛門事實善三郎

黒田嘉右衛門様

虎皮下

五〇七 伊地知壯之丞ヨリ大久保一蔵へ書翰

慶應三年十月廿九日

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

侍史 要用

裏 両通入

卯十月廿九日

高贖拜見仕候、時氣無御厭増御清爽珍重奉賀慶候、二  
劣弟義于今碌々滞崎罷在候間、乍余事御省念可被下  
(朱)「實入」条一  
候、軍艦一条ハ委曲承知仕候、本朝興亡ニ関り候 御  
上京用、素ヨリ等閑ニ罷過候訳合ニ無之、急速手ヲ付  
候米艦モ一艘有之、直段ハ十萬元位ニテ、下料ニ御座  
候得共、古船ニテ機関等病居候由故、外車之長サ、三  
(朱)「倉日丸」云々  
十間位之軍艦有之候、良大砲モ五六門乗セ付、小銃・  
短筒モ揃居、機械モ丈夫ニテ、一時二十五里位馳セ、  
良艦之向ニ御座候間、右ヲ十五萬元位ニ御取込之談判

ニ取掛申候、片時モ急キ、三五日中ニハ是非回船相成  
申候様可致、(朱)「倉七」野村持越候三万八千金ニテハ、内入金モ

及不足候間、外ニ二万兩近ク差掛之繰合イタシ、当座  
之尾ヲ取合ニ御座候、平運丸ハ急ニ片付模様ニ無之、  
且直段モ極々被押付申ハ案中故、先ッ御国元へ乗廻相  
成候様、乗頭へ達置候、此御船ハ一二万兩モ入レ、修  
覆ヲ加へ候ハ、屹ト良船ニ可相成候間、御取留相成  
度御座候、蘭ミニストル等ヨリ承候得ハ、今ヨリ四十  
日ノ内ニ、各国之軍艦攝海へ会集之賦之由故、一日ニ  
モ早ク 御上京被為在度、奉祈事ニ御座候、御酬迄卒  
々如此御座候、頓首敬白、

卯十月廿九日

伊地知壯之丞

大久保一蔵様

研北

同封

京城之形勢如何ソト、日々案念仕居候処、意外之機会  
ニ立到候段、野村ヨリ承り、且驚且喜候次第、(朱)「倉日丸」云々右ハ全  
ク先生方御決心御尽力之イタス所ニシテ、 皇国之氣  
運未タ地ニ不墮、感喜流涕之外無他事候、乍去御油断  
ハ不相成事ニテ、且従是ハ今一層之御大事ト奉存候、

何レ宇宙之大道ニ御基キ、内外之体相定リ、不偏不党  
人心ニ致勾当候御措置不相立候テハ、再ヒ瓦解之場ニ  
立至リ可申、左候ハ、最早 神州ハ是限故、極々大事之  
御場合ト奉存候、甚乍僭越 本朝維持之愚論兼々有之、  
過半ハ御案中ノ事トハ存候得共、貴君方ト、是非篤ト  
御内話申上度存込候、 御上京モ候ハ、攝海之事件  
相迫リ居、大体御定メニ就テモ、西洋各国之政刑御斟  
酌ノ事モ可有之候間、先生方之御顧問ニ、此節ハ寺島（朱）  
陶藏御召列相成度奉存候、細事ハ岸良（朱）ハ談置候間、細  
々御聞取被下度、今般之御上京ハ、金位之事ニハ無御  
座候間、御用途ハ致御請、相弁スル心組ニ御座候、頓首  
可祝、

卯十月廿九日

伊地知壯之丞

大久保一藏様

侍史

五〇八 藩内守備命令

- 一 東目惣督
- 一 西目惣督

島津（久慈）兵庫殿

島津左衛門殿（久慈）

右ハ東目・西目諸郷大隊当番組合被相定候付、右之通  
惣督被仰付候条、兼テ他領境目之要所ハ勿論、請持之諸  
郷々ハ時々差越、地理又ハ調練等被致見聞、地頭・領  
主ハ被申渡、武備手当一涯嚴重届候様、万端手輕ニ  
被取計、此涯私領勝手ニ被罷在候様被仰付候条、此旨  
向々ハ致通達、諸地頭・領主ヘモ可申渡候、  
十月 （島津広兼）  
伊勢

五〇九 言路洞開布達

今般出兵之儀ニ付、紛々之取沙汰有之哉ニ相聞ヘ、存  
慮有之者ハ十分建白可仕、先度ヨリ被仰渡趣モ有之候  
ヘ共、此節柄分テ下情被聞召上度旨、 御沙汰被為在  
候、此旨奉承知、存慮有之者ハ早速言上仕候様、向々  
ヘ可致通達候、

十月

内膳（朱）町田

五一〇 出軍請願者へ諭達

禁闕為御警衛、依時機 太守様可被遊御出馬等之趣ハ、

兼テ被仰出置候通ニテ、島津主殿へ諸郷一隊被召付、御先ニ上京、万一變動生シ候時ハ、粉骨碎身御国恩奉報度、各赤心ヲ以歎願致候者モ有之哉ニ被 聞召上、於志情ハ神妙之至、別テ御感悦不淺被思召上候、乍然不日 御出馬被為 在候節ハ、御領内之儀モ相応人数被残置、海陸之御手当猶更嚴重無之候テハ不相濟事候処、御旗本備御手薄ニテハ不相成候ニ付、右体至重之任ヲ蒙ナガラ、小ヲ取大ヲ捨候様ニテハ、却テ忠義之志操ヲ取違候訳ニモ相成候付、前後遅速之差別有之迄之儀ニ候間、右等之処深ク奉汲受、若自然之場合ニ立至リ候ハ、存分之御奉公相勤、奉御国恩候様厚可心掛旨、御軍賦役頭取方ヨリ、丁寧可申聞旨被仰出候条、此旨申渡向々へ可致通達候、以上、

十月

右衛門

## 五二一 無名ノ紀事

卯十月三日蒸氣船式艘出帆、永吉ノ島津主殿惣督ニテ、諸郷人数八百人位、御城下大砲組三拾人余、御軍賦役等出勢有之、此事ニ付テハ、前条通当月廿

四五日一条ヨリ世上紛々之雜説有之、殊ニ廿九日ヨリ川上助八杯諫言ノ建白等モイタシ、朔日ノ八ツ後御三役惣テ登城、宮之城杯殊之外諫言被致候ヤニテ、猶又跡ニテ承候得ハ、床次正右衛門・谷山 杯モ、助八同様諫言建白イタシ候哉ニ承候、助八ハ 太守公ノ御目通ニ出候ヤニ候、二ノ丸公ハ御病床ニテ、御目通ハ不出来、夫故宮之城へ差越候テ申込候半、宮之城モ殊之外ハメツケラレ候ヤノ評判有之候、シカシイツレ出勢ハ無之候テ不相濟候得共、夫故前条御書付、無拋間ニ逢ニ御出被成候半、

## 五二二 鹿兒島ノ形勢及ヒ俗論党ノ流言

島津主殿惣督三艘類船ニテ、上坂イタシ候由、前以大坂・京都へ相知、則手当相成、幕府ヨリ打果ヘキトノ決心ニテ、會津肥後杯ハ既ニ備ヲ繰出ス形勢モ、京都屋シキヘ相知候哉、則吉井幸輔大坂へ差越、勢ノ不足御周旋イタシ候由、然処十四五日一橋辭職聞出、諸候ノ大夫二條之城へ被召呼、小松被罷出候処、辭職之事別紙之通申出、此事ニハ小松へ段々被申掛、帶刀ニモ

存分ニ被申出候ヨシ、其事ニテ小松・西郷其外罷下、太守公ノ御上京ヲ相進候事、尤主殿長州辺ヨリ追々聞合候テ、被差越候処、中々大坂之手当稠敷、関舟ヨリ漸ク大坂へ主殿差越、暫時滞船ニテ本舟へ被罷帰候ヨシ、明石ノ辺へ滞舟イタシ候テ、可被尽ト申候得共、夫モ危キトイフ事モ相聞得候、

但

ドウユウ事ヤラ、幕府ノ手当嚴重ナルトイへ共、兵ヲ不進候、

五二三 赤松小三郎暗殺セラレ

(友翁 上田藩士)  
赤松何某トテ、

本信州浪人ニテ、砲術ニ達セシモノニ

テ、此方ヨリ段々門人モ多ク、有名ノモノニ候処、是

ハ幕府ヨリ聞者之聞へ有之、中将公御出立前夜打果候

ヨシ、

五二四 兵庫小豆屋ヨリ届

一昨日英船一艘当津へ着船、一兩日滞船ノ趣承之、且又

今夕方仏蘭西船三艘、長崎表当月四日出帆、明早朝爰元出帆、横濱へ廻船ノ趣承候ニ付、此段御届申上候、一仏船三艘共致出帆、英船一艘今以滞船、右船ノ儀ハ、英軍艦大船近日兵庫へ廻船ノ趣、右廻船有之迄ノ間、致滞船居候由、粗承リ候旨、小豆屋届申出候事、

松平備前守様

右先達テ御上京、

(定安 松江藩士)  
松平出羽守様

右去ル五日御国許御発駕、明十六日御着坂之御積、

阿波守様御嫡

(輝須賀茂周 阿州藩世子)  
松平淡路守様

右一昨十三日御国元御乗船、明十四日御着船、

安藝守様御嫡

(後野長助 芸州藩世子)  
松平紀伊守様

右去ル十一日御国許御乗船、不日御着坂ノ筈ノ処、御

中途ヨリ御引帰御帰国相成候ヤノ風聞、

五二五 岩下・市來帰朝(モンプラン来ル)

卯十月八日方、岩下(方平)佐次右衛門・市來(政唐)六左衛門夷国ヨ

リ罷帰候、又同十三日方、長崎へ被差越候、佛国ノモン  
フランドトカイフ大寛被連來候由、大邪魔ナル事ニテ候、

五二六 仏人モンプラン及ヒ職工等來ル

卯十一月九日、佛国ノモンプラン外ニ八人位差越候、  
軍艦壹艘拾三万ニ御取入レ、此舟ヨリ差越候ヨシ、刑  
部殿・岩下佐次右衛門殿ニモ乗組被差越候ヨシ、田ノ  
浦(卷一鳥津珍彦モテ同也)ノ本清鏡院ノ方被居候処へ被召置候ヨシ、同十日  
太守様御越、御対顔ニテ候事、

但

暫時ハ滞在ニテ、金銀掘リ方等手ヲ相付箸候ヤニ  
モ取沙汰イタシ、方々田舎廻リヲモイタシ候ヤノ  
評判モ有之、是ハ定テ地ノ理ヲモ見越事ナラント、  
噂イタシ候事、

同十一日大砲隊壹隊出帆、大久保市藏モ京都へ差越候

ヨシ、

五二七 太守様御上京布告

大事件外夷一条ハ、尽衆議、其外諸大名同被 仰出等  
ハ、朝廷於兩役取扱、自余之儀ハ、召之諸侯上京之上、  
御決定可有之、夫迄之処、徳川支配地市中取締等ハ、  
先是迄之通ニテ、追テ可及 御沙汰候事、  
別紙之通

朝廷ヨリ被 仰出候付、 太守様近々被遊御上京旨被  
仰出候、

但御日限之儀ハ、追テ可被仰渡候、

右之通被仰出候間、可奉承知候、

十月

圖書

右衛門

帶刀

伊勢

龍衛

内膳

五二八 慶應二年寅十月竹下盛徳日帳抄

十月廿八日之場ニ立花右近殿・大原様・中御門様昨夜  
閉門ニテ、実ニ残念之次第ト見得タリ、  
(卷一(重徳))

船中於テ西郷吉之助トノ

連歳投危十月天

黒烟南北飛火船

朝威不奮縱奸計

身作丹楓散帝辺

春嶽公

宇宙由来日赴新

数千里外已如隣

願知四海同胞意

皇道欲敷万国民

作者不知西郷氏歎

大義何関亡与存

宜抛家国報天恩

月輪陵旦春色暗

誰賜錦旗慰御魂

五一九 島津忠寛来麿諫言

卯十月廿日方佐土原侯被差越候、二ノ丸御着ノ御見廻

ナラント噂イタシ候、然処此節東目・西目筋惣督、加治

津兵〔朱〕〔忠寛〕木ト日置ヘ被仰付、去月中旬方日置ハ西目、加治木ハ

東目筋ヘ廻勤ニテ候、日州表之儀ハ佐土原ヘ被託置候

処、彼方ヘ無案内、加治木江御委任被仰付候ニ就キ、

佐土原侯ノ考ニハ、自分ニテハ不行届訊モ有之歟、又

々不調法之儀モ有之候ヤ、加治木ヘ惣督被仰付候儀、

何様之訊ニテ有之候哉、何分ニモ被仰聞度、太守公

江被相伺候処、全ク左様之事ニテハ無之、何モ子細ハ

有之マシク、拙者ニハ全ク不相分トノ旨被仰候処、決

テ左様ニテハ有御座マシク、太守公ノ御存知無之事

ハ有マシク被申上候処、其事ニテ自分ニモ心ニ不叶儀

モ有之候得共、何事モ二ノ丸ヨリ被仰出候付、実ニ不

心得事而已有之段被仰聞、此節之儀モ専ラ二ノ丸ヨリ

被仰出候間、

中将様ヘ御伺可被成候旨返答ニテ、則二ノ丸ヘ被申上

候処一言モ無之、于今返答無之、追々催促被致候得共、

為何儀モ返答無之、佐土原侯ニモ甚不合点ニテ、二ノ

丸事ハ殊之外悪シク、此ノ節ノ建白之儀ハ、不合点ニ

テ候ヨシ、

十一月八日承候事

五二〇 岩下・五代對話五代演舌ノ大意

此行佛国ヘ被差越候、日本使節向山隼人正〔一題〕〔岩年寄〕

寺澤播磨守〔岩下〕〔徳川昭武〕等ナリ、引続キ民部大輔殿巴理府

着航有之、此民部大輔殿ハ、当將軍ニ代リ無程日本大君

ト相成筈ノ人ニ有之トノ事ニテ、其令名佛国中ニテ噴

々相唱候、且日耳曼王<sup>(German)</sup>三女ト婚嫁嫁娶ノ事モ既ニ定リ  
趣、神奈川新聞紙中ニモ記載致シ候由ニ候、昨年長州  
再討ニ先立、幕府ヨリ仏兵五万ノ援兵ヲ被請候儀有之  
ル佛国ノ返答ニハ、随テ仏兵ヲ差送可申、併シ只日本  
海へ援兵ヲ出シ候義ハ、各国へ対シ面倒ノ儀有之候間、  
先ゼネラル(陸軍総督官)ヲ送リ可申候ナリ、此輩ノ  
教導ニ従フテ、日本士卒ヲ練習致シ候様、其後ノ事時  
宜ニ応シ、如何様トカ取計ヒ可申トノ趣、佛国ヨリ返  
答ニ及ヘリ、大君使節ノ演舌ニハ、三年ノ内ニハ屹度  
長防ヲ討滅シ、薩州及ヒ越前・藝・宇和島等ヲ倒シ、  
日本大名ノ兵権ヲ削リ御覧入可申候トノ事ナリ、佛国  
横濱ミニストル薩長ヲ倒シ、日本大名ノ兵権ヲ削リ不  
申候テハ、被行ガタク候トノ説ニテ、専ラ幕威更張ノ  
策ニ勸メ候事ニテ、幕府今日ノ措置ハ総テ神奈川ミニ  
ストル幕廷ヲ説得シテ、如此処置致サセ候事ニ御座候、  
此ノ時ニ当リテ薩州使節巴理府へ参リ候事故、恰モ国  
中ニ在ルニ等敷、諸事ノサシ支不都合等、無限候トノ  
趣、書状ニモ申越候程ノ勢ニ有之候、  
此節幕府ニテハ勢権更張ノ用意トシテ、鋼鉄板船二艘  
并ニ尾装小銃三万挺、其他野戦砲等佛朗西へ注文ニ相

成候、且ツ佛国新聞紙中ニ加入相頼、仏人ノ手ヲ借り、  
日本大名鎖閉ノ陋習權勢横恣ノ弊害ヲ論シ候近日ノ勢  
ハ、佛国ニテ日本大君政府ノ新聞紙局ヲ、組立ノ事ノ  
議起レリト承ル、

モンブラン

此時世ニ当リテ、問不蘭(此度薩へ相越シ候人名、五氏同  
行、崎陽ニ帯在ナリ)日本事情書名前後二冊ヲ著シ(前編千  
八百六十五年、後編千八百六十七年)、大ニ仏人ノ日本  
事情ニ通セスシテ、日本国情ニ戻レル事ヲ論セリ、第  
一篇ノ著述世ニ顯レシ比迄ハ、佛国ノ衆論ニ不協、国  
内紛紜ノ議論起リ、問不蘭カ説ヲ信スルモノ少シ、第  
二篇ノ著述出テ、日本事情ヲ論シ候ニ至テ、佛国政府  
并ニ、国内ノ人民、始テ日本帝王ハ皇統一系万世不易  
ノ君ニシテ、江戸大君ハ諸侯ト齊敷、京都帝君ノ官職  
ヲ受ル処ノ人ニシテ、君臣ノ名分上下千載毫モ僭踰ス  
ヘカラス、全世界一國両君ノ例ナク、万国公法決シテ  
此ノ理ナキ事ヲ知ルヲ得タリ、此書展観會中ニ播布セ  
リ、依之各國ノ人民其事情ヲ半信スルニ至レリ、  
柴田日向守(副也)日本使節トシテ、佛国巴理府へ航シ候節、  
佛国時務宰相ヨリ柴田へ談話ノ趣ハ、昨年春夏ノ内交  
巴理府ニ於テ、展観會ヲ催シニ、総体日本物産ハ欧州



各国ニ未タ珍敷候間、此節ノ展観会ニハ、日本品物差出候様イタシ度トノ義申談シ候、柴田云、此義日本政府ヘ掛合呉レ候様、柴田是等ノ事決答ノ權無之トノ返答ニ及リ、佛國時務宰相云、日本レガイソン(用向ニテ来レル人ト云意)、唯日本ノ願望ヲ達シ候事ノミヲ顯シテ、佛國ノ依頼ヲ不受ハ、人情ニ非ス、甚以テ疎情ノ沙汰ナリト云ト聞ヘリ、時務宰相ヨリ此事遂ニ薩人江相談アリ、其言ニ云ク、此節全世界ノ産物ヲ巴理府ヘ集ム、其中同盟國ノ中、独リ日本産物薩州ヨリ出候遺憾ノ至リニ存シ候ナリ、何卒日本産物薩州ヨリ出候様有之度趣、依頼ニ及ヘリ、依之新納・五代輩ヨリ、差支無之、速ニ決答ニ及ヒ候、佛國時務宰相大ニ喜悅為致候事ナリ、然ルニ佛國全權ノ存意ニハ、江戸大君ハ佛國同盟ノ人ナリ、薩摩ハ大君属隸ノ國ナリ、此事条約ノ大君ヲ差置キ、薩州ニ談シ、展観物ヲ請候テハ、同盟ノ公議ニモ関係イタシ可申トノ儀ニテ、遂ニ此事件ヲ以テ柴田ヘ談話ニ及ヘリ、其趣意ハ日本レガイソン(用向ニテ来レル使節)、唯日本ノ願望用事ヲ達セシ事ヲノミ歎願致シ、佛國ノ依頼ヲ不受ハ、甚以テ疎情ノ至リナリ、然ルニ今大君ノ使節是ヲ辞シテ、却テ薩

州ノ士官此事ヲ領掌セリ、然ル時ハ大君政府名義佛國ハ勿論、欧州各国ニ対シ、面皮無ルヘシト云ヘリ、爰ニ於テ、柴田日向守云ク、此事薩ノ政府ニテ承諾致シ候上ハ、大君政府ニ於テ元ヨリ可辞筋ニ無之トノコトニテ、展観会日本産物ヲ差出候事、柴田日州ヨリ決答ニ及ヘリ、

佛國全權薩州士官ヘ対シテ、此事再度日本使節ヘ談シ候処、大君政府ヨリ日本産物展観会ヘ出シ可申トノ返答有之候、然ル上ハ薩州ヨリハ、日本産物出シ候ニ及不申候ト云、

新納・五代輩、佛國全權ヘ論シ候趣ハ、薩州ヨリ出シ候ナレハ、大君政府ヨリモ出シ可申トノ返答ハ、日本大君使節佛國ヘ対シ、甚以テ信義ヲ失シ候辞令ニ候、然ルヲ今佛國政府ニテ、大君ノ使節許諾致シ候上ハ、薩州ヨリ出シ候ニハ及不申候トノ、(薩ハ脱之)薩州政府ニ於テ甚以テ不本意ニ可存候ト云フ、此事間不蘭ヘモ論候処、同人ヘ佛國時務宰相ハ論シ、佛ノ政府ニテモ余程閉口致シ候趣ニテ、格別ノ取合モ無之、然ル時ハ大君及薩州双方共差出候テ、宜敷ト申事ニ成行申候、則チ薩ヨリ展観物ヲ佛國ヘ送ル起情ナリ、茲ニ至テ佛國始テ、

日本江戸大君ノ外、日本大名薩摩在事ヲ知レリ、而シテ日本大名ノ權勢ハ、殆ント江戸大君ト区分無キ事ヲ疑惑セリ、展観場品物ヲ出シ候時ニ及シテ、幕吏ヨリ薩ヘ談シ候趣ハ、国旗ヲ挙ルニハ、第一日ノ丸ヲ表シ、其次ニ葵紋ヲ挙、其下ニ薩摩ノ紋ヲ引キ候様、有之度トノ事ナリ、此行惣体薩州ハ無願ニテ參候間、佛国ニ於テ、幕府ヘ届候処ニテハ、琉球王展観場品物ト称シ候向、上輩ノ論ニテハ、琉球王ト称シ候ニハ及不申候、矢張り薩州ノ名義ニテ出シ候方、可然ト存候トノ事相談ニ相成候、岩下云、然ル時ハ薩州ノ名義ヲ以テ、物品差出シ候義、差障リ無之、御許容ノ御書付願受度トノ趣申聞候処、即向山ニ參謀致候田邊多一郎取計ヒニテ、向山ヨリノ免許状印紙三枚受取、一枚ハ巴里斯府ヘ収メ、一枚ハ幕府ヘ差出シ、一枚ハ薩人取持罷在申候、展観場内、日本産物ヲ出シ候場所定リ候上ニテ、佛国政府ヨリ、日本大君政府・日本薩州政府ト相認メ、幕・薩聊甲乙上下無ク相認、相問ニ顛額ヲ挙申候、茲ニ於テ日本大君ノ外日本大君ト云フモノ有テ、如此威勢權力在ル事ヲ、佛国ハ勿論、各国展観會中ノ人熟知スル事ヲ得タリ、而シテ問不蘭著ス処ノ日本事情、殆ン

ト信用スルニ至レリ、幕府方ニテハ、向山免許ノ証印ヲ相渡シ候事ヲ後悔シ、田邊多一郎ヲ責テ、割腹爲致候事ヲ論シ候程ノ勢ニ有之事、引続キ肥前・佐賀巴里府ヘ航シ、展観物ヲ出ス、幕人ヨリ佐賀ヘ談シ候趣、薩摩ヘ談シ候旨趣ニ同シ、佐賀人不承知ナリ、佛国政府ヘ談シ、薩州ノ例ヲ以テ、日本佐賀政府ト書シ候、薩州ヘノ免許証印後悔無理ト雖、事既ニ遂タリ、而シテ江戸大君ト日本大君ト書法、区別等差無キ事ヲ、幕人深ク是ヲ嫌ヘリ、依之相問顛額ノ文例ヲ改メ、日本インペロー(Emperor)(訳即皇帝)ト認メ直シ、フリンス(Prince)(訳即諸候)薩摩及ヒ佐賀ト区別イタシ候事ヲ、佛国政府ニ望メリ、佛国政府不同意ナリ、江戸大君ハ日本帝王ニ非ス、不免ノ此事薩人聞テ、甚残慨スルヤ、幕吏愚蒙々果シテ如此失策ヲ醸出セリ、至茲歐州人民日本帝君ト江戸大君トハ、君臣ノ分毫モ僭スベカラザル事ヲ知り、江戸大君ハ日本大名ト齊敷、大名ノ大ナルモノニシテ、日本帝君ノ臣僕タル事ヲ知ルコトヲ得タリ、彼是ノ事件ニ因テ、幕・薩互ニ相軋リ候勢ハ論評モ無之、然共皇国大義ノ処存、実ニ不得止事ノ時宜ニ存シ候ナリト云フ、

横濱ミニストル名口セツ名、幕府ヲ尊敬スルコト甚敷、諸侯ノ悪ヲ挙テ、仏人其他ノ各国ノ人望ヲ、幕廷ニ取ラシメンコトヲ計ル、幕廷ニテハ佛国ヲ信セラレ候コト尤甚敷、巴里府へ両替屋ヲ建ラレ、当春迄ニ、入費既ニ六百万元ニ過候ト承ル、鋼鉄板船二艘其他軍艦并ニ大小銃三万挺、疲是諸入費モ亦夥敷コトナリ、惣体幕廷頻年府庫ノ疲弊甚敷、今日マテモ如此佛国ノ旧債御返済ノ途ハ、毫モ経綸無之、後年何ヲ以テ、右様増々莫大ニ相重リ候佛国ノ借財ヲ可弁候半ヲ、御勤考被下度候、

一横濱在留佛国ミニストル幕廷ニ解テ、徳川民部公子ヲ佛国ニ送り、新聞紙上唱テ曰ク、此公子ハ新大君ノ家系ヲ可継ノ人ニシテ、自三年ノ間、佛国ニ遊学セシメ、其利要ヲ究テ、以テ日本変革鴻業ヲ開カント欲スト云々、是則歐人ノ最感慨スル処ニシテ、幕廷普歐人ノ衆望ヲ得ノ最緊要良略ニシテ、幕廷ノ国家ヲ開ク迅速良善ナルヲ、欧州各国ニ轟示シ、諸侯ノ固陋衰微スルヲ、新聞紙上ニ誹謗スル等、実ニ慷慨ニ堪ヘス、其証ヲ挙ルニ、英・佛ノ大ナル新聞紙上周年ヲ照考スヘシ、  
一新聞紙上ニ幕ヲ賞シ、諸侯ヲ誹謗スル欧州各国ノ公力口民

ノ衆議ヲ以テ、幕ヲ助ケシメ、諸侯ヲ討滅セシムルノ策略ニシテ、欧情ヲ詳ニセハ、最可恐ノ大事件ナリ、新聞紙上ヲ以テ大志ヲ立ル証ハ、当時佛国帝王ナボレヲ素生ヲ照考スヘキ事ニ御座候、幕廷後來ノ措置ハ、関東ノ武備ヲ修飾シテ後、長防ヲ討滅シ、薩州ヲ倒シ、藝・宇・越藩等ヲ征シ、三年ノ内必ス五ヶ国ノ租税ヲ以テ、佛国ノ旧債ヲ返済可致ト云事ハ、幕吏往々仏人ニ対シ、口実ト致シ候事也、

洋人ノ如論、欧州各国ト雖トモ、千五六百年間、上ハ我日本無数ノ大小名在テ、各国兵権政務ヲ異ニセリ、今其旧弊ヲ改メテ、天下一政ニ帰シ、各全力ヲ以テ尽シ候事ヲ得候様、無之候テハ難叶、決テ佛国今日ノ盛大ヲ学ヒ候儀ハ、難被行候、早々諸侯ノ兵権ヲ削弱セシメ候ニ非シテハ、富盛ノ上策不可立トノ事、洋夷中仏人殊更ニ是ヲ論候者多シ、其根元ハ幕人洋夷ニ対シ、頻ニ諸侯権力横恣ニシテ、難制等ノ説ヲ以テ、其利害ヲ説得致候、洋人ヲシテ自然ト言ハ使メ候事ニ候、  
雖然問不蘭ノ著書世ニ出ニ及ンテ、漸日本ノ事情ヲ了知スル事ヲ得タリ、方今佛国政府ノ儀ハ、横濱ミニストル如論ノ報告、是迄ノ通一概ニハ信用難致ト言ノ論、

佛国政府ニライテモ、漸ク是ヲ疑フ事ニ至レリ、  
長防再征ノ時、御老中ヨリ横濱ミニストルへ御相談有  
之、日本同盟ノ訳ヲ以テ仏兵五万ヲ請ヘリ、依之大君  
ノ御直書ヲ横濱ミニストルへ相渡シ、同人ヨリ佛帝へ  
取継為申候事ナリ、

其時新聞紙中ニ載、日本大君始テ佛帝へ書翰ヲ送ト、  
記載セシヲ以テ、是為証、

其時分薩生探索スルニ、佛国ミニストル<sup>不分</sup>○日ヲ統テ、  
ナポレヲンニ閑談スト云、

然ル処、此儀佛国ニテ相断、此事雖不被行、海陸セネ  
ラール<sup>惣</sup>已下士官等借シ与可申、右ニテ兵卒ヲ練習シ、  
夫ニテモ難被行候節ハ、其時宜ニ応シ候御相談ノ筋モ  
可有之トノ事ナリ、右ハ長州御再討ノ時分ノ事也、

今日佛国政府ノ論ハ、佛国ヨリ処遣ノ横濱ミニストル  
建言報告スル処ノ事情ハ、一概ニ信用イタシガタク候、  
幕府ト諸侯トノ間、双方ノ形跡情実等、能々洞察イタ  
シ、大君ト大名トノ争ヲ傍觀察ノ上、必ス其長スルモ  
ノ有ベシ、我其可立モノ有ルヲ待テ、是ヲ助ケ可申、  
是公義ノ当然ナリト言フ事、是レナポレヲン第三世着  
眼ノ議論ナリト承候、

問不蘭言、欧州各国ノ議論如此、然ルヲ日本鎖閉ノ余  
風使然事トハ乍申、日本大名ノ危急如此ノ形勢、一切  
度外ニ置テ不知、日本大名ノ權勢ハ幕廷ノ為ニ潰サレ、  
幕廷ハ孤立シテ無援、遂英佛等ノ外夷ニ被倒可申、日  
本後年如此形勢ニ成行候事、是又必然ノ勢ナリト云、  
問不蘭云、我輩江戸大君ノ非義ニシテ、佛国政府ノ日  
本事情ニ通セサルノ誤リヲ論シ、為此書論ヲ著シ、天  
下ニ布告セリ、然ルニ今日日本大君ノ潰レ候様ノ事ニ至  
リ候テハ、問不蘭欧州各国人民ニ対シ、何ノ面目在テ  
カ天下ノ人ニ相見可致哉ト言、

問不蘭ハ佛国ノ俠雄ニシテ、公法論家ナリ、其上彼  
人ノ家系ハ、佛国ニテ諸侯ノ家ナリ、佛帝混<sup>一文化</sup>  
時潰レテ、家系血食セリ、然レドモ家系古来侯家ニ候

故ヲ以テ、佛国ニ於テ貴族名家タリ、問不蘭日本列  
國ノ事情如此成ト見テ、從來ノ俠氣慷慨ノ意尤モ多  
シト承ル、

五代才助言、僕情天下ノ形勢ヲ勘考致シ候処、日本今  
日迄ノ処ニテハ、宇内ノ事ハ惣テ日本限りニテ、何事  
モ局ヲ結ヒ為申事ヤ、併向後ノ事ハ、何事モ外国同盟  
ノ公論ニ関涉イタシ候事ノミ多ク、出来イタシ候様ニ

成行、古来日本ノ旧法仕来リニテハ難被行、日本同盟  
 条約ノ上ハ、外夷ノ交接ヲ以テ可重事ニ存ル、佛國ノ  
 措置ヲ見ル時ハ、討薩・滅長・幕勢更張ノ説ヲ勸メ、  
 軍艦兵器等巨万ノ金貨ヲ借シ与、今日其償ヲ不論、此  
 費用ハ凡テ佛國政府ノ処弁ナリ、他年此ノ巨万ノ旧債  
 ニ、利息ヲ相加ヘ候時ニハ、幕廷今日ノ疲弊何ヲ以テ  
 弁シ可申ヤ、是レ佛國往年メキシコ・アンナン・印度  
 其地等ヲ版圖ニ帰セン処ノ策ナリ、唐國今日ノ疲弊モ、  
 仏人全ク此ノ如ク策略ヲ用ヒタルノ誤リニ候、是レ佛  
 國ノ策略第一義ナリ、

五代言、弊國ニテハ俗吏輩ノ論ニハ、日本大名ノ兵權  
 ハ決テ難削ト論シ候者往々有之候、併シ天下列藩連年  
 疲弊極リ、当分ノ為体ニテモ如此、此ノ上ニモ兵革相  
 続キ候様ノ事共到来致シ、從今三五年ノ久敷ニモ及候  
 時ニハ、疲弊ハ愈増シ甚シキ勢ニ相迫リ候事ハ、勿論  
 ノ事ナリ、此ノ疲弊ノ時ニ乘シ、幕廷ハ佛國ニ結ヒ、  
 其軍費ハ豊饒ナリ、於此時世ノ圧倒ハ言モノ有之、彼  
 是諸侯ニ権力難削トハ難被申候、幕府ニ措置ハ外国政  
 府積年ノ旧債ハ、總テ諸侯領内ノ物成ヲ以テ目的トイ  
 タシ、此ノ如キ巨万ノ金銭ヲ借ル事ナリ、且幕廷壯年

輩ノ内ニハ、軍艦兵器ノ債ハ、長州及ヒ諸國ノ邦租ヲ  
 以テ償ヒ可申トノ言辭、仏國人ニ對シ、往々發言致シ  
 候事ナリ、此義若シ疑念モ有之候ハ、神奈川ニ在留  
 致シタル洋夷ノ内へ御問尋有之候ハ、分明ニ了知可  
 被成候、時勢ニ乘シ候時ハ、時勢ノ圧倒ト申コト有之  
 候習ニテ、其時ノ勢ヒ次第ニハ、兵權ヲ被削申候ト  
 ハ難申候、其例ヲ挙テ論シ候ヘハ、長防再討ノ時ハ、  
 時勢ニ乘シ、列藩ノ人数皆其國境ヲ越申候、中国小諸  
 侯ノ如キハ、悉皆兵ヲ出セリ、是公論条理ノ不得止ニ  
 因テ出兵致シ候ハ無之候、是即時世ノ圧倒ト存候、田  
 浦ノ戰爭若シ長州敗恤致シ候時ニハ、諸藩ノ兵順序前  
 後ヲ不論、必条先魁ノ功ヲ競ヒ可申事ハ眼前ナリ、然  
 レ共長州頻リニ勝候ニ乘シ、其鋒難侮ヲ知ニ及テ、小倉  
 參集ノ兵士前後ノ簡弁生シ条理論モ相立ル勢ニ成行、  
 是又時勢ノ使然処ニテ、勢ノ圧倒ハ公論条理ノ外ニ生  
 シ候物ニ御座候、方今ノ勢強國大藩ハ前後遲速ノ差ハ  
 有之共、等敷幕廷ヨリ兵權ヲ被削候事ハ、是智者ヲ不  
 俟候、今日ノ急務ハ、天下ノ列侯公論条理ニ基キ、互  
 ニ同盟連合致シ不申候テハ、特立難致勢ニ成行候義、  
 必然ノ勢ニ候、仏人問不蘭頻リニ此事情ヲ論シ候、天

下争乱ノ間ニ当テ、隣邦互ニ同盟相結ヒ候ニ至候テハ、各国土風人質モ互ニ異同アリ、國ノ土風異候時ハ、國論モ又大同小異ヲ不被免候、併シ天下列藩、幕廷ノ為ニ倒サレサル事ヲ希望致シ候日ニ至リ候テハ、其着眼皆同規轍ニ出候事ハ、是又必然ノ勢ニシテ、不成<sup>レ</sup>列國同盟結合ノ勢ニ成行候上ニテハ、京師ニ上下議事院ヲ建、各国内ニモ上下議事堂ヲ建立致シ、天下ノ大事件ハ列國ノ公論衆議ニ決定イタシ候外、其他良策有之事ナシ、

日本向後ノ国事ハ、大体同盟外國ニ関涉致シ候事多シ、然ル時ハ洋外ノ事情ニ不通候テハ、難被行候、速ニ其人ヲ撰テ、欧州各国へ遊歴セシメ、見聞ヲ広メ候事、當日ノ急務ニ可有之存候、

当今ノ形勢ニテハ、大君政府トハ難申候、其子細ハ政府ノ名在テモ、政府ノ名ノミニテ、幕廷徒ニ虚器ヲ擁シ、政令天下不被行候、然ル時ハ日本政府トハ難申候、洋人ニ取テモ、日本政務統轄ノ処無之候テハ、盟約モ難立、貿易融通モ被行ガタク、然ル時ハ洋人ハ是非大君ヲ助ケ候テ、諸侯ノ権力ヲ削リ、日本政令一ニ帰候様致スヘシ、既ニ英國ミニストルノ議論ニモ、殆ント

其情ヲ含メリ、或ハ日本諸侯ノ同盟共和ヲ援テ、幕府横暴ノ權ヲ挫候欵、日本ノ形勢、幕府列藩勢兩立不致候勢ニ成行候事ハ、是又必然ノ勢ナリ、當時ノナボレヲンハ、傑出ノ才英明ノ質ヲ抱ケリ、幕府ト諸侯トノ間、其情実ヲ能々洞察致シ候時ハ、必ス其長スルモノ我暫ク傍觀精察シテ、其長スルモノヲ援クベシト云ヘリト聞、其言古今ニ名論ナリト云フベシ、日本今日ノ形勢、佛帝処論ノ形勢ニ成行候儀ハ、論評無之候、

佛國今日ノ廟議ハ、始終大名ト諸侯ト對遇比較致シ、其形勢ヲ洞察スル事、甚密切ナリト聞、

大君ト兵端ヲ啓候時ニ望ミ候テハ、諸侯ノ義拳、實ニ不得止ノ公議ヲ述候、詳ニ新聞紙中ニ記載致シ、同盟ノ各国ニ播布イタシ、義拳分明ノ事情、天下ノ聞聽ニ貫徹イタシ候後ニ無之候テハ、決テ難被行候、如何成ハ、同盟條約上ニ關係致シ候故ニ御座候ト云、

丁卯十月岩下・五代對話、五代演舌ノ大意如斯、

此ノ如キ形勢ニ相運ヒ候上ハ、列國ノ侯伯五六十年ヲ不出シテ、必ス倒ル、ニ至リ可申、併其緩急異成而已ナリ、我此事決シテ讓スルニ非ス候ヘトモ、其機會ニ至ラスハ、天下列藩ノ士、今更不知、實慷慨ニ堪ヘザルナリ<sup>不分</sup>能々此事ヲ記シテ、其節ニ

賞シ給フベシト云テ、ゼネラールへ老中格・若年寄格ヲ与ヘタ  
リ、

五二一 島津修理大夫・松平安藝守・松平土佐守

議奏

一 祖宗以來御委任厚、御依頼被為在候得共、方今宇内之  
形勢ヲ考察シ、建白之旨趣尤ニ被

思召候間、被

聞食候、尚天下ト共ニ同心尽力ヲ致、

皇国ヲ維持可奉安

宸襟

御沙汰候事、

一 別紙之通被

仰出候、付テハ被為在

御用候間、早々上京可有之旨

御沙汰候事、

右丁卯十月十五日伝奏日野大納言殿ヨリ御達、  
(登志)

一大事件外異一条ハ尽衆議、其外諸大名同被

仰出等ハ、

朝廷於兩役取扱、自余之儀ハ、召之諸侯上京之上御決  
定可有之、夫迄之処徳川支配地市中取締等ハ、先是迄  
之通ニテ、追テ可及

御沙汰事、

右丁卯十月十六日右同人御達、

一 今般幕府政權ヲ

朝廷江奉還仕候次第、誠ニ以復古之御大業數百年來之  
英断ニテ、

御国体変革、宇宙間ニ

御独立可被遊御基本ニ候得ハ、微賤之私共迄モ、深ク  
天下之為メニ奉恐悦候、就テハ衆庶議事之意ヲ以、諸

藩士共被召出、御廉々御下問被

仰付候儀、謹テ奉言上候、

一 徳川家取扱掛之廉々、當時伺書之通被仰付置、召之諸  
侯會議之上、御確定被遊可然哉奉存候、

一 脱走之公卿方、近々上坂之聞有之候趣御座候得共、推  
テ右等之次第ニ相成儀ハ有之間敷、召之諸侯會議初発

ニ御裁断被 仰出、長防御処置同時相成可然哉ニ奉存  
候、

一 外国取扱之儀ハ、暫時越方之通ニテ被閣、召之諸侯会

議之上、

皇国一体ヲ以

朝廷之御条約被為結、兵庫開港之処ハ、今般大改革ヲ以、国体変換之次第談判ニオヨヒ、被差延候テ可然奉存候、

右件々當時在京仕候三藩之者共、同意仕候付、乍恐連名ヲ以テ申上候、尤書外猶又口舌ヲ以言上可仕候、誠惶誠恐頓首謹言、

十月廿一日

島津修理大夫内

關山〔金生〕 糺

松平安藝守内

辻將〔緋五〕 曹

松平土佐守内

後藤庄次郎〔家一郎〕

福岡藤次〔孝徳〕

神山左多衛〔頼隆〕

右即日議奏正親町三條大納言へ差出ス、〔実密〕

一徳川家ヨリ伺書へ御張紙之写、

右八ヶ条、召之諸侯上京之上被立規則候得共、夫迄之

処是迄之通可心得事、

但当地三ヶ月詰并口々御固メ、大名割之一条ハ、是

迄之手続ニテ取調、於申渡ハ而役取扱之事、

一同断三條實美之事件、自然上坂候得ハ、諸侯上京迄之処於浪華滞留之事、

但從

一朝廷可申渡候事、

一同断外国之事件、

但召之諸侯上京之上、御決定ニ可相成候得共、夫迄之処差向候儀有之候得共、諸侯上京迄差延候儀、

外国之情ニ通シ候両三藩ト申合可取扱候事、

右卯十月廿二日、議奏柳原大納言殿初列座ニテ、諸藩見込モ御聞届之上、右之通御評決被仰出候旨御達、

一御用之儀有之被

召候、期限来月中ニ必可有上京候事、

但用事出来有之候向ハ、不拘期限、早々上着可有之事、

十月

右卯十月廿五日伝奏日野大納言殿ヨリ御達、

一島津中将事、今般

御用被為



在候付、早々上京可仕、若所勞快氣不仕候ハ、私上京可仕旨承知仕、同人儀未快氣不仕候付、私今日上京仕候、此段御届申上候、以上、

十一月廿三日

薩摩少将

右即日伝 奏飛鳥井大納言殿へ御届申上候、

一 今度大樹奉帰政權

朝廷一新之折柄、弥以天下之人心居合不相附ニ於テハ、

追々復古之典モ難被行、被惱

宸襟候、且来春

御元服并立太后、追々御大礼被為行、且又

先帝御一周ニ相成候付、猶更被

思召候間、先年来防長之事件、彼是混雜有之候得共、

寛大之

御所置被為 在、大鷹父子末家等被免入洛、官位如元

被復候旨、被

仰出候事、

右卯十二月八日議 奏・伝 奏両御役御列座ニテ御達、

一 参与人体各注進之通被 仰付候、御改革之御時節、万

事尽力可有精勤候事、

但御政事規則相立候迄、一同辰刻参集、於夜分ハ申

合、四五人宿直可有之候事、

右卯十二月十三日橋本左少将殿ヨリ御達、

一日御門

土州

御台所門

薩州

南門

尾州

朔平門

藝州

右之通御警衛之儀、被

仰出候事、

十二月十三日

一 薩州

一日ノ御門并穴門四ヶ所内外、

一 御台所御門并北之穴門二ヶ所内外、

一 参台殿并奏者所等之前、

一 御座檐下詰、

右御守衛之儀被免候間、明朝可引払候事、

十二月十四日

右式通即日参与詰橋本安藝殿外七人ヨリ御達、

一 今度武家伝奏御役被廢候付テハ、差当候処、参与御役

ニ於テ取扱ニ相成候、但石葉師通一乘院里坊ヲ以、仮

ニ右役所被設、且参与所卜被称候間、是迄武家伝奏取

扱之廉々、右役所へ可申出候事、

但右掛之方々

大里宰相・萬里小路右大弁宰相

長谷三位・岩倉前中將

橋本少將

右名前ヲ以可差出事、

右卯十二月十二日、淺井左近殿ヲ以御達、

一 総裁以下巳刻参集、午刻評議之事、

一 参与之儀、自今堂上向上ノ参与ト称シ、諸藩士下ノ参与ト称シ候事、

右十二月十六日、松尾伯耆殿ヲ以御達、

一 頃年天下紊乱、人心不和ヲ生シ、况外國之交際日ニ隆

シテ、國家之安危危急之秋ニ候、然ニ今度

朝政一新、追々旧典復古、且明春

御大札被為行候御時節候間、人心一和ヲ先務ト被為遊、

近年幽閉之輩ヲ被為解、往々無怨志人和一斉シ、沿革

大成、整内制外之次第可相立ト、被

思食候間、奉戴

御趣意、上下和親シ、

皇國之情態可存候事、

右卯十二月九日、議伝兩役御列席ニテ御達、

一日ノ御門并穴門四ヶ所内外、

一 御台所御門并北方穴門二ヶ所内外、

一 参台殿并奏者所之前、

一 神仙門往反人数改取締所、

一 公家門前桑名固メ被免引替、

外ニ御座檐下詰任撰十人之事、

御拝道廊下檐下詰従僕之事、

一 王政復古大變革付テハ、何時非常之儀出来モ難計、依

之右御場所藩兵ヲ以嚴重警衛可有之旨、

御沙汰候事、

但九門内ハ勿論、

禁内ニ至リ、兵士戎服之俣可為参朝候事、

一 公家門前桑名守衛之儀被止候付、其場所速嚴重可警

衛之旨、

御沙汰候事、

一 参与人体、各注進之通被

仰付候、御改革之御時節、万事尽力可有精勤候事、

但御政事規則相立候迄、一同辰刻参集、於夜分ハ申

合、四五人宿直可有之候事、

御用掛

松尾 備後

松室 豊後

鴨脚 加賀

松尾 伯耆

中川 對馬

吉田 遠江

右非藏人

西池多兵衛

松岡 大進

伊佐左近番長

立川 掃部

長井 奉膳

徳岡 刑部

岡本市之進

小野兵部丞

薩摩 少将

一 応 召早速発京

御満足候、随テ不容易大事御評決之儀有之、唯今参

朝可有之旨、

御沙汰候事、

右卯十二月九日御達ニ付参

内、兵隊戎服之俣罷出候様御達有之、

右之通御警衛被 仰出候、

一日御門内外穴門四ヶ所、

一御台所御門并北ノ方穴門式ヶ所内外、

一参台殿并奏者所前神仙門往反取締所、

一御座軒下人撰十人ツ、御警衛被 仰出候、

徳川内府従前御委任、大政返上將軍職辞退之両条、今

般被

聞食候、抑癸丑以来未曾有之困難、先帝頻年被惱

宸襟候御次第、衆庶之所知ニ候、依之被決

叡慮、王政復古国威挽回之御基被為立候間、不論既

往更始一新、自今撰関・幕府等廢絶、即今先仮リニ総裁・

議定・参与之三職ヲ置レ、万機被為行、諸事

神武創業始ニ原ツキ、摺紳・武弁・堂上・地下別ナク、

至当之公議ヲ竭シ、天下ト休戚ヲ固ク可被遊

叡念ニ付、各勉勵旧來驕惰之汚習ヲ洗ヒ、

一内覽 勅問御人数国事御用掛・議奏・武家伝奏・守護

職・所司代総テ被廢候事、

一 太政官始追々可被為興候間、其旨可心得居候事、

一 朝廷礼式追々御改正可被為在候得共、先撰鎌門流之儀被止候事、

一 旧弊御一洗ニ付、言路被洞開候間、見込有之向ハ、不

拘貴賤無忌憚可致献言、且人材登庸第一之御急務ニ候故、心当リ之人有之候ハ、早々可有言上候事、

一 近年物価格別騰貴、如何トモスヘカラサル勢、富者ハ

益富ヲ累ネ、貧者益窘急ニ至リ候趣、畢竟政令不正ヨリ所致、民ハ王者之大宝、百事御一新之折柄、旁被惱

宸衷智謀遠識救弊之策有之候ハ、無誰彼可申出候事、

右之通御確定被

仰出候付テハ、六十余州之大小藩ハ申ニ不及、陪從吏

卒之末ニ至ル迄、御趣意厚相心得候様、

御沙汰候事、

右卯十二月十四日、参与御役所ニテ御達、

一 薩州 仁和寺宮へ

為御警衛、人数十六人可被差出候事、

尤可為侍分之事、

島津大隅守

御一新御変革ニ付テハ、從來

叡慮遵奉之次第モ有之、旁以御下問之儀被為在候間、早々上京可有之、更被

仰出候事、

但応

召修理大夫モ早速上京ニハ候得共、尚又思召之旨

モ有之、本文之通

御沙汰候事、

桂 右衛門

今般無偏無党公平之御所置ヲ以、与天下更始被候付、遊脱也

人才御撰擧之筋ヲ以、兼テ達

叡聞候輩ハ、博ク御諮詢被為在候付、其藩右人体御登

用被為遊候間、早々登京致候様、可申付候旨

御沙汰候事、

右三通卯十二月十八日御達、

一 小松帶刀

今般御改政御一新ニ付、広ク天下之人才御登用被為在候、其方兼々被

聞召入候儀有之候間、早々登京可致

御沙汰候事、

十二月

右卯十二月十九日御達、

薩州

頃日御麥革御混雜之虚ニ乗シ、惡徒横行之聞有之候付、  
洛中洛外巡邏之儀、被 仰付候事、

但是迄町奉行所計向之儀為替、当分之處不取敢、兼

テ山城國中取締被 仰付置候本多主膳正・青山左

京亮・松平圖書頭(信正、丹波亀山藩主)へ、市中御取締被 仰付候、尚

又、市中見廻之儀次第不同、龜井隠岐守・加藤遠

江守・小出伊勢守・松浦肥前守・植村駿河守六藩

へ被仰付置、尚又加州・土州・中河等へ、洛中洛

外見廻被 仰付候間、此段心得迄ニ申達候事、

右卯十二月十九日御達、

桂 右衛門

一般御麥革ニ付、人才御撰挙之筋ヲ以、兼テ達

叡聞候輩、博御諮詢被為

在候付、右人体御登用被為遊候間、登京致候様

御沙汰之趣、拜承仕候、早速国許へ申越候様可仕旨、

申付候間、此段申上候、以上、

薩摩少将内

内田仲之助

薩州

壬生修理権大夫早々上京之儀、

御沙汰候間、為心得申達候事、

右十二月廿四日御達、

一御真綿 拾把

橋本少将殿

右議定職ニ付、歳末之為御祝儀被下候旨、御達御渡相

成候、

右卯十二月廿四日

一正親町三條前大納言様・正親町少将様ヨリ薩州・長州・

土州・藝州兵隊人数調練、来ル廿七日巳之刻

日之御門前ニ於テ、被遊

叡覽候段、被

仰出候間、人数取調可申上、当分諸所へ警衛等モ差出

有之候付テハ、大人數引揚 叡覽ト申事ニハ無之、手

明之人数丈罷出候様御達ニ候、当分之事ユヘ煙声等イ

タシ候テハ、人氣動揺モ可有之候付、砲発等無之様、

御達有之候事、

右卯十二月廿五日御達、

薩州

伏見表今般御變革、彼是多端之虚ニ乗シ、狼藉之者横

行、人心不安趣相聞候付、急度巡邏鎮定可有之、

御沙汰候事、

但伏見市・在取締之儀ハ、田宮（爲禰尾州藩士）如雲へ兼勤被

仰付候、尚又巡邏之儀、長州・土州・藝州同様被

仰付候間、為心得相達候事、

右卯十二月廿一日御達、

薩摩少将

一 年始御礼、元日辰刻参

朝可有之候事、

右卯十二月晦日御達、

一 私事年始御礼、元日辰刻参

朝可仕旨、蒙

命候得共、不快有之、参

朝難仕御断申上候、此段宜敷御執

奏奉願候、以上、

十二月晦日

薩摩少将

一 御用之儀有之候間、明二日巳刻九條家へ参集可有之候

事、

但四御門ヨリ往反之事、

正月一日

一 御用之儀有之候間、今二日巳刻九條家へ参集可有之旨、

蒙

命候得共、所勞ニ付御断申上候、此段宜敷御執

奏奉願候、以上、

正月二日

薩摩少将

一 大政御執行ニ付テハ、外夷事件於

朝廷御所置被遊候ハ勿論、且重大急務之筋ニ付、此間

段々

御沙汰モ有之候得共、其廉モ未行、実ニ一日不可忽之

次第ニ付、別紙之通徳川内府へ被 仰下候儀ニ 御確

定候、此段

御沙汰候、併猶所存之趣モ候ハ、言上可有之候事、

但外国事務掛初メ、夫々其人体不日可被申置候間、

是又心得迄申入候事、

一 政權返上被 聞召候上ハ、外国交際之儀、於

朝廷条約御取結可被為在候儀、当然ニ候間、百事御治

定之上、猶御談判之品モ可有之、差当

慶応3年(1867)

王政ニ被為復候御廉、御布令被遊度

思食候付、兵庫滞留各国公使京地へ御呼登相成候間、

是迄手續モ有之事候得ハ、各国公使上京候様、可申達

御沙汰候事、

但来ル十日迄上京候様、被

仰出候間、御請之御届可申出候、

〔表紙〕

# 忠義公史料

市來四郎編  
慶應三年十一月

## 目録

茂久公御上京ニ就キ御親書之訓令其他

茂久公御上京届書

茂久公御上京御航路概略

從軍人某紀事

茂久公御上京ニ就テ御沙汰書

久光公燈下ノ御作

当時京攝ノ巷説茂久公大坂御着

〔茂久上京道程〕

大膳大夫上京ニ付、西ノ宮ニ滞陣シ、其地方ノ人民ニ下シタル告諭文

相國寺山内宿陣ノ為メ借用照會

茂久公御上京御発航

手扣

〔陣屋取締令〕

〔宮中人事諸侯上京並ニ毛利家事情〕

〔近衛左府辞官ニ付キ〕

〔盛岡・岡山留守居重役召集〕

〔慶喜ノ將軍職辞任ノ奏上書〕

〔諸侯上京ニ付イテ〕

〔十月二十日御達替ニ付イテ内田仲之助ヨリ關山糺へ書翰〕

〔十月二十日御達〕

〔十月二十日御達〕

寺島宗則建言

太守公御上京前仏国人白山建言之趣意聞書

肝付郷右衛門普請奉行ヲ命ス

伏見・鳥羽・會津戰御祝被下

祿高員数御届

積年勤王之為恩賞品



慶応3年(1867)

島津忠義ヨリ三浦安へ書翰

木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

大久保一蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰秋元家云々

全上

全上

島津淡路守建言

小松帯刀ヨリ後藤象二郎へ書翰

大山格之助ヨリ小松・桂へ書翰大挙ニ就テ

大山格之助ヨリ桂右衛門へ書翰

寺師宗道日記抄

陸軍編制

海陸掛任命

諸郷軍賦

鎌田仙十郎・伊勢雅楽持切在高所分ノ伺

御先手大砲人数賦

長州藩冤罪申述本藩へ依頼

伊集院伊膳支配下へ訓諭

諸郷士英式兵隊組織設立

江戸各邸居住ノ輩下麁人名

五三二 茂久公御上京ニ就キ御親書之訓令其他

十一月一日

家老中江

今般於

朝廷、天下之大政被為

聞食候旨被仰出、

中將様御快氣不被為在候ハ、我等早々上京候様、召

命ヲ奉蒙候処、未御順快不被為至候付、我等神速發途、

闕下ニ拝趨御受可奉申上令決心候、元来

順聖院様

皇国内外之御危急差迫リ、

王室日々衰体ニ被為赴候ヲ、深憂シ給ヒシニ、中道ニ

シテ御逝去被為在候付、御遺志ヲ被継、壬戌以来

中將様東西不容易御尽力被遊、復古之大典ヲ挙ケ、君

臣之名義ヲ正シ、不拔之御国是相立候様ニトノ御忠誠

ニテ、四度御上京被遊御配慮候得共、時運之然ラシム

ル所以ニシテ、事々徹底之場ニ至リ兼、乍去

皇国内尊

王之大基本ヲ被為開候御功業ハ、御事蹟上ニ於テ、頭然タル事ニ候、就テハ此度政權ヲ

朝廷江奉歸、諸候來會、公議ヲ以御基礎被為立度ト之機會ニ相當候、付テハ是迄之御大志今日ニ至リ、成否相分レ候御場合ト令愚考候、抑忠孝之ニツハ天地之綱常ニシテ、是ヲ全ウスルヲ以テ人之人タルヲ得ベシ、

我等深思熟慮イタシ候ニ、和漢古今忠臣ト唱候者、何レモ社稷ノ興廢ヲ不顧、其道ヲ尽スヲ以テ、千載之龜鑑ト相成候ハス哉、今國家廢弊、百事不備、時不至等之說ハ、動モスレバ衆人之難スル所ニシテ、我等又痛心ニ堪サル処ニ候、加之大政一途ニ出ニ正姦黜陟、断然御變革之御実跡相舉リ候儀、別テ不容易重事ニテ、見据相付兼乍苦心候得共、乍恐、宝祚之御浮沈ニ相拘リ候御大事之時節、豈是ヲ捨彼ヲ取、他ヲ顧為ニ暇アランヤ、

此上ハ尽死力、

順聖院様 中将様御趣意ヲ奉戴シ、上奉安

宸襟、下万民塗炭之苦ヲ救ヒ、忠孝之大道ヲ踏、挽回シ鴻業ヲ相遂度、令確断候条、各ヲ始一同不可止之至情厚汲受、屹ト心得違無之、我等之不肖ヲ輔ケ、心ヲ

一ニシカヲ同シ、

皇國之干城タラン事ヲ相頼候事、

但申迄モ無之候へ共、諸手当向、甚実用非常之簡便

第一タルヘク候、

〔卷〕十一月朔日

御別紙之通

太守様御筆ヲ以被 仰出、誠以難有御趣意之御事候条、一統謹テ被奉承知、

思召ノ程深可被貫徹候、此旨諸郷・衆中へ可被申渡旨地頭へ申渡、諸組与力ノ儀ハ、支配頭へ可申渡候、

卯十一月七日

〔久治〕島津

〔久治〕右衛門「桂」

〔帯〕刀「小松」

〔伊勢〕勢「島津」

〔久治〕龍衛「川上」

〔久治〕内膳「町田」

五二三 茂久公御上京届書

〔五三ノ一〕島津中將事、今般御用被為在候付、早々上京可仕、若

所勞快氣不仕候ハ、私上京可仕旨承知仕、同人儀、未快氣不仕候付、私今日上京仕候、此段御届申上候、以上、

十一月廿三日

薩摩少将

五三ノ二

私事、今般依召着仕候付、参内天機奉伺度奉存候間、以御都合御免被仰付被下度、此段宜敷御執奏奉頼候、以上、

十一月廿三日

薩摩少将

五二四 茂久公御上京御航路概略

十一月十三日、前ノ濱八ツ時分出帆ニテ、山川湊〔摂宿郡〕ヘ大

鐘過時分着船、同夜四ツ時分山川出帆、十五日朝六ツ

時分佐賀〔天分縣〕ノ關ヘ着船、十六日

太守様佐賀ノ關ヘ被遊御上陸、私共上陸イタシ、諸所

見物イタシ、ゼンサイ抔タベリ面白事御座候、同夜八

ツ時分佐賀ノ關出帆、十七日八ツ時分、長州ノ内三田〔山口縣〕

尻ヘ着船、

太守様被遊御上陸、御供廻リハ少シニテ御座候、十八

日夜四ツ時、三田尻出帆、廿日七ツ兵庫ヘ水取ニ掛リ、同夜四ツ時分兵庫出帆、大坂川口ヘ廿日夜七ツ時分着船ニテ御座候、

卯十一月廿一日

五二五 從軍人某紀事

一 太守様卯十一月廿日大坂ヘ御着、廿一日御滞坂、廿二

日御立、廿三日御京着被為在候ヨシ、〔十二日〕三日ニ三邦丸着

船ニテ御左右已来、其内長州ヘ御上陸、大膳父子ヘ御

遊被成候ヨシ、

一 將軍辭職ノ儀、大名十七頭不合点衆有之候ヨシ、

但伊集院周〔同右衛門〕ノ嘶ナリ、十二月八日承候、

一 五撰家并関白職ヲ被廢、有栖川ノ宮議定惣裁トイフ職

ヲ初メラレ、尾州・越前・薩州・土州・備前ヘ議定ト

イフ職ヲ被為命候儀、今徳川ノ權ヲ

朝廷ニ帰シ、右ノ諸侯ヘ議定トイフ職ヲ被命候儀ハ、

イツレ此衆ヨリ、日本ノ政令共出、左候ヘハ徳川ノ政令

名目被相替候迄ニテハ無之候ヤ、議定職ヲ被為命候節、

再三辞退モ可有之処、安々ト受命ノ儀、何トカ議論可

有之哉、

十二月廿三日記ス

五二六 茂久公御上京ニ就テ御沙汰書

国事之儀ニ付、応召早速登京、

叡感不斜候、内患外憂切迫之御時節候間、滞在有之厚致尽力、可奉安 叡慮之旨御沙汰候事、

五二七 久光公燈下ノ御作

既辞 帝京日更閑、不忘男子金石胆、惟須臾為欲專簾、往得東向玉遺翰、

十一月於于燈下書

五二八 当時京攝ノ巷説

一此般鷹司・近衛家・尹宮

勅勤之事ハ、有栖川宮戦争之時、長州一致之所置振りニ付、私怨之取扱ニテノ由、評判現然也、

一江戸芝薩屋舖内へ、水戸其外之浮浪士五百人計、拘扶

持イタシ候由、又大和龍田辺之郷民共、同扶持相成候

由、夜々京師へ立越用金請取候由、御門へ参り周旋方

へ逢ヒ候テ、西郷・大久保へ相通シ、金子下渡相成候

事之由、又肥前ノ大村ヨリ一小隊、藝州ヨリモ半隊位、

皆扶助相成候由、長人ハ絶へス屋敷へ参り居候由、

五二九 〔茂久上京道程〕

卯十一月廿日

太守様大坂御着、廿一日御滞在、廿二日御立、廿三日

御着京之段、十二月三日ニ御左右申来候、其内長州へ

御立寄、大膳父子へモ相逢之由、

五三〇 大膳大夫上京ニ付西ノ宮ニ滞陣シ其地方

ノ人民ニ下シタル告諭文

今般御所ヨリ御沙汰之御旨有之、末家并ニ家老当表罷

越候、然処昨年藝州ニ於テ、幕府ヨリ召出相成候家老

其外、無故ニ兵威ヲ以テ拘留セラレ、遂ニ戦争ニモ及

ビ候段ハ、世間承知之事ニ候処、当度御所ヨリ被仰出候御儀ニ付、不取敢罷出候得共、又候関東ヨリ如何様之御仕向可有之モ難計ニ付、為警衛人数召連候次第ニテ、全以此方ヨリ兵端相開キ候儀毛頭無之、暫ク当処ニ於テ何分之御沙汰相待候心得ニ付、少シモ掛念ナク各其職業相励候様、夫々予告諭致候者也、

内田仲之助(殿)

条々

一兵士陣外出行、不法之所行致候者有之節ハ、逐一本陣へ可訴出事、

一兵士ト偽リ有徳之家ニ立入、金錢等無心箇間敷儀申者可有之モ難計、右様之者於有之ハ、早急本陣へ可訴出事、

五三一 相國寺山内宿陣ノ為メ借用照会

今般修理大夫・大隅守之内卷人、上京可仕旨、從

朝廷蒙 御沙汰候、依時機テハ、兩人共上京仕モ難計

候間、(朱一(相國寺々也))山内御寺中為本陣拝借、且御領内寺院人家等、

為下陣借用仕置度、此段以使者奉願候、

十一月三日 松平修理大夫内

五三二 茂久公御上京御発航

十一月四日御発駕被 仰出候得共、被召延同十三日御

立、三邦丸ニ御乗船、海陸軍兵士翔鳳丸・平運丸(御軍艦 春日丸)

同日昼過比前之濱出帆、

三邦丸十二月二日前之濱江帰帆、

春日丸正月六日帰帆、

五三三 手扣

今般修理大夫・大隅守之内一人上京可致旨、從

朝廷蒙

御沙汰候、依時機ハ兩人共上京仕モ難計御座候間、為

在陣其御山内寺中拝借、且御領内寺院人家等為下陣借

用仕置度、此段以使者奉願候、

薩摩少将内

遠武橋二(秀行)

書附一通

十一月三日

但

仁〔嘉彰親王〕和寺宮御山内且寺院等、御借入被成度旨、

仁和寺宮

御取次

田中志摩

右へ持參、右志摩へ致面会差出候処、暫時相待候様申

聞候ニ付扣居処、再出会則申上候処、御承知被成候旨

申聞候付、程能申述罷帰候、

右之通、御留守居附役遠武橋ニ相勸申候間、別紙写相

添、此段申上候、以上、

卯十一月四日

新納〔立夫〕嘉藤二

糺〔金生〕様〔采〕一閑山一

島津忠義家記

〔東京大学所蔵本にて校訂〕

五三四 〔陣屋取締令〕

今般

太守様就

御上京ハ、以

御書取被

仰出、不容易

御趣意之程、一同奉拜承候通候、付テハ諸隊ハ勿論、

御供定詰等之諸役場職掌相属、御作法ニ基キ礼讓ヲ旨

トシ、

御趣意奉貫徹候様無之候テハ不相濟、是迄追々申渡置、

且兵隊之儀ハ、当春被定置候規則モ有之事候へハ、此

節尚亦左之通、御邸内外陣營等之取締向、嚴重申渡候

条、此上違犯之族於有之ハ、無用捨可及処置候、

一陣屋之儀、毎月一度ツ、式日相究、御軍賦役頭取・御

軍賦役之内一人、御供目付・御作事掛、其隊監軍立会

ニテ致見分、外廻不堅固之場所ハ、早速釘付等可有之、

尤戸障子等之數相改、毎陣屋掛板ニ記置、見分之節致

不足候欵、又ハ無故損傷之品有之候ハ、御作事方ニ

テ取繕ヒ、右代料ハ宿陣之兵士御賦金差引ニテ上納可

申、就中御借入之寺院等ハ、他方ニ拘リ、第一奉汚

御名目候儀付、分テ入念致見分置、損傷紛失等之品ハ

可為同断候、

一酒会禁制被仰出候上ハ、醉中逆モ犯罪之者ハ、無用捨

可及取扱候、尤前後不覺ニテ、人ヲ傷殺イタシ候モノアラハ、罪一等ヲ可加、或ハ醉狂ニテ、傷殺之掛合致見聞候ハ、其隊ヨリ乱心者同様取押置、翌日御側役又ハ本宮役所へ可申出候、

一隊中之儀、律令作法兼テ取締向有之事候得共、士分陣營ニ候得ハ、分テ嚴重可嗜事候条、万一口論乱歌等猥ケ間敷振舞、他ヨリ致見聞候ハ、其段隊長監軍へ可及引合候、

一監軍並小頭見習等外ニ御用筋無之者ハ、其隊營不相離様可有之、勿論分テ監軍之儀ハ、隊中要務之任ニ候条、平日之儀モ万端隊中へ申合、諸事行届候様可心懸候、  
一両通融御門並相國寺御門ニハ、昼夜共中小姓兩人ツ、相詰、出入之作法嚴重取締可致候、左候テ以来中小姓之儀ハ、詰中横目同様被仰付候間、得其意万端取締向無懈怠相勤、万一御門就出入不法之致方有之節ハ、不差置御側役へ可申出候、

但

兩人ツ、昼夜之勤務候旨、嚴重申付候付テハ、一ヶ月二百匹ツ、苦勞銀被成下候、此上勤場ヲ迦シ、又ハ不取締之廉有之候ハ、屹度可申付候、

一御門番・忍廻・辻番人之儀ハ、以来足輕兵隊之内ヨリ繰廻ヲ以、相勤候様被仰付候、当年中ハ是迄詰合候者一人ツ、両通融御門・相國寺御門へ可相勤候、

但

一昼夜之勤務ニ付、以来一ヶ月百匹ツ、苦勞銀為取之候、

一御圍堀虎落瓦カヲ不顧、陣屋窓ヨリ買物堅令禁止、売人之儀ハ辻番ヨリ氣ヲ付、可追払候、

一御用有之者、又ハ兼テ小札通等之外、夜分之通行不相成候付、札渡場免印無之者一切令禁止候、

一相國寺御門之儀ハ、是迄通嚴重取締イタシ、被定置候外、一切通融令禁止候、

一士分以上為差知人柄候共、伍籍小札無之モノ通融堅令禁止候、若私ニ差通候ハ、犯罪之者ハ勿論、御門番等屹度可及迷惑候、

一被定置候通、暮六ツ時限御門占切、若不罷歸伍籍等候ハ、御側役へ可差出候、

一於外方病氣差起候節ハ、早々同宿へ相通、夫々可及届候、若無其儀御門限相後候ハ、相当可及処置候、乍併致看病候者ハ御構無之候、

一御門拔並相國寺裏口拔出候者ハ、可処嚴科候、下輩ハ  
牢舍可申付候、

一定詰ハ勿論、諸隊共外方之者召抱候節ハ、人柄吟味之  
上、慥成証書相請取添、御留守居へ相付差出候様申  
付候、勿論内分ニテ召仕、寝泊等為致候儀、屹ト不相  
成候条、組中へ召抱候節ハ、右取締掛ヨリ人柄取調申  
出候儀ハ、前条同断申付候、

一諸御役場へ相渡候大津屋人足等之儀、其向御用等ニ付  
出門之節ハ、其局々ヨリ鑑札相渡、右ヲ以嚴重出入申  
付候、

但

一兩御門番人共改方之儀、別テ入念無手拔、御門札  
見届入来候者ハ、何方御用又ハ何方罷通候旨承  
届、且人体モ致見聞、御門札等致所持候共、疑敷  
者ハ差留、其余ハ諸用相弁、早々可致出門旨堅申  
付、成行上番聞届之上可差通候、

一御出入被仰付候諸職屋之者共、銘々入来候手伝小者等、  
御門出入之儀ハ、其筋へ札渡所ヨリ鑑札相渡置候付、  
右之者年名羽書ニ主人印形イタシ、右鑑札取添中番所  
へ差出、罷通候様申付候、

一他国者召抱致外宿候面々、都テ鑑札相渡、右ヲ以御屋  
敷御門致出入、相國寺宿陣へ召抱、同断之者御屋敷内  
へ差越候節ハ、右札境格子門番所へ差出可致出入候、  
且又外方之者ハ通融屹ト差留候、

一大津屋人足之儀、御用之多少ニテ、日々出入増減モ可  
有之候付、兼テ兩御門へ印紙差出置、御用之節ハ同人  
ヨリ之札人足毎ニ為持、右印紙へ引合、致出入候様申  
付候、

一御屋敷内、八百屋当人並手伝之者ハ、札渡所ヨリ札相  
渡置、右ヲ以致出入候様申付候、

一御出入之者共、名前都テ御留守居方並御裁許掛方へ、  
帳面可取仕立置候、尤以來御出入等被仰付候節ハ、手  
形所之儀ハ聞合之上申出、御裁許方之儀ハ吟味相下候  
間、聞合之上宜敷者ハ其通被仰付候付、証文当リニテ  
双方仕付方、屹ト行届候様可取計候、

但

一外方之者出入被仰付、御裁許方聞合等之御用筋ハ、  
御供目付方へモ引合、相勤候様被仰付候、  
一御作事方並御買物方、蔵諸職人等御門出入之儀ハ、別  
段申渡通ニ候、



一 兵隊取締向之儀ハ、一切本營役所ニテ受持、勿論之事

候間、分テ隊長監軍へ申渡、尚又行届候様可取計候、

一 御屋敷中一切之取締見聞ヲ配リ、不法ヲ警メ候儀ハ、

御供目付・御裁許掛職掌当然之事候条、分テ行届候様

相心掛、見聞之形行ハ向々へ可申出候、御屋敷内陣屋

廻リノ儀ハ、御供目付是迄之通ニ相心得、兵隊ニ致閑

係候事件ハ、御軍賦役頭取へ引合、差懸候儀ハ隊長可

及直談候、

一 又者之儀、主人以印紙御門出入申付候間、印紙無之者

一切差通間敷候、

右之通御屋敷内取締、内外陣營之作法、御門出入等之

儀、今般分テ嚴重被仰付候条、請持之御役場ニ於テ得

其意、一涯行届候様可取計旨、向々へ不洩様、早々可

申渡候、

十一月

(島津)

伊勢

(平)

佐次右衛門

(関山)

卯十一月廿五日

御本文之通向々へ致通達候、

田尻 務 (種賢)

(島津忠義家記  
東京大学所蔵本にて校訂)

五三五 (宮中人事諸侯上京並ニ毛利家事情)

一 近衛様左府、(実忠)一條様右府御辞退、

九條様左府、(道孝)大炊御門様右府、(家信)廣幡様内府、

右御内意被 仰出候事、備前様猶又御所勞、今暫御上

京御延引、

一 今度被 仰出候趣モ有之候付、衆諸侯一同上京可致儀

ニハ候へ共、不残上京候テハ、一体ノ警衛向差支之儀

モ有之候間、當時在府者之内線合、難出来面々ハ、為

名代重臣共為差出、国邑ニ罷在候モノモ、病氣幼少之

輩ハ無拠儀ニ付、是亦名代為差出候様可仕卜奉存候、

尤名前之儀猶取調可申上候、此段申上置候、

付札

當時警衛之向ハ、名代重臣差登可申、且在府之者並

国邑ニ罷在候モノ、或ハ幼少之輩ニテモ、銘々無拠

子細申立、時宜相伺可申候事、

一 毛利家ヨリ別紙之通、使者ヲ以申越候、尤此義ニ付テ

ハ、猶從 朝廷御沙汰有之候迄、上坂可見合旨申達候様、從 朝廷被 仰出候付、其段毛利家並吉川監物〔經幹、岩國藩主〕へ相達候様、去ル十日幕府ヨリ達有之候付、早速以使者申達候得共、全行違ニテ差越申候間、一応御届仕候、此段可然御執奏被成下候様奉願候、以上、

十一月廿一日

安藝少将

〔別紙〕朝廷御召登之段、御達有之候砌、末家中気分相罷在、

重大之 御沙汰筋等閑打過候之儀、奉恐入候付、不取敢家老計発途為仕候段、及御達置候処、末家之内病氣少ニテモ快候ハ、一同大坂表へ可罷出トノ御事ニ付、種々保養相加候得共、今以駈ト無之、余リ遷延仕候テハ、重々奉恐入候儀ニ付、〔毛利元蕃、徳山藩主。元功、徳山藩世子。〕淡路名代毛利平六郎、並家老毛利内匠、〔親信〕監物名代宮庄主水一同上坂被致申候間、旁之趣

朝廷向宜御取計致御頼候、

島津忠義家記  
〔東京大学所蔵本にて校正〕

右ハ御所旁、且当御時節柄不器之御在官、深被為恐入候付、左大臣隨身兵仗等、御辞退被仰上候処、御願之通被

聞食候段、為御知有之候付、不外御向柄之儀付、太守様ヨリ御口上一通、御挨拶トシテ、御留守居御使者ヲ以可被仰進哉之旨申出候付、達

貴聞其通申渡候、御留守居首尾書等相添、此段申越候条、

中将様被達

御内聴、御右筆頭御使番へ、被達置候儀ハ、何分モ可被取計候、以上、

卯十二月五日

島津伊勢

嶋津圖書殿

桂 右衛門殿

小松帶刀殿

川上龍衛殿

新納刑部殿

町田内膳殿

五三六ノ一

以手紙得御意候、然ハ左府殿御所勞且当御時節柄、不器之御在官被為恐入候付、左大臣隨身兵仗等、御辞退被仰上、併国事御用之儀ハ、乍御不才精々御励勤可被成旨等被仰上候処、今日御願之通被

聞召候、仍此段御自分迄為御知可申入旨ニ付、如斯御座候、以上、

十一月晦日

今大路伊豫介

松井河内介

内田仲之助様

新納嘉藤二様

五三六ノ二

近衛左府様、此節左大臣御辞退被仰上候儀付、御用人中ヨリ別紙之通、為御知申来候処、不外御向柄之儀ニ付、太守様ヨリ御口上一ト通り、為御知之御挨拶トシテ、私共御使者ヲ以被差出候テハ、何様可有御座哉ト吟味仕候、此段申上候、以上、

卯十二月四日

御留守居

〔宋九〕  
一本文致承知、達

御内聴、御右筆頭御使番へ相達、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

辰三月十五日

川上龍衛

島津伊勢殿

〔東京大学所蔵本にて校訂〕

五三七 〔盛岡・岡山留守居重役召集〕

丁卯十月

国家之大事、見込御尋之儀有之候間、詰合之重役、明後十三日四時、二條

御城へ可罷出候、尤重役詰合無之向ハ、国事ニ携候者可罷出候、此段申達候、以上、

十月十一日

〔能棟、目付〕  
設楽右次郎

〔安室、大目付〕  
戸川伊豆守

〔利剛、盛岡藩主〕  
南部美濃守殿

御留守居

〔池田茂政、岡山藩主〕  
松平備前守殿

御留守居

御名

御留守居

島津忠義家記

仕候、以上、

十月十四日

慶喜

〔島津忠義氏所藏本にて校訂〕

五三八 〔慶喜ノ將軍職辞任ノ奏上書〕

臣慶喜謹て

皇國時運之沿革を考候に、昔

王綱紐を解て相家権を執り、保・平之乱政権武門ニ移て  
より、祖宗ニ至り更ニ寵眷を蒙り、二百余年子孫相受、  
臣其職を奉すと雖モ、政刑当を失ふこと不少、今日之  
形勢ニ至り候も、畢竟薄徳之所致、不堪慙懼候、況乎  
当今外国之交際、日に盛ナルより、愈

朝権一途ニ出不申候ては、綱紀難立候間、從來之旧習  
を改め、権を

朝廷に奉帰、広く天下之公議を尽シ、  
聖断を仰き、同心協力共ニ

皇國を保護仕候得は、必海外万国に可並立候、臣慶喜  
國家ニ所尽、不過之と奉存候、乍去尚見込之儀共有之  
候得は、可申聞旨諸侯江相達置候、依之此段謹て奏聞

五三九 〔諸侯上京ニ付イテ〕

五三九ノ一  
松平越中守

宮中へ持参

別紙之通被

仰出候付テハ、被為在御用候間、早々上京可有之旨、

御沙汰候事、

十月

一 勅書御写 二 通

但

太守様

中將様

一 御召書 一通

但

中將様へ御所勞御快氣無之候ハ、

太守様へ御上京之旨、

伝奏

日野大納言様

雑掌

近藤外記

右今夕可罷出旨、雑掌中ヨリ之切紙到来罷出候処、右之通被相渡候旨、右雑掌ヲ以被仰聞候間、御国許へ早々可申上旨、相応申述置候、

右之通、私共差支、御留守居付役永山左内相勤申候、此段申上候、以上、

卯十月十五日

内田仲之助

帯刀様

追テ、明申半刻被申達候御用之儀有之候間、可罷出旨是亦申聞候ニ付、此段申上置候、

五三九ノ一

大事件外異一条ハ尽衆儀、其外諸大名伺被 仰出等ハ、

朝廷於兩役取扱、自余之儀ハ、

召之諸侯上京之上

御決定可有之、夫迄之処徳川支配地、市中取締等ハ、

先是迄之通ニテ、追テ可及御沙汰事、

御書附 一通

但

外異一条ハ尽衆儀、諸大名伺被 仰出等ハ、兩御役御取扱相成等之儀、

伝奏

日野大納言様

雑掌

近藤外記

右ヨリ被成御達候儀有之候間、今日可罷出旨、雑掌中ヨリ之切紙到来、罷出候処、右外記ヲ以御別紙被相渡候、

右之通私共差支、御留守居付役遠武橋二相勤申候間、御別紙相添此段申上候、以上、

卯十月十六日

内田仲之助

帯刀様

五三九ノ三

御用之儀有之候間、明廿日巳刻無遅々、

禁裏御所仮建所へ、重臣・留守居家来之内參上可有之候、此段可相達旨、兩伝被申付候、以上、

兩伝奏

十月十九日巳刻

雜掌

御名

〔黒田齊博、筑前藩主〕  
松平美濃守殿  
〔池田茂政、岡山藩主〕  
松平備前守殿  
〔池田慶徳、因州藩主〕  
松平因幡守殿  
〔伊達慶邦、仙台藩主〕  
松平陸奥守殿

御留守居中

別紙之通、雜掌ヨリ到来仕、写相添此段申上候、以上、

卯十月十九日

内田仲之助

糺様

〔島津忠義家記  
〔東京大学所蔵本にて校訂〕〕

五四〇〔十月二十日御達替ニ付イテ内田仲之助

ヨリ關山糺へ書翰〕

一昨廿日巳之刻

御所御仮立へ御用被為在候間、重臣留守居家来之内扈  
人可罷出旨、伝奏日野大納言様ヨリ御達有之、其段以  
首尾申上候処、私被差出候付、同刻罷出候処、拾万石

以上諸侯様重役等相揃候上、伝奏様雜掌早参之者ヨリ  
呼出、鶴之間二間、闔涯ヨリ順々着座之上、議奏正親  
町三條卿・柳原卿・長谷卿、伝奏飛鳥井卿・日野卿御  
出座、別紙之通御達ニテ、御引入相成申候、然処暫間  
有之、又々同様呼出着座之上、別紙印付之通御達替相  
成申候、

右ニ付、土州様・藝州様御重臣等へ於同席面会、右御  
請答之件ヲ得卜相談、今日猶又藝州様御重役辻正藏方  
へ出会、得卜評議之上、連名ヲ以御両役様之御内へ以  
書取申上候方ニ談置申候間、其通ニテ御宜敷候ハ、  
私罷越候様可仕候、右御廉ニ付テハ、専帶刀殿右兩藩  
へ御打合、御尽力被成置候末之儀ニ付、イツク迄モ同  
様御座候方可宜哉ト奉存候、何分御吟味之趣、早々被  
仰渡奉存、別紙写等相添、此段申上候、以上、

卯十月廿一日

内田仲之助

糺様

追テ申上候、当分帶刀殿御初御留守居中之儀ニ付、  
吉井幸輔・新納嘉藤二ニモ、私同様今日出会イタシ  
候様御座候へハ、遺漏之儀有御座間敷ト奉存、此段

モ申上候、以上、

〔島津忠義家記  
〔東京大学所蔵本にて校訂〕〕

五四一 〔十月二十日御達〕

去ル十七日別紙之通

御所へ被仰立候処、下札通被

仰出候儀ニ付、松平備前守様衆之回状、〔茲廣 津和野藩志  
〔忠寛〕 亀井隠岐守様〕

衆ヨリ相達候付、本書ハ島津淡路守殿御方へ致順達候間、写相添此段申上候、以上、

卯十月廿二日

内田仲之助

糺様

以廻章致啓上候、然ハ御所司代松平越中守様〔定敬 桑名藩志〕ヨリ、別紙二通御差越被成、早々可及御通達旨申来候間、則写二通相廻申候、急々御順達被下、御廻納ヨリ御返却可被下候、以上、

松平備前守内

卯十月廿日

澤井宇兵衛

御名様

御留守居中様 外略ス

去ル十七日、別紙之通

御所へ被仰立候処、下札通被

仰出候、此段相達候、

十月廿日

一昨十五日被 仰出候御別紙之内、尽衆議トノ御文言、

召之衆諸侯上京之上、公論ヲ被為尽、差掛候儀ハ、

詰合諸侯諸藩士等ニ、會議被

仰出候儀ニ御座候哉、

下札

書面之通、

一諸大名伺被 仰出等ハ、於両役取扱候トノ御文言、

諸侯ヨリ御両卿へ伺差出候節ハ、衆議ヲ被為尽、御

決定之上、御両役ヲ以被

仰出候儀ニ御座候哉、

下札

尤於重事ハ、尽衆議候上、取扱候事、

尋常小事ハ直ニ取扱候事、

一支配地トノ御文言、

山城国其他御領所之儀ニ御座候哉、又ハ徳川領地ヲ

被 仰候儀ニ御座候哉、

下札

支配地之儀ハ、

禁裏御領所之儀ニ候、

十月十七日

島津忠義家記  
〔東京大学所蔵本にて校訂〕

## 五四二 寺島宗則建言

此節將軍家ヨリ奏聞之儀有之候ニ付、

御沙汰ヲ以、諸侯被為 召候ニ就テハ、 太守様被遊

御上京之筈奉承知候、右ニ付微臣宗則兩度西洋ニ罷越、

聞見仕候毎ニ、 皇国ニ干渉仕候事共、漫録仕置候得

共、時モカナト筐底ニ蔵シ置申候処、此節

朝廷ヨリ諸侯衆議被 仰出候ニ付テハ、愚言狂説モ、

事ニ依り万一之御見合ニモ相成可申哉ト奉存、不堪舞

蹈、乃筐底ヨリ稿取出シ、書拔奉入 御覽候、右之稿

ハ一年前洋中ニテ置候モノニ御座候処、其間変移亦  
不少候ニ付、此節愚説書添申上候、当分 皇国振起之  
為、政權奉歸

朝廷候事ニ於テ、 御議論被 仰上候ニ就テハ、天下  
之人皆存外ニ感服仕候様ニ無之候テハ、乍恐行ハレ不  
申候、畢竟政權武門ニ移候様ニ成来候ハ、封建之故ニ  
御座候ニ付、総テ封建之諸侯ヲ被廢候ハ、真ニ王道  
相立候義ト奉存候、抑勤 王ヲ唱ヘ候ニ、此上モナキ  
忠節ヲ尽サンニ、其封地ト其国人トヲ

朝廷ニ奉還候テ、自ラ庶人ト相成、後之撰挙之有無ヲ  
期シ候ニ越シタル事ハ無之、如是ニシテ始メテ公明正  
大ナル勤 王ノ分ト謂フヘシト、私カニ愚説立置申候、  
併ナカラ世ニ純ハラ公明正大ノ事ヲ取行ヒ申ハ、難相  
叶訳ニテ、雑録抄ニモ申候通り、兎角人情ノ頑ニ被索  
候事ニテ、双方斟酌仕ヘキ事ニ御座候哉、幸將軍家慚  
懼之罪ヲ謝セラレ候時ニ當リ、我ヨリ先立テ、仮令ヘ  
ハ 御領国何分一ヲ 天領トシテ御返シニ相成候上ニ  
テ、幕府領其外之諸侯領、一統右之割合ニテ被返候様  
ニ、被遊 御尽力度奉存候、是真ノ公明正大ト申程ニ  
ハ、未タ至リ不申候得共、永ク封建之 御恩ヲ被為蒙



時之御忠節ニハ、無此上事ト奉存候、畿内並辺陲等警衛之為、軍船・兵卒其共武用之經費、從來幕府諸侯ヨリ出シ候得共、以來ハ

朝廷ヨリ御弁ニ相成度義ニ御座候、尤

朝廷ヨリ人数被 召候節ハ、平日被申上置候人口之數ニ応シテ被差出、着京之上ハ、

朝廷ヨリ御扶持賜ハリ、動止トモ

朝命ニ被帰候様、相成度奉存候、其他辺陲之衛兵ハ、京師ヨリ御差向ニ相成可申候、総テ官タル者ハ、文武共ニ決シテ封地ヲ以テ禄賜ハリ候儀無之、扶持ニテ賜ハリ候義宜敷御座候、諸家ヨリ領地幾分ヲ被差出候義ニ付、心得違ヲ以テ吝ミ嘆キ候方モ可有之候得共、実ハ得失無之、諸所之警衛之用度ヲ

朝廷ニ差上、夫ヨリ御弘ニ相成候間、同様ニ御座候、唯指令之權

朝廷ニ移リ候丈之相違ニ御座候、其外諸侯述職之事、外国互市御取締之事、天領司農等之事迄モ、乍恐私ヲ棄テ、被遊奏聞候ハ、則 御腹中ヲ天下ニ被遊拡充候訳ニテ、誰カ服膺不仕者有之候哉、然ルヲ依然タル本之將軍家、本之諸侯ニテ、政權奉帰

朝廷候様ニト、差当リ御奏議モ有之ヘキ筈ニ御座候得

共、名異ナルノミニテ、実ハ以前同様ニ有之、間モ無ク名実ニ被遮可申事明ニ御座候、微臣宗則曾テ海外ニ出候テ、或ハ僭奪數代リ、或ハ瘦地連旱ノ困ヲ履ミ候時毎ニ、我 故国ヲ省ミ候得ハ、

神明統ヲ伝ヘ、天險疆ヲ開キ玉フ、忝クモ覆載ノ一土ニ生レタル事ヲ得テ、塵芥之微軀モ、我 皇国ヲ誇稱仕候程之面目ニ御座候、然ルニ今日

王室之弛張切迫之時ニ当リ、愚トイヘトモ、狂トイヘトモ、黙過ニ堪テ不申、敢死罪ヲ不顧申上候、以上、

丁卯十一月二日 臣宗則寺島陶藏謹具

五四三 太守公御上京前佯国人白山建言之趣意

聞書

第一ヶ条

一万事何事ヲ成スニテモ、日本ノ國權ヲ以、政務ヲ成スヘシ、

第二ヶ条

一各藩興廢ヲ共ニシ、得失ヲ等フセネハナラヌ、

第三ヶ条

一列藩交ヲ深クシ、信ヲ厚フスベシ、

第四ヶ条

第一・第三ノヶ条ニ基キ、公論ヲ尽シ、歐羅巴各国ト交ヲナスヘシ、

右白山之大趣意也、故ニ又左ニ朝命ヲ以、外国ニ布告スヘキ大略ヲ述ヘ候、

第一ヶ条

一我ハ日本国帝也、大名ハ又其領国ノ国主也トイヘトモ、我命令ヲ不用トイフ事ナシ、然ルニ徳川氏自ラ日本国主ト唱ヘテ、外国ニ交リ、我国体ヲ大ニアヤマラセリ、其語ヲ左ニ挙ク、

第一

一將軍ヲ差免、

第二

一尔来日本之政務ヲ我レ自施スル故ニ、我国ニ報知スヘキ事務ハ、都テ我ヲ名サスヘシ、伝奏・議奏ヨリシテ是ヲ達ス、

第三

一我ハ日本帝也、大名ハ各其領内ノ太守也、故ニ日本

国ノ政務ヲ論スルニ、各藩ノ大名京師ニ集リ、議事

院ニ会集シテ政ヲ議シ、其決議ヲ我ニ問ヒ、然シテ

後布告スル也、

第四

一長崎・横濱其他開港地之儀、是迄徳川氏ノ名号ヲ以、

相開候得共、尔来是ヲ我名ニ改メ開クヘシ、

右之通我日本政府変革イタシ候上ハ、是迄ヨリモ尚、

外国トノ親睦ヲ重スヘシ、

日本政府<sup>㊦</sup>

右国帝ノ御直咄ヲ、伝奏・議奏ヨリ筆記ス、

伝奏某印

議奏某印

右之外当分京師ニ有之候諸侯ノ連名、

……………印

……………印

……………印

右之通乍恐申上候間、不明ノ御議論無之、御採用有御座度、左候テ事ヲ談センカ為ニ、英・佛・日本三ヶ国ノ文章ヲ以、外国ミニストルヘ布告スヘキ事ニ奉存候、

モンフラン  
白山謹テ書

五四四 肝付郷右衛門普請奉行ヲ命ス

太守様十一月十三日御乗船、同日出船平運丸、

肝付郷右衛門

右ハ 太守様御上京御供普請奉行土師吉兵衛へ、被仰

付置候処、病氣ニ付被成御免、右代郷右衛門へ被仰付

候条、可申渡候、

十一月

伊勢

右之通、十一月五日黒田嘉右衛門取次、

五四五 伏見・烏羽・會津戦御祝被下

<sup>五四五ノ一</sup>明後十六日四時、

御対面所江

御名代悦之助様御出、此節帰陣之壹番・貳番・三番兵

隊、并一番大砲隊之総人数江、同所於席々

御目見、御目録拝領被仰付、分隊長以上之面々ハ、

御盃、其外之人数江ハ、

御流頂戴被仰付、付役以下夫卒ハ、同所庭上へ、一同

罷出、御目見被仰付候、

但手負等ニテ当日罷出カタキ面々ハ、名代へ御目録

拝領被仰付候、左候テ付役以下之儀ハ、於陸軍所

御酒頂戴、并御目録拝領被仰付候、

本文ニ付

一金千匹ツ、兵隊三百二十九人

内

式拾六人分隊長以上

一金三百匹ツ、付役三人

一青銅千匹ツ、夫卒九十人

本文付金錢ハ、會計方ヨリ直ニ陸軍所調役方へ為引

渡候事、

一御酒頂戴ニ付テハ、二丸御小納戸請持

一付役以下

御目見ニ付テハ、陸軍所調役引受、御目付申談可致

差引候、

右之通被仰付候条、大隊長へ申渡、御手当向不洩様可

取計旨、向々江可申渡候、

<sup>明治元年</sup>十一月

<sup>島津久徳</sup>良馬

辰十一月十四日

御本文之通、大隊長・二丸御小納戸・御目付・陸軍所

調役へ申渡、奏者番・御使番・御文書奉行・御右筆・

御数寄屋頭へモ申渡候、

取扱

良馬

取次

猪飼(尚香) 央

但御軍艦春日丸・乾行丸乗付之面々江、同日御目見

被仰付候付、御盃頂戴之上、夫々応身分金千匹、

又ハ三百匹ツ、御目録ヲ以拜領被仰付候事、

明七日四時、

御対面所江

御出座、此節帰着之御軍艦春日丸船将初、并乾行丸乘

付之面々、海軍所付士以上ハ、同所於席々

御目見、御酒頂戴被仰付、其以下水夫・火焚等ニ至迄

同断、庭上江一同罷出、

御目見被仰付候、

但御酒之儀ハ、於海軍所頂戴被仰付候、

一御酒頂戴ニ付テハ、御小納戸請持、

一海軍所付士以下

御目見ニ付テハ、海軍所調役引受、

御目付申談可致差引候、

右之通被仰付候、船隊将江申渡、御手当事等早々取計

候様、可承向々江可申渡候、

(明治元年)

十一月六日

内膳

五四五之二  
一当春以来、伏見・鳥羽并関東筋・奥羽表江被差出置候

兵隊之儀、今般會津落城、其外諸所降伏ニ付、追々兵

隊御国許之様、帰陣被仰付候段相違、御当地着之上ハ、

夫々御祝等可被成下、其外御褒美被下品等之儀、取シ

ラへ置候様被仰渡、得卜評議仕候処、兵隊帰陣御祝於

被下ハ、士分以上之儀ハ、

御流頂戴被仰付候節、正金千匹程ツ、御熨斗被成下、

士分以下付役等之儀ハ、正金三百匹程ツ、夫卒等ハ

青銅千匹程ツ、可被成下哉、兵隊江被差出置候御兵具

方足輕・諸家来中之儀ハ、士分以上之列ニ御取扱可被

仰付哉、尤手負等ニテ罷下居候面々之儀モ、同様可被

成下哉之旨、會計奉行申出候事、

本文吟味相当相見得候付、申談達

御内聴候処、其通取計候様承知仕候事、

辰十一月六日、

御本文之通、船隊將江申渡、掛之向江申渡候、

取次

西 筑右衛門

五四五ノ三

反逆無道之會賊既ニ滅ヒ、余党未片付由候得共、不遠

全勝之報可有之、然ハ恩賞之施肝要ニ候得共、予メ選

置度候、功勞之実跡ハ諸隊帰陣不相成候テハ、淺深厚

薄之所調可付兼候得共、大綱立置候得ハ、細目之商議

ハ可致易候、当春ヨリ諸隊之精力無不尽、粉骨碎身之

働無不至、累日連月相戦、其艱苦不可言之処、更ニ退

屈之態全無之、其内遂ニ命ヲ殞シ、又ハ蒙重創、苦痛

ニ迫候モ有之、皆以初発ヨリ身命ヲ抛、益致勇進、終

ニ大功ヲ遂、皇威相輝キ、

朝廷尊奉之廉著シク、勤 王之素志相立候モ他事ニ非

ス、実ニ悲歎感泣ニ不堪候、因テ此節之賞ハ格別之心

得ヲ以、會計ニ不涉十分至当之処置可有之候事、

右之通、

御筆御書取ヲ以被

仰出候付、明治元年辰十月廿五日写ヲ以、船隊長并大隊長・会

計奉行江奉拜見、致吟味申出候様申渡候事、

取扱

右衛門

五四六 禄高員数御届

一 現石三万四千四百石式斗五升

右ハ、禄高員数申上候様承知仕、如斯御座候也、

明治八年 亥十月廿日

從三位島津忠義

家令

奈良原幸五郎(繁)

修史局

御中

五四七 積年勤王之為恩賞品

一 御短刀 一本

備州長船住兼光作

一 御文台 一

一御硯箱 一

右明治元年戊辰二月廿八日參

内積年勤

王之為 恩賞、別段之

思食ヲ以、拝領被、仰付候、

五四八 島津忠義ヨリ三浦安へ書翰

明治元年五月十五日、諸官府藩臬印有之候ハ、御借覽被成度御照会之趣、致敬承候、拙者事於御当地藩知事被免候付、藩印之儀大参事等取始末イタシ候哉、手元ニ無之、今更大形之次第候得共、以形行此旨及御回答候也、

明治

十三年十一月廿七日

從三位島津忠義

修史館監事三浦安殿

五四九 木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

黒田嘉右衛門様

木戸準一郎

奉復

乱毫御推覧奉願候、

朶雲奉拝誦候、先以御清栄被為居、大賀此事ニ奉存候、さてハ私共も昨今ニも、五代君御光来ニ相成候欤と、御待申上候処、如命無余儀用向ニて、御引はづし難相成候哉、不凶御延引と相成、先生方ニも数日御待せ仕、尚其後は御様子も不相窺、一日々々と不敬ニ打過、何とも奉恐入候次第、偏ニ御容赦奉願上候、嘸々御鬱寂ニ被為居候御事と奉恐察候、節角於爰元も中旬頃まで御待申上、自然御左右不相分候得は、其中ニハ弊藩之蒸氣も修覆相調候ニ付、三田尻辺より出帆可仕と、決議罷在候事ニ御座候、已ニ昨日田中子来訪、御伝言之趣も相伺候ニ付、今日此辺之義も、い曲可申上と奉存候処、最早馬關の方へ御出途ニ相成候欤之由、承知仕候付、乍残念馬關までなりとも相窺可申哉と、奉存居候事ニ御座候、実ニ其而已種々御配慮を奉懸、何とも奉恐縮候次第ニ御座候、殊ニ上国辺へ之思召も被為在候由、態と御帰省ニ相成候ては、実ニ御氣の毒至極ニ奉存候、何卒無御用捨様被仰付度奉願上候、先は為其不取敢御答申上候、匆々頓首奉復、

慶応二年  
十一月七日夜

尚々長々御不自由をかけ奉り、何とも奉恐入候、幾  
亦ニも無御用捨、被仰付候様奉願候、(生) 仁毫末東郷君(源四郎)  
へも可然御致意奉願候、敬白、

木戸

黒田老台

拜復

〔黒田文紀氏所蔵本にて校訂〕

五五〇 木戸準一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔番号三五五と同文により削除〕

五五一 大久保一蔵ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔秋元家云々〕

昨夜ハ御光駕被下候へ共、失敬至極ニ存候、扱秋元家  
(采) 老参リ候哉、次第相分候ハ、急ニ御用御見合相成候  
(箇) 間、早々御申出可被下、此旨得御意候、以上、

十一月十五日

大久保一蔵(利通)

黒田嘉右衛門殿

極々急半

五五二 全上

大坂ヨリノ御翰昨日相違拜見、愈以御安祥奉賀候、然  
ハ御国元情実、且岩公云々之事御申越難有、尚至急御  
直談申上度候間、御着港相成候ハ、直様御発途御着  
懸、御立寄被下候様、来ル廿日御飛脚船出帆之由ニ候  
間、右ヨリ小子西上之筈ニ候へ共、何分御面談ノ上ナ  
ラテハ、難被決候付、折角御待申上候都合ニ付、此段  
伏テ御願申上候、何卒馬車ヲ御飛シ可被下候、此段早  
々謹言、

〔明治三年九〕

十一月十五日

大久保

黒田君

五五三 全上

尚御安祥奉敬賀候、今朝ハ條公江御不参之由、御風邪  
(采) 御増長共ニテハ、不被為在候ヤト奉案候、今日ハ粗御  
咄申上置、何レ同人参昇、言上可仕ト申上候間、格別  
之御事ニ無之候ハ、御参殿大略御申上被下候様奉願

候、明日ハ是非御決定無之テハ、彼是差支可申ト存候間、今日御調不被成候ハ、明朝御氣張可被下候、此分鳥渡以寸楮申上候、謹言、

明治三年乙未十一月十八日

〔卷一岩貫想〕 尚々岩公ヨリ御申越之趣モ有之、條公・岩公限ニテ、

〔三条実美〕

此度之事ハ秘中之秘ニテ、一切漏洩不致候様、只々可心得旨ニ候間、勿論即今之事ハ、直ニ風說致候ニ付、老兄御賢考ヲ以テ、條公へ悉皆御申合置被下候様可頼候、兎角高貴之御方ハ迂闊ニテ、込入候事モ不少候故、分テ御聞へ申上候也、

利通

黒田老台

### 五五四 島津淡路守建言

疎陋狭識ノ私、不願恐彼是奉申上候儀、如何敷候へ共、祖宗右馬頭忠将・同征久ハ、乍恐大中公・龍伯公・維新公ニ奉信従、百戦虎尾ヲ踏ミ、保護仕候、尔来世々海山ノ御高恩ヲ奉戴仕候、不肖之私ニ至リ、其余沢ヲ奉蒙、日夜報酬如何可仕哉ト、苦心仕候折柄、此度幕府

從來ノ失体ヲ悔悟シ、政權ヲ

朝廷ニ奉歸候事、誠ニ以テ天下万世ノ大事不過之、則

君臣ノ名義、始テ明ニ国体一新ノ基ヲ開候儀、全ク

中將様年来之御誠忠御尽力、天地鬼神モ感動致ス所ヨ

リ方場合ニモ相成候事無疑、誠ニ以テ恐悅至極奉存候、

儲亦依召早々御上京可被遊ノ段被仰出、重々恐悅奉存候、

依之私ニモ奉信従、上京仕度趣奉願候処、御上京

ノ上御都合ヲ以、可被仰遣旨奉承知、難有奉存候、扱

王政復古ニ付テハ勿論、天下ノ公議ヲ以テ、御決議被

為在候御事ニ奉存候へ共、実ニ万代不朽ノ龜鑑被為立

候儀、不容易御事ニテ、私ニハ申上迄モ無之候へ共、

和漢古今ノ明君・賢将、其儒師両夫ヲ置候テ、義理ヲ

磨キ、或ハ諫議大夫ト申ス職ヲ立テ、過失ヲ補候事、

御洞察被為在候通、然ハ當時英雄豪傑役ニ数多有之コ

トニ候得共、猶又古典ニモ通議仕才力モ相応ニ有之者

共数輩、御供被仰付候テ、御上京ノ上ハ、平素御左右

ニ被為在、邦家ノ大事体御賢問被為在度、且又乍恐御

欠失有之節ハ、遮テ言上仕候様、兼テ被仰付置度、左

候テ時機ニ寄候テハ、諸藩ノ応接ニモ聊被差渡度奉存

候、兎角政ハ至誠至大ニ出テ、広ク善言ヲ天下ニ相求



候様有之度、禹聞善則拜、大舜有大焉共候得ハ、求善

言ハ古ヨリ明君・賢將ノ美事ト相成候、夫故好善ノ人

々々天下順服仕候、言路閉塞仕候ヘハ、国家危急ニ及

候、其例不少候、乍恐此度御上京ノ儀ハ、実ニ不容易

御儀ニ付、此方様御儀ハ、御国威ト申、御周旋ト申、

天下第一之御梁ニテ、国家興廢ノ基本皆此方様ノ御動

静ニ関係仕候得ハ、虚心平氣ニテ天下ト御応対被為在

候儀ハ、申迄モ無之候得共、唯恐懼仕候事ハ、堂上ノ

儀微祿多欲ニ候ヘハ、後来之御規則貫徹無覺束、心配

仕次第ニ御座候、所謂坊門清忠ノ如キ楠子ノ精忠ト雖、

如何共可為様無之、湊川ノ一戦ニ及候儀ニテ、是併楠

氏ノ楠氏タル所ト存候、雖然人道ノ至極ヲ尽シ、時世

時態ニ協候得ハ、天地ノ氣モ亦回復隆盛ニ相成リ、天

下ノ人心悦服仕候得共、御幸道ト申、御忠勤ト申シ、

万代不朽青史ニ相記候、聊御威光宇内ニ相輝候様、可

相成候ニ付、誠ニ以テ恐悦至極奉存候、然ハ右様古典

道義ノ者共、御供被仰付候ハ、御国内ハ勿論、天下

ノ人心ノ帰向格別可宜ヤト奉存候、実ニ御国家安危ノ

秋、千載之一機会ト奉存候ニ付、不奉願恐言上仕候、

慶應三年十一月九日

嶋津淡路守「忠寛」

太守様へ

五五五 小松帶刀ヨリ後藤象二郎へ書翰

尚々寒冷之候、為天下御自愛被成度奉祈候、乍端書

福岡君其外様へ、前文之形行宜敷御伝達被下度奉願

候、臥床中乱毫御高免可被下候、再〔有脱カ〕

其后御安否不伺候得共、益御多样為天下御尽力之筈ト、

大慶不過之事ト奉雀躍候、僕モ御別袖後航海都合克、先

月二十六日帰国、則修理大夫様・大隅守様へ此節之形

行詳細申上候処、御案外之事ニテ、別テ御大悦ニ御座

候、実ニ天下挽回之時節ニ立至、大隅守様ニハ御病中

ニテ、修理大夫様直様御上京之御決着ニ相成、明十三

日御揚帆之御賦ニ御座候、就テハ僕早々御国元へ罷出

候賦ニ御座候処、豈計哉、帰国之折船中ヨリ足痛相起

居、当月二日ヨリ甚敷相成、進退起居モ心ニ任セス、

誠ニ苦心之至御座候得共、此節ハ

皇国一大事之御場合故、是非御約定通ニ出京、兼テ御

談申上候通、乍不及聊尽力之心得ニテ、過日ヨリ温泉

杯へ差越、昼夜精々入湯、勉強療養モ加候へ共、更ニ

快方ニモ不赴、起居モ出来不申、夫故御国元へ罷出候事モ不相調、無抛（志）大久保差出候事ニ相成候、尤五日方ヨリ罷出候賦之処、崎陽ヨリ蒸艦兩日跡ニ廻船、夫故時日遷延ニ相成候都合御座候間、宜敷御汲取可被下候、陳ハ修理大夫様御出帆之節ハ、是非隨從之心得ニ御座候処、前文之次第ニテ、無抛御供之処ハ、御断申上候時宜ニ御座候、右ニ付テハ兼テ御約定申上候通、御出掛直様云々、御尽力之御筋合モ有之、押テ出京之含ニハ御座候得共、只今通ニテハ迎モ出京出来候丈ニ無之、斯ル機会ニ余痛所ニ悩サレ、天下国家之為寸分之微忠モ不被尽、天運ニ尽果候事歎ト、且恨且歎之他無御座候、乍併精々保養、一日モ早ク上京、微忠モ尽度存慮ニ御座候、外国議事院之条モ、取調掛候史前文之次第ニテ、未十分ニ不致出来候間、出京之節迄ニ細々取調、持参之心得ニ御座候、此節ハ定テ 容堂様御上京之筈、其上ハ御親睦第一之事ニテ、征夷防長事件等ハ、速ニ御運相成候様、御尽力被下度、御着涯之処大事之御場合ト奉存候、僕遲参千載之遺憾、何トモ御断リ申上様モ無之、何卒寛大之賢慮ヲ以、御海涵可被下候、旁御曳合杯不都合之事モ可有之ト奉存候へ共、同役島津伊勢・

西郷・大久保隨從之事ニ御座候間、万端御曳合可被下候、何卒不惡御汲取之程、偏ニ奉冀候、申上度儀ハ山海御座候得共、紙上ニ不尽、孰レ近々拜眉ノ上、縷々御尋旁可申上候、先ハ此旨早々得貴意候、恐々敬白、

十一月十二日 小松帶刀

後藤象次郎様

貴下

五五六 大山格之助ヨリ小松・桂へ書翰

（大挙ニ就テ）

一筆奉拜啓候、先以愈御機嫌克被為遊御精勤、恐悦御儀奉存候、然は一昨廿二日長州より報知有之候次第、左ニ奉申上候、

一去ル十六日昼時分、蒸氣船より御先江、黒田嘉右衛門

三田尻江致着、当夜中ニは（末）御召船も 御着港可相成

迎、相待居候処、翌十七日昼時分被遊 御着船、然処

長門守様（毛利元德、長州藩世子）ニも、速ニ同所迄御出懸相成、翌十八日於三

田尻、終日 御対顔無御滞被為濟、万事 御決定之

上、十九日未明同所 御発船相成、無御滞被遊 御通

船候得は、廿一日 御上坂、廿二日一日 御滞坂、廿三日 御登川之御日割ニ御座候由、左様御座候得は、昨今被遊 御京着候半と、奉恐察候、 御発船翌十四日余程之時化にて、汐杯も相係り候 御模様ニも被伺申候、

一 於長州先般迄 御召、本藩家老、末家ニは徳山侯、吉川家老、明後廿六日三田尻開帆、西之宮辺迄参り懸滞船、御指図ヲ相待候筋ニ相決候由、

〔本〕〔紀伊守〕  
一 藝之世子公ニも明廿五日 御発船にて、外兵隊船は明後廿六日、長州同行にて出船之由、尤於長州も、此節は、倍增之人数も差出相成候由ニ御座候処、惣隊一同出船も不相調、半方は一応御国船着坂、引続彼方江御借受にて、二蒸りニ出懸之賦相決候由、

一 土州 容堂公ニも、去ル十九日、御国御発シにて、廿一日御着坂之御賦ニ御座候由、是ハ土州より藝州江御使者到来、其段長州江報知相成候由、

一 上国之儀も、尔后相変候儀も無御座由候得共、紀州・藤堂等より段々

朝廷江致建言、再応依旧之通、御政権幕府江御依頼被遊度、段々相迫候趣、藝州辺江相聞得候由、

一 五卿方急速被遊御発途と之御旨趣、以御書取被仰出候事件、折柄大脇彌五右衛門当地江立寄、帰国ニ付委細申含奉申上候通御座候処、其末段々

朝廷より被仰出候廉々も御承知相成、孰れ今一層之御沙汰被成御待度、御落着ニ相成申候間、此上御軽卒之御旨趣、被為在間敷奉存候、暫時は不一方行違等之儀有之、大ニ不平ヲ抱キ申候仕合ニ御座候、已来異変之儀、不被為在候間、御安慮被遊可被下候、

一 五卿方之内東久世殿御事は、取分ケ御聡明ニ被為居、尔后之処は、別て為 朝廷御成功之御人物ニ御座候、然処兼て御素志被為在、是然御微行にて、崎陽海外之形勢、其他無残所御熟覽被為在度御宿志ニ御座候処、

既ニ不日 御帰洛ニ差臨ミ候ニ付、唯今之内御微行被為在度、分て極内御依頼之趣承知仕候ニ付、実ニ不容易御大志被思召立候ニ付、不閑御引受申上、万事以薩名、既ニ今夕当地発途、御微行相成申候、尤足輕一人召附、途中之儀は、都合仕候ニ付懸念も無御座、彼地之儀は、汾陽・五代江委細懸合も仕候ニ付、彼是不都合之儀、有御座間敷奉存候、極内此段奉入御聞置候間、被聞召置可被下候、

右は今日崎陽迄幸便有之、不取敢此段為可奉申上、  
如是御座候、恐々謹白再拜、

丁卯十一月廿四日

大山格之助〔編長〕

帶刀様

右衛門様

〔島津忠承氏所藏本にて校訂〕

### 五五七 大山格之助ヨリ桂右衛門へ書翰

乍恐拜啓仕候、追々夏氣相募候処、先以 貴公様益御  
機嫌克被為遊御每勤、恐悦御儀奉存候、然ハ於当地  
三條殿御事モ、尔来愈以御平快ニテ、最早近日ハ平常  
之御容体ニ被為向、実ニ天下之結構ト可申上御儀ト奉  
存候、外四卿様方何モ無御別条被成御座候間、乍恐御  
安慮被遊可被下候、

一先度当地ヨリ吉田清右衛門上国仕居候処、去月末帰幸  
仕候テ、京師表ヨリ御迎船御都合等、細々被御含越候  
趣承知、尤此節ハ御趣意モ被為貫、御基本モ被為立ハ  
勿論之御事ニテ、此上別段  
朝廷ヨリ断然御帰路御復職等之御運ニ相成、堂々タル  
朝命相下り候ハ、無疑奉遙察候、何卒暫時モ速ニ廻船

之御都合相成度、明暮レ東方ヲ望候外無御座候、且ハ  
梅雨ニ差臨ミ、連日之霖雨故カ、彼是時節等ニハ都合  
モ不宜敷奉存候得共、夫等之所ハ枝葉之事ニテ、如何  
様長延候共、更ニ相厭候儀無御座候得共、何分共各藩  
ヨリ日毎ニ船都合向等、訊問ニ逢候事、実ニ凌兼候次  
第二御座候、

一昨日京師ヨリ澤殿御内之者一人、当地へ相見得、上国

之模様モ承り、尤別冊雜説而已不足採事件御座候得共、  
五月五日出立迄之風説ニテ、追々其御地江ハ相洩レ候  
御答奉存候得共、指上申候間、御推覧被遊可被下候、

一爰許御統金之儀、最初三月ヲ限り御引払之見込ニ御座  
候処、存外延引ニ罷成候間、既ニ扨底ニ相及申候ニ付、  
差掛 御国元迄申上候テモ、間ニ逢兼可申ト奉存候ニ  
付、当藩勘定方江示談仕、於大坂為替等之相談仕候ハ  
、随分可相調儀ト奉存候ニ付、自然ハ其通仕向仕候  
テ、御用弁可仕奉存、左様被聞召置被下度奉存候、  
一九州辺何方モ至極之静謐ニ御座候、肥後澄之助世子去  
ル十八日国元出立、佐賀關ヨリ乗船之由御座候、其外  
此度御召之諸侯、未 上京等之儀何共分明無御座候、  
一大村落国難ハ、実ニ小藩ニテハ大粧成次第、兩三日跡

渡邊昇等、條公江御使者トシテ当地へ参り、細々承り驚愕之次第御座候、去月十五日初大身之者兩人割腹ニテ、当月十日廿八人斬罪、十九日八人割腹、彦人大張本長井兵庫於牢中自殺、其外枝葉之処ニテハ名數不相分由、此跡所置容易ニ折合モ付兼候哉ニ細々承り、夥敷次第第二御座候、外〔本〕〔九州〕九路相變之儀承り及不申候、右ハ今日崎陽迄便宜ニ付、当地之形行甚々奉申上度、甚疎陋之書中奉恐入候得共、宜敷御推覽被遊可被下候、恐々頓首謹言、

右衛門様

大山格之助

五五八 寺師宗道日記抄

十一月廿六日 晴天

大門口砲台入附装薬、先日勢揃ニ打方相成候、各砲三発賦り、跡差今日入附方之儀、昨日問合相成り、四ツ時ヨリ拙者大門口へ出役ス、玉薬役川村彦助へ立会、当分入付品等取シラへ、猶不宜品等書付、追テ入附方之筋申置候、八ツ前引取、直ニ瀧之上へ出席イタシ候、

今日町田〔久慈〕内膳殿櫻島砲台打試御見分有之由ニテ、砲声相聞得候、今日モ英国入〔徳方〕之由申事候得共、祝砲モ不聞得候、先日船一艘大豆・米積入、長州船ノ由ニテ内海へ向ケ、山川ニテ鹿兒島之方向相尋候テ、乗来候由ニテ、下町下へ乗付候処、折柄長州ヨリ使者来居候テ引合候処、彼之国之船ニテ無之由申事ニテ、段々乗組之者糾方相成候得共、分明ニ不相分候由、関東ヨリ目明ノ為差越候半トノ風説也、

十一月廿七日 雨天

江戸内府建白写一通遣置也、佐土原侯・土佐容堂侯之建言有之候由、大坂ノ城ハ当分薩州・長州ヨリ御番相勤候由、島津伊勢殿并ニ長州毛利内匠ト云フ者之由、此節備前岡山ヨリ備中之御譜代小藩ヲ攻取、勝ニ乘リ上京出掛候処、於兵庫行列へ仏蘭人障り候事ヨリ混雑成立、仏人ヲ切付ケ候処、激シテ手銃ニテ打合ニ成立、騒動ニヨリ候処、折節為応接京師ヨリ久世〔通徳〕三位殿、行掛り相成取鎮、其場静り候由、然レ共仏人ヨリ曲直之断判六ヶ敷事候由、

五五九 陸軍編制(黒田嘉右衛門調査)

一 此節被召建候陸軍、八拾人ツ、一隊ニシテ六隊、四百八拾人一先可被仰付哉、左候得ハ、当分被仰付置候砲術館稽古、窮士人数百六拾人モ二隊ニ被相分、惣合八隊ニテ六百四拾人ヲ一大隊ニ被召成、可然奉存候事、

一 右通洋銃隊ニ被引替候得ハ、大隊司令官老入・教頭老入・教佐老入・中隊司令官是則一隊毎八人都合拾老入、格別ノ諸役者ニ候由御座候間、能々御入撰ヲ以テ、被仰付度奉存候事、

一 前条拾老入ノ諸役者、当分ノ御小姓与番頭、当番頭ノ内へ被仰付儀御座候ハ、其拾老入ノ分ハ陸軍操練所へ毎勤、其隊下八拾人ヲ混ト請持ニ被為致、隊長外ノ番頭人数ハ、一切操練所ニ不立障様被仰付、自然出席被致度懇望ノ人ハ、隊中兵士ノ員ニ被召加度、勿論吟味役并組方書役等ノ儀モ同断、

一 諸隊兵士ノ列ニ不相加面々ハ、成丈操練所ニ不立障様有御座度、（本）（對永・安政度）先年砲術館ニテ稽古被仰付候時ノ如ク、組方役人等余多入込、権柄役威ヲ以押付候様ノ風采有之候テハ、則人氣沸騰ノ基御座候間、此節ハ一切余計ノ役場立交リ候儀無之様被仰付度、勿論壯士ノ取締向ハ、各受持之隊長ヨリ引受被致候儀、当然ノ事御座候間、

別段取締役出席ニハ及間敷、自身其儀不相調候テ、吟味役并書役等之助力ヲ被相頼体之人ハ素ヨリ、隊長ノ任ニ不堪人ニ相違無之候間、隊長被仰付間敷奉存候事、

一 御城下六組ノ儀ハ、寛永年鑑以来治世ノ御作法ニテ、乱世ノ古制ニハ無之、方今ノ世態ニ立至リ候テハ、弥時世ニ不相合事ノミ御座候間、此節断然被相廢、御小姓与ノ名目ハ、古制ノ通大番ノ名ニ被復、都テ海陸軍隊ヲ以組立、平常定式ノ申出物等ハ御用人へ相付遂執奏、其他達事等奏者方へ被相委、当番頭前ヨリノ取扱ニ被仰付候ハ、名実ニモ相当可仕、左候テ是迄ハ門闕ヲ以、御城下物主等被仰付來候得共、向後隊長ノ儀ハ、門地家格ニ不拘、其器量相当ノ者へ可被仰付、勿論大身分ノ子弟諸役人モ、壮年ノ輩ハ追々諸隊兵士ノ列ニ可被召加旨、分テ被仰渡度、無左候テハ、真ニ士氣振起ノ期ハ無覺束奉存候事、

一 兵士人数星合且御扶持米差紙等ノ取扱ハ、（本）（對永・通徳）当分砲術館掛ノ人数ノ内、年輩相長候者御見合ヲ以、而三人差分リ書役ノ場相勤候様被仰付、其余ハ都テ、隊中被召加度候事、

一 操練所内へハ星合且差紙等、取扱候御座ノミ一局被相

建、当番御軍賦役相詰、其他組頭等モ隊長被仰付候人数ハ、其局へ打込出席有之、左候テ書役ノ場ハ前条通、砲術館掛ノ人数ヨリ相勤可然哉、組方御軍役方ト別局相立候テハ、連々隔絶イタシ、諸事混雜ノ基ニ御座候事、

一 台場受持ノ儀モ、右被召建候諸隊ヨリ、繰廻ノ受持ニイタシ、大砲・小銃兼操練仕候ハ、別段御先手等ノ名目被立置ニ不及、御手当組ハ被相廢可然奉存候事、一 京都其外筑前辺へ、是迄被差出来候守衛人数之儀、以來ハ、必此節被召建候諸隊ノ内ヨリ、被差出候筋被相究置、其外隊中ニ不相加者ハ、如何程守衛方申出候テモ、決シテ不被仰付様、御治定有御座度候事、

一 当分御軍賦役詰所ヲ、先達テ陸軍方ト被名付候処、其通ニテハ海軍ノ事ニ全関係不相成筋相当リ、海陸軍政ノ紀律ヲ相預リ候役局ノ名実ニ不相叶候間、以來御軍賦役所ト被相改度奉存候、左候テ御軍賦頭取并御軍賦役同見習へ、銘々海軍・陸軍双方分テ、掛リ被仰付度奉存候事、

右通取調申上候、以上、

御勝手方御用人席陸軍係

御軍賦役頭取兼務

黒田嘉右衛門

五六〇 海陸掛任命

海軍掛	川上勘解由
陸軍掛	安田喜藤太
海軍掛	小野郷右衛門
陸軍掛	坂元廉四郎
海軍掛	田代宗次郎
陸軍掛	田中治右衛門
海軍掛	門松市兵衛
陸軍掛	園田與藤次
海軍掛	川南東右衛門
陸軍掛	松田健四郎
海軍掛	淵邊直右衛門

五六一 諸郷軍賦

諸郷大砲備一組

一 上下人数 百拾四人

但士以上 八十人

主取夫 四人

從卒 八人

夫丸 貳拾貳人

諸鄉備一組

一上下人數 百四人

但士以上 八拾人

主取夫 四人

從卒 八人

夫丸 拾貳人

右同惣物主ノ備一組

一上下人數 百五十三人

但士以上 九拾七人

主取夫 四人

從卒 三拾貳人

夫丸 貳拾人

右同一陣

一上下人數六百八拾三人

但士以上四百九十七人

主取夫 貳拾四人

從卒 七拾貳人

夫丸 九拾人

御城下大砲備一組

一上下人數 百貳拾六人

但士以上 七拾七人

足輕 六人

主取夫 八人

從卒 拾一人

夫丸 貳拾四人

御城下備一組

一上下人數 百拾六人

但士以上 七拾七人

足輕 六人

主取夫 八人

從卒 拾一人

夫丸 拾四人

御城下一陣

一上下人數 七百六人

但士以上四百六拾貳人

足輕 三拾六人



主取夫 四拾八人  
従卒 六拾六人  
夫丸 九拾四人

右之通御規模帳ニ相見得申候間、此段申進候、以上、

五六二 鎌田仙十郎・伊勢雅楽持切在高所分ノ伺

鎌田仙十郎・伊勢雅楽両家持切在外給地高之分ハ、此節壳払ノ筈御座候得共、持高相減候テハ、軍備モ行届兼候間、先祖勲功旁ノ御取訳ヲ以、是迄ノ通被召置被下度、願之趣篤ト吟味仕候処、基私領・持切在ノ儀ハ、銘々其家先祖忠勤ノ功賞ニ被下置、領地ノ大小多寡モ、勲功ノ厚薄ニ依テ、夫々差別被仰付置候訳ニ可有御座候得ハ、自家ノ余勢ヲ以買求候給地高迄モ、右功賞ニ被下置候領地同様ノ御取訳、可被仰付筋ハ有御座間敷候間、給地高ノ分ハ、此節壳払候様被仰渡、相当可有御座哉ニ奉存候得共、私領持ノ儀ハ、持高是迄ノ通被召置候旨被仰渡、是以無故致兼併居候給地高、其俣被召置候テハ、諸士持高減少ノ御取扱ニモ不相並、別テ不釣合ノ形行ハ、前文同様ノ事御座候処、右ハ其俣被

差置、仙十郎・雅楽両家ニ限り、知行高減少可被仰付訳モ、有御座間敷奉存候間、是迄御軍役手当等、現地一所持同様被仰付置候御取訳ヲ以、御軍賦役シラベ通可被仰付哉ト、同席中ヘモ申談、此段申上候、以上、

御勝手方御用人席

陸軍係 黒田嘉右衛門

五六三 御先手大砲人数賦

覚

一御先手

一大砲六十封度 一挺

什長

國分市十郎

伍長 舘役

松元彦太郎

伍長 舘役

大山次助

戦兵

玉卒役

原田次兵衛

玉葉支配

川上彦次

玉葉役

鎌田雄一郎

打役

大山清右衛門

玉葉役

肝付幸吉

玉竿役

最上孫左衛門

玉葉支配

大山助左衛門

打役

竹内十蔵

右之通被仰付候、

物主

吉利群吉

談合役

仁禮新左衛門

五六四 長州藩冤罪申述（本藩へ依頼）

先達て從

朝廷御召登之段、御達有之候、其御末家中気分不相勝罷在、重大之御沙汰筋等閑ニ打過候儀、奉恐入候ニ付、不取敢家老計發途為仕候段、及御達置候処、末家之内病氣少々にても快候は、一同大坂表へ罷出との御事ニ付、種々保養相加候得共、今以睨ト無之、余り遷延仕候ては、重々奉恐入候ニ付、淡路名代毛利平六郎、家老毛利内匠、監物名代宮庄主水一同上坂為致度、兼て藝州様御誘引之御約束ニ付、出張仕候処、於御手洗重て從

今般於  
朝廷御沙汰被為在候迄之間、上坂被止候段承リ候得共、朝廷大政被為 聞食、猶列藩之公議を被尽、御基本可

被為建旨被 仰出候趣、奉伝承候、

皇国之大慶不過之奉存候、然処是迄弊邑之儀、奉蒙天譴、意外之干戈ニ相及候次第、毫末も奉対

朝廷異心無御座、大膳父子ニ於ては、不奉堪恐縮候得

共、於武門不可止候場合と相成、右時宜ニ相及申候、  
父子勤王之至誠、天地ニ不愧と、士民一途ニ思込候情  
義難黙止、屢以御取伝、幕府江及言上候得共、微衷更  
ニ微上仕兼、必定中間擁蔽暗雲覆天日候儀と、昼夜泣  
血罷在候処、豈図哉今日之御機会と交転仕、実ニ大早  
之雲霓を望之思をなし、西之宮迄到着仕、御沙汰相  
待罷在候間、此上は幾重も宿念貫徹仕候様、奉至願候  
間、旁之趣

朝廷向宜御取計致御願候、以上、

卯十一月

長藩

楫取素彦

國貞直人

薩州御藩京詰

御当役中様

藝州御藩京詰

御当役中様

(所長回天史にて校訂)

五六五 伊集院伊膳支配下へ訓諭

諸郷風俗沙汰ニ付テハ、其郷ノ役々取扱ノ正邪ニ依テ、

風俗ニ拘事ト存候、追々役儀モ申付事候得ハ、尚又精  
微ニ人柄致吟味度、兎角嘸・与頭等相勤候者ハ、第一  
私欲ヲ去リ、義理廉直ヲ専トシテ、士氣ヲ引立、最負  
偏頗ノ取扱無之、道義ノ一筋ヲ守リ、私無キ所ニテ御  
奉公所致肝要ト存候、且又炮術訓練ハ、當時第一ノ急  
務ニテ、一向ヲ修行不致候テ、不叶時節ニハ候得共、  
一心同体不致シテハ、何程致熟練候共、急変ノ期ニ望  
ミ、十分ノ働キ出来兼候半、何レ風俗ヲ正フスルニ付  
テハ、所役々人撰第一ノ事ト存候、且郷ニ依テハ、役  
々ニ場ニ相成居候所モ有之哉ニ相聞得、畢竟役々一和  
不致所ヨリ、右次第或ハ役目進退ニ付、手寄ヲ以内意  
等敷儀モ有之哉ニ相聞得、当然ノ内意ニ候ハ、其節  
ノ吟味モ可有之候得共、右様一和不致郷ハ、最負ノ取  
扱等ニテ内意申出候儀モ不被計、左候ハ、第一風俗  
ヲ乱スノ基ニテ、沸騰醸出ス儀モ可有之候間、右辺ノ  
処尚又役々吟味有之度候事、

十一月

伊集院

五六六 諸郷士英式兵隊組織設立

今般英式兵制ヲ以、諸郷兵隊組合被相定、繰廻当番相勤、臨時變動到来ノ節ハ被差出、尤御出馬等ノ節、依便利大隊被召列、応機変出軍等可被仰付トノ趣ハ、委細被 仰出置候通ニ候処、弥危急ノ秋ニ相成、已二天下ノ乱階生セントスル機運ニ相当、既ニ此節追々兵隊被差出、尚又引続出兵ノ時宜モ難計候ニ付、諸郷々急速練兵ハ勿論、即臨時ノ手当不行届候テハ、御国家ノ安危ニ拘候儀ニ付、右ノ趣深汲受致指揮、噯初役々吃ト致下知、一同致勉強候様可被取計、乍併困窮ノ衆中共、今日為取続致農業等候ハ、即ヨリ右産業捨置候テハ、取続可令難渋候付、右等ノ処ハ其勘弁相加、臨機ノ手当不行届、且海岸ノ儀モ手薄候儀共無之様、嚴重ノ備可為肝要事、

一 境目ノ儀ハ、兼テ人撰ヲ以近領情態相探、異変ノ儀ハ〔悉一他藩地境ヲ云〕、早々申越、一涯嚴重可被致手当事、

一 組合郷ノ内へ變動有之候時ハ、其郷組合一大隊ハ、則其郷へ駆付致応援候様、兼テ可心得居事、

一 一向宗執行ノ者共、諸所于今不相絶、右ハ地頭初役々御趣意汲受、稠敷不致取締候テハ、当時切迫ノ時節、猶更妨ケ相成候付、信仰甚敷 御趣意不汲受者ハ、非

常ノ嚴刑被処候儀モ可有之候付、右ノ趣叮嚀ニ相諭シ、嚴重取締行届候様可被取計候、尤切支丹宗ノ儀モ、近〔采一浦上村〕比長崎又ハ大村辺ノ者共、致信仰候段相聞得、右宗旨ノ儀ハ、猶更御大禁ノ事候付、兼テ取締行届候様心掛居、万々一右様ノ者モ有之候ハ、応時機取扱、形行早々可被申出候事、

一 郷々応高頭銃器相備候儀ハ勿論、其余兵隊ノ人数丈ハ、施条銃於郷々取入候趣法モ、猶又致吟味、是非涯々相備候様、可被取計事、

一 郷々軍役金ノ儀、所産物等ノ余潤ヲ以、可相成相備候様、趣法立ノ儀モ〔采一郷ノ長〕噯ト可被致吟味候事、

右条々ノ趣厚致貫徹、指揮行届候様可有之モノ也、

十一月

右衛門

伊勢

龍衛

内膳

五六七

江戸各邸居住ノ輩下臈人名

定府ト通唱ス

奥御小姓

岩元小平太

家内三人

御馬廻

左近允喜右衛門

同五人

仝

村岡市郎次

同二人

表御小姓

島山彌八郎

同五人

御広敷番頭御庭奉行勤

伊集院卯十郎

同九人

御広敷番頭

富田覺太郎

同六人

表御小姓

上田宗二

同三人

中小姓

石神十郎

同六人

高奉行勝姫様御方掛

御広敷番頭勤

中村傳作

同四人

御広敷番頭

野村彦五郎

同六人

表御小姓

片岡誠之進

同三人

中小姓

大野吉次郎

同八人

右十二家部去ル十八日着船、豊瑞丸ヨリ到着仕、下町

旅人問屋其外へ被召置、追々左之処へ被召置賦、

一明時館跡

一客屋内長屋

- 一 上御役屋敷
  - 一 玉里御長屋
  - 一 草牟田御屋敷
  - 一 柿本寺跡
  - 一 製煉所跡
- 外二

表御小姓

菊地藤七郎

家内三人

御細工奉行御馬廻勤

仙波 等

同 五人

御鳥預御庭方兼務

大橋七郎右衛門

同 四人

御広敷番頭御庭方勤

川上嘉一郎

同 六人

右五家部小倉ヨリ通行、追々着之筈ニテ、旅宿等右同様之御手当ニ御座候、

慶應3年(1867)

本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰  
主上崩御ニ就テ達書報告  
藩士取締達書京都邸ニ於テ  
京都報告  
京都報告  
近衛左大臣殿御辭職報告  
江戸ノ形勢報告

目録

忠義公史料

市來四郎編  
慶應三年十二月ノ一

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」の記載あり  
(紙数一三三枚)〕

〔表紙〕

藩政大改革寺師宗道日記抄  
大久保一蔵ヨリ後藤象二郎へ書翰  
折田要蔵日記抄  
茂久公御参内御断  
大政御一新三職御確定  
京都ノ形勢報告  
仁和寺宮警衛  
京都報告  
西郷吉之助ヨリ小松帯刀へ書翰  
守衛覚悟ノ条々  
有村城之介書翰京都ヨリ  
五藩ノ重役ヲ召シ戒嚴ヲ命セラル  
吉井幸輔ヨリ益満休之助・伊牟田尚平へ書翰  
御元服並立太后等云々御達書  
政權奉還ニ就キ云々藩邸布達  
春山田中日記抄  
大山彦八聞合書  
得能良助日記  
岩下佐次右衛門同僚へ照会  
禁裏御警衛變更

御召書写

京都市中御触

春山田中日記抄

池田猪之助日記抄

五六八 本田彌右衛門ヨリ大久保一蔵へ書翰

今日も御安康奉寿候、然ハ昨朝承知仕候〔朱〕〔何事乎今知ルニ申ナシ〕一儀ニ付、今

一往委曲愚慮演説仕度、昨日も同家江申承候趣も有之、

旁御直ニ申上度、就ハ今日ハ御退出より草庵江御入来

被下様奉希候、貴宅今日も御客来有之模様、伺得候事

も候間、此段分て奉得貴意候、已上、

十二月朔日

二白、銅管等之儀ハ、何卒無御失念宜御頼申上候、

大久保正助様〔利通〕

本田彌右衛門〔親雄〕

要用

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

五六九 主上崩御ニ就テ達書報告

主上崩御ニ付御手続等ノ次第、塚本圖書ヨリ為知越候

段、御留守居申出候ニ付、表通被仰渡儀ハ可申上越候  
得共、為御心得都テノ書付八通相添、此段申越候条、  
太守様 中將様 貴聞被達置候儀ハ、何分モ可被取計  
候、以上、

卯正月四日

町田内膳〔久徳〕

島津圖書殿〔久徳〕

桂右衛門殿〔久徳〕

島津伊勢殿〔広善〕

川上但馬殿〔久徳〕

新納刑部殿〔久徳〕

御勤番等之御名前、別紙ノ通塚本圖書ヨリ申来候間、

此段申上候、以上、

卯正月三日

内田仲之助〔政風〕

内膳様

山陵御場所為見分今日只今出門、山陵掛柳原・廣橋ノ

両伝泉涌寺へ行向フ、武辺ニハ所司代并戸田大和守兩

町奉行・石原・中井・木村右イツレモ泉山へ出向之事、

五七〇 藩士取締達書（京都邸ニ於テ）



近日騒動之紛ニ乗シ、下輩之者共於外方押買又ハ無代  
錢ニテ致飯食候族モ有之哉ニ相聞得、為天朝不容易御  
尽力中、右等之事件有之候テハ屹度不相濟、不屈之至  
候間、支配頭・主人等ヨリ嚴重可被申付候、尚見聞ヲ  
モ掛置候付、乍此上不守之者モ有之候ハ、屹ト被行  
嚴法、頭人并主人迄モ可及沙汰候、此旨向々へ不洩様  
早々可致通達候、

但

外方ニモ万一屋敷ハ非道之儀候ハ、早速留置申  
出候カ、又ハ名前・容貌見届訴出候様可致通達旨、

其筋へ可申渡候、

十二月

伊勢

卯十二月五日

御本文之通向々へ致通達候、

田尻

(種賢務)

五七一 京都報告

応 召早速登京

御満足候、随テ不容易大事御評決之儀有之、唯今参  
朝可有之旨

御沙汰候事、

十二月九日從

朝廷依 召九ツ時分御供揃、

太守様御衣冠ニテ 御出、公家御門ヨリ

御入、諸大夫之間ヨリ 御上り、御同席上之間へ

御着座之処、尾張大納言様(徳川慶勝)・越前宰相様(松平慶永)・安藝少将様(内膳)・土佐前少将様追々御参 内、当夜七ツ時分

御帰殿被遊候、 御召書写相添差上申候、

一 当朝依 御達兵隊戎服之俣罷出候様御達有之、追々繰

出相成候処、左之通御警衛被 仰出候、

一 一日御門内外並穴門四ヶ所、

一 御台所御門並北ノ方穴門二ヶ所内外、

一 参台殿並奏者所前神佛門往返取締所、

一 御座軒下人ヲ撰十人ツ、御警衛、外四藩様ニモ夫々御

請持御警衛被 仰出、御同様人数繰込相成申候、尤御

達書写相添差上申候、

一 当夜左之通被止 参朝候、

二条御殿 摂政関白前左大臣様

彈(朝彦親王) 正(忠應) 尹 宮 様  
 近衛前(輔應) 関白左大臣様  
 鷹司(忠房) 関白前右大臣様  
 近衛(忠房) 左大臣様  
 德大寺(公純) 前右大臣様  
 一條(実良) 前右大臣様  
 九條(道孝) 左大臣様  
 大炊御門(家信) 右大臣様  
 廣幡(宗礼) 内大臣様  
 日野(實宗) 大納言様  
 飛鳥井(雅典) 大納言様  
 柳原(光兼) 大納言様  
 葉室(長順) 大納言様  
 廣橋(胤保) 大納言様  
 六條(有登) 中納言様  
 野宮(定功) 中納言様  
 久世(通稱) 宰相中將様  
 豐岡(實資) 大藏卿様  
 伏原(宣論) 三位様  
 裏辻(公兼) 中將様

一三職人

総裁

有栖川(德仁親王) 帥宮様

議定

仁(嘉彰親王) 和(光親王) 寺(忠能) 宮様

山(忠能) 階(実兼) 宮様

中山(實兼) 前大納言様

正親町(經之) 三條前大納言様

中御門(德川慶勝) 中納言様

尾張前(松平慶永) 大納言様

越前(浅野茂勲) 宰相様

安藝(山内豊信) 少將様

土佐(高津茂久) 前少將様

此御方様

参与

大原(重徳) 宰相様

萬里(傳房) 小路右大弁宰相様

長谷(信篤) 三位様

岩倉(貞視) 前中將様

橋本(実坐) 少將様

右同

五藩之内ヨリ三人宛

右之通被為 仰出、五藩人柄之儀ハ、明日早朝可申上

旨被 仰出候、

太守様被 仰候付脱丸 御書付ハ、早速差出相成候、

一三條實美以下一族義絶被止、且入洛御復位被仰出候、

御書付写別紙之通ニ御座候、

一同夜 御室宮様御還俗被 仰出候、

一四斗樽御酒三挺

一鯛五拾把

右嚴寒之砌苦勞被 思食上候ニ付、兵隊へ被下候旨被

仰、非藏人ヨリ相達候、外四藩様江モ御同様之由、

一夜陰ニ相成、詰合之五藩士へ御酒・赤飯等被下候、

一同十日付脱丸佐次右衛門殿・西郷吉之助・大久保一藏御留守

居御仮立江被罷上候、

一御酒肴

一御菓子

右御五家 君公方御頂戴為有之由、

一御酒肴

一御菓子

右詰合之五藩士江被下相成候、

一四斗樽御酒五挺

一鯛百把

右前条同断ニ付兵隊江同断、

参与

岩下佐次右衛門

西郷吉之助

大久保一藏

右之通相認被差出候由、

書込卷  
一参与藩

尾州 荒川甚作 田中国之介 丹羽淳太郎 田宮如雲

越前 中根雪江 酒井十之丞 毛受鹿之助

土佐 後藤象二郎 福岡藤次 神山佐多衛

云藩脱丸  
肥後 溝口孤雲 津田山三郎

十日参予被為朝命、明朝尾張・越前参内ニテ、官一等下り

高知差上候事御申込、其通相運ヒ候上、將軍退職被仰出相

成、左候得ハ愈反正之姿現然故、参予被仰出トノ事会・桑

江御達ニテ候、

明五ツ時 御参内ニテ、尾張・越前・土州・芸州

右参与被 仰出候、

十二月晦日 土藩 乾退介(マ)

下参与被 仰付、 尾州 石井 黒田益之進(マ)

下参与被 仰付、

右被 仰付候 思召ニ付、一応 御下問候事、

十二月廿二日参与 越州 三岡八郎

正月十三日 備前 土倉修理助・山田市郎左衛門

(マ)〔柳川〕 立花飛驒守・十時撰津

右下参与

今度大樹奉歸政權、 朝政一新之折柄、愈以テ天下之人心

居合不相付於テハ、深ク惱

宸襟候、且来春御元服並准太后追々御大札被為行、且又

先帝御一周相成候ニ付、猶又被思召候間、先年来防長之事

件彼是混雜有之候得共、寛大之御所置ニ付、右大膳父子未

家等被免入洛、官位如元被復候旨被 仰出候、

十日 肥後守

越中守

右病氣御役御免、尾張・越前職中江御越意節御含候処、無

異議願掌御受可仕候得共、兵隊之暴発制兼趣ニテ候事、長

州四ツ時着京、毛利淡路其尽ニテ参 内被 仰付候事」

一当日昼夜静謐ニ候得共、二條人数會・桑等暴発之街説

市中人氣動揺之聞得有之、斥候役被差出候形行

御所江御届ニ相成候、

一同十日會津・桑名御固メ被 差許候、

御達書写相添差出相成候、

一同十一日御警衛等相替儀無御座候、

一今日依召 太守様四ツ時御供揃ニテ御参

内、藝州侯御同断、尾州老公・越前公・二條城江御越

相成、同夜四ツ時過 太守様被遊

御帰殿候、

一同十二日佐次右衛門殿・西郷吉之介・大久保一藏御留

守居御仮立江罷出、今日右三人参与被仰付候、御達書

別紙之通ニ御座候、

右前条同断兵隊へ被下候、

一今日、尾張老公二條城へ御越、夕六ツ時御参内相成申

候、

一徳川家同夜六ツ半頃、(松平容保)會津・桑名之両侯御引列御下坂

相成申候、専ラ尾張老公彼是御尽力ニテ、右御連ニ相

成候趣ニ御座候、

一総裁御始藩士迄、御詰席等之御書附、別紙之通被 仰

出候、

一武家伝奏御役被廢、参与御役々ヨリ御取扱候御座席被相立候、御達書写一通差上申候、

一非藏人御使番等御用掛被 仰付候間、為御見合別紙名前書差上申候、

右ハ去ル九日ヨリ同十三日迄

禁中へ

太守様御参 内、並佐次右衛門殿始参

朝、且兵隊繰出等ハ大抵右通御座候間、別紙九通相添此段申上候、以上、

卯十二月十四日

新納嘉藤二(立太政)

内田仲之助

伊勢様(島津広兼)  
佐次右衛門様(若下方平)  
綱山金生(山) 様

追テ

太守様議定職被為蒙 宣下、且御家来三人参与被仰出、其外都度々々御酒肴等御頂戴之御礼、口 宣御頂戴即日御礼被仰上、総裁様御初議定・参与之御方々へ御廻勤被遊、将亦詰合御家来並兵隊中へモ御酒

肴等被下候御礼、前文御礼済、私共以御使者総裁様御初へ御礼被仰上方ニモ可有御座哉、右ニ付テハ口宣御頂戴ニ付、御献上物等之儀ハ、御同列様被仰談御同様ニ可被成哉、何分被仰渡度奉存候、

左候テ

太守様議定職被為蒙 宣下、且御家来三人参与被

仰出候段、

中将様被遊御承知候上、参与衆御連署御使札ヲ以、

御礼被仰上度儀ト吟味仕候、尚亦御使番へモ吟味被

仰渡度奉存候、此段モ申上候、以上、

五七二 京都報告

一十二月五日會津参

内、六日ヨリ病氣ニテ参 内無之、二條へ入城相成候

事、

一加陽宮殿(朝彦親王)

近衛殿(宗照・忠房)

一條殿(実良)

二條殿(奇教)

九條殿(道孝)

鷹司殿(輔恩)

德大寺殿(公純)

廣幡殿(忠礼)

六條殿(有容)

日野殿(實亮)

錦織殿(久徳)

豊岡殿(國資)

柳原殿(光麿)

伏原殿(寛徳)

廣橋殿(胤保)

今城殿(胤房)

池尻殿(胤房)

大炊御門殿(家信)

飛鳥井殿(雅典)

野宮殿(定功)

堀河殿(時元)

交野殿(公愛)

裏辻殿(長順)

葉室殿(言成)

山科殿(通熙)

久世殿(泰聰)

倉橋殿(泰聰)

(中院通富脱丸)

右二十七卿参 内被為止候事、

一薩州 土州 藝州 尾州 越州

右五藩日々参 内御警衛之事、

一右之外大小名参 内被為止候事、

一十二月九日四ツ時、尾州・越前・薩州・土州御参

内、御銘々兵隊御召列、九門内へ大砲御備相成御警衛

有之、翌十日晝八ツ時御下り、

同日大樹公御参 内無之二付、五條殿

勅使ニテ候得共、曾テ御参

内無之、

一藩中之内可然仁両三輩、為 参与即時可差出旨 御沙

汰候事、

岩下佐次右衛門

西郷吉之助

外二

大久保一藏致

右御書付二通ニシテ、四藩ニモ同様ニ付略ス、

### 五七三 近衛左大臣殿御辞職報告

近衛左府様(忠房)

右ハ御所勞且当御時節柄、不器ノ御在官深被為恐入付、

左大臣隨身兵仗等御辞退被仰上候処、御願ノ通被聞召

候段為御知有之候付、 太守様へ御口上書一通御挨拶

トシテ、御留守居御使者ヲ以可被仰進哉ノ旨申出候付、

達貴聞其通申渡候、御留守居首尾書相添、此段申越候

条、 中将様被達 御内聽、御右筆頭御使番へ相達置

候儀共、何分可被取計候、以上、

卯十二月五日

島津伊勢

島津圖書殿〔久松〕

五七四 江戸ノ形勢報告

十二月五日晴、今日政府大変更發候由、段々御役場合併ニテ候、扱関東ノ事近比長崎ヨリ町人聞合トシテ、異国船へ召乗、江戸表へ被差出候処、帰り候モノ、説  
 二、徳川国持大名等は迄ノ御老中ハ惣テ停止イタシ候〔是頃、勘定奉行〔近衛〕、京町奉行〔義興〕、軍艦奉行〔朱〕、老六、調子、小栗豊後守・大久保越中守・勝安房守三人家老ニ若年寄也〕  
 事ノ由、且又為防禦箱根ヨリ内外、木曾路・中仙道・北陸道迄惣テ陸台場ヲ築キ、夫々手当嚴重ニ取構ノ由、又折合ノ事ハ尾張・越前受合ニテ周旋ノ由、八田知紀歌トテ聞ク、復古

神の世にかへればかへる大御みよを  
 くたりはてきとおもひけるかな

五七五 藩制大改革(寺師宗道日記抄)

十二月六日晴、櫻峯雪見ユル、昨日変革被仰出候由、

〔卷二有題〕  
 柳泉参リ荒増語ル、吉村才之丞殿モ被参候、御納戸被為廢物奉行支配、高奉行所モ帖佐与御代官合併、帖佐与被為廢候、屋久島奉行廢シ、産物方ノ儀ハ三島方合併、寺社方廢神社方支配相成候、当番頭詰衆廢、与力分科相成候、御数寄屋頭ニテ表御同朋廢、御広敷御用人廢、同番ノ頭兼帯ノ由候、今日御役人百六十人計御用ニテ、惣テ山吹ノ間詰ニテ日勤ニ不及ト被仰渡候由、松元一左衛門殿杯御製薬奉行勤役、無勤ノ由、

五七六 大久保一蔵ヨリ後藤象二郎へ書翰

玉翰拜見昌御安祥被成御座奉拜賀候、然〔山内盛信〕ハ容堂様御事昨晚御着坂、今晚枚方 御泊ニテ、明日御入京被為在候趣、早々被示聞趣委曲承知仕候、嘸御安心被成候半、私共ニ至御同慶奉存候、早速 修理大夫様へモ申上候様可仕候、此旨御礼答迄、匆々拜答、

十二月七日

大久保一蔵

後藤象二郎様

拜答

五七七 折田要蔵日記抄

京都ノ形勢委細申上度ハ山々奉存候得共、小荷駄奉行  
之大繁雜、殊ニ此度ハ兵器・兵糧・普請・人馬・病院  
多端裁決ニ候得ハ、昼夜寸暇モ無之、仍之御勝手方出  
席ノ内筆ニ任セテ、日記致シ置候間、御日記ヲ書ヌキ  
差上候間、是ニテ、今般ノ大略ヲ御推考可被下候、被  
仰渡候条々ハ、最早疾ニ御覽ノ筈ト存候マ、今日頃  
ハ已ニ当地之模様、御城下モ布告嘸々ト、思ヒヤリ罷  
在候、其節モ一筆ト存立ナカラ、筆ヲ握リ候得共呼立  
ラレ、夫形リ終ニ存意ニ不叶、残情此事ニ御座候、

十二月七日 晴

一肝付郷右衛門、又々病氣ニ付頼合申來候間、三島彌兵〔通唐〕  
衛同前ニテ御勝手方へ出席、世上無異子細無之、御退  
出ヨリ帰宿、

同八日

御用人其外出席、毎之通七ツ時帰宿、

一今八日越前・尾州・土州・藝州四公扨午ノ半刻御參内  
ノ由承候、兼テ存慮ノ子細モ有之候間、帰リ掛ニ本陣  
道正庵へ參り、陣中ノ非常ヲ戒メ、急事ノ手配等當番

書役並見聞役江ハ、何トナク申達置候、略ス、  
同九日 晴 寒風殊ニ甚シ、

早朝三島彌兵衛旅宿へ參候間、御用談相濟ミ、毎々刻  
限ヨリ早目ニ立出、上立賣ヨリ御邸ノ様指テ行クニ、  
三島ハ途中ニテ分レ、已ニシテ木場直右衛門〔朱〕(与倉守人旧名)帰リ參候  
間、待チ受ケ聞シニ、為何形勢モ不分シカト直ニ立帰  
リ、用意ノ戎服ニ変ノ鉄砲玉菓肩ニ掛、無僕ニテ立出、  
家内へハ火ノ用心堅固ニ申付、且次郎助之看病榮次郎・  
善五郎へ委細申附ケ、最早心ニ掛ル物コソナケレハ、  
飛カ如ク駆付ケ、道正庵之大工手ヲ召列、南御門ヨリ  
馳入レハ、邸内ノ騒動不斜、兵卒縦横ニ馳違ヒ、大砲  
小銃ノ戦兵ヲモヒ〜ニ立出、花ヤ香ニ如何ナル名將  
勇卒モ、此鋒先ニ当リ難キ破竹之勢モ列ヲ調へ、四方  
ノ御門ヨリ御所ヲサシテ繰出ス、年秀ハ斯ノ有様ヲ尻  
目ニ見流シ、御勝手方へ膝ヲシカツト居へ、召列候大  
工ノ手ヲ集メ、兵糧玉菓之諸役者へハ、平日心得シ七八  
分文ケハ少シモ不騒、心勇々敷指揮ヲ伝へ候折柄、三  
島・肝付其外大工手数十人、半首・嵩口等ニテ、隊伍  
ノ不紛馳集、已ニシテ小荷駄奉行之職分ハ十分ニ調へ、  
戦ハ何時ニテモゴサンナレ、勝テモ負テモ手並ノ程ハ



老後ノ名残狂言、時勢変革ハ兎モ角モ、数十年辛苦伝習之知略武略ハ、何ノ世ニカハ出スヘキ、花ノ京ノ日本寄セ、四十八手ノ其数ヲ尽シテ、ヨシヤ見物ノ眠リヲ覺サント、心楽ミ居リシ折柄、九ツノ太鼓ヲ打鳴ラスト、御供揃ノ声ト同時ニ御門内ヘ伺公、

太守様御粧束御駕ニテ、御参内ヲ謹テ奉拜、御武運長久皇国ノ御復運、唯今日ノ一挙外ニ余念アラハコソ、八百万ツト奥歯ニ神ナラン、御門前迄罷出奉見送有様、左モ勇々敷ソアリケレ、

一御行列ハ至極ノ御手輕ニテ、御道具一本御先供拾式人、御駕御側ハ御供目附・御小姓拾式人位ニテ、何レモ麻袴、乍去懐中ニハ各短銃ヲ仕込タリ、

一御参内前以、乾御門ヨリ陽明家御台所・日野御門江ハ、凡五小隊花ヤ香ニ立出タル薩兵、必死ト固メキラ星ノ如ク並居ツ、其他界町御門並御築地内ヘハ、八九人或ハ拾式三人ツ、辻々江ハ斥候ノ薩兵一町一隊ノ如ク立居テ、非常ノ變ヲ今ヤ遲シト待設タリ、加之越・尾・土・藝ノ四各藩モ、ヲモヒノニ出兵シ、一式小隊ツ、隊伍ヲ不亂押来リ、非常ヲ警メ警衛ノ有様、會・桑猫ノ性タル奴原、魂魄モ飛散リシナント覺タリ、

一桑名ハ公家御門ヲ兼テ固メ居シニ、早クモ形勢ヲ見定、手早ニ人数ヲ引揚、昼九ツ時分ニハ受取人モ無之、人ハ老人モ不居、見苦敷開屋トナリ、飯食ノ器物等ヲ倒レサリシモ、敗北ノ様体不言知レタリ、會藩ハ未引取ラス並居タレトモ、神色モナク青サメ振ヒテ、氣ノ毒共云ヘキカ、

一大鐘時分ヨリ寒氣甚敷、雪雹兵士之警衛難苦ヲ察シ、布屋ヲ張テ陣營可然ト、三島彌兵衛ヲ以本營江為伺候処、答ル人更ニナシ、併シ兼テ見越モ有レハ、道正庵中ノ布屋其外、鍬・山鍬・掛槌等都テ用意ノ令ヲ伝ヘ置タリ、無程日モ暮レシカト、朝中ノ形勢更ニ不分、夜四ツ時分ニ覺シキニ兵隊寒氣堪兼候間、布屋張之令初テ下ル、俄ニ夫卒ヲ集メ、平日手馴ノ者共操出シ、一声之令ヲ下スヨリ手早ニ張立、六ツ之布屋ヲ瞬目之間ニ打連ネ、四方ヲ掃除シテ帰ル道中、寒風骨ヲ穿チ、例之悪口ヨリ出ルニ任せ、事前ニ定レハ何トカ云事ノアルソカシ、

一途中ニテ内田仲之助ヘ行逢ヒ、朝中ノ有様ヲ伺ニ、西郷モ先刻退朝、唯今議論紛紜ニテ六ヶ敷成立、太守様余程御議論最中、早ク西郷ヲ不出シテ難叶ト言

捨テ立去リタリ、嗚呼如何成事ノ出来ラント、手ヲ握リテ立歸リタリ、終夜不眠、(岩下方平親話参照)

一今晚七ツ時分 太守様御帰殿、先ツ心ノ紐ヲ解キタリ、唯御口達ニテ、議定職ヲ賜トナン、

同十日 陰

早朝未明夫卒四拾貳人各箒ヲ携へ、宮門ノ内外薩陣之所在ヲ、箒目正敷不淨ヲ除キ、五ツ前帰ル、寒氣難堪ク、手足ノ指ヲ落スカ如クナリ、

一昨晚土州公少々御不快ニテ御滞内之由也、

一會・桑・彦根其外幕ノ歩兵等、都テ二條城内江引取、城下人ノ通行ヲ止メタリ、而シテ城之近辺屋並ハ都テ焼払ト、会人ヨリ令ヲ伝ヘタリ、京師中之騒動東西ニ逃走リ、荷物ヲ運送シテ一橋・會・桑カ京師ニ居住スルカラ、此通り早ク逃テモ死テモ呉ソウナモノト、口々ニ云ヒノ、シリ、老若男女吾後レシト、悲哉人望ノ返復唯一瞬目ニ決ス、抑一橋其位ニ非サル時ハ一ツノ一橋ニシテ、諸藩十カ八九ハ一橋ヲ称誉センカト、其人ニ非スシテ其位ヲ跡、権謀術数ヲ以我意ニツノリ、終ニ今日ニ至ル、年秀四年前一橋論ヲ著セシ時ハ、人皆今日アル事ヲ不知シテ難セシニ、人々浮沈計ルヘカ

ラサルトハ云ヘトモ、見ル処アリ、知ル処アリ、唯誠ト不誠トニ由テ、百年ノ後トイヘトモ概略洞察スヘキナリ、一橋ノ今日ハ既ニ四年前ニ定レリ、不遺憾哉、

一昨晚諸賢明公御参内御決議之上 勅許ニテ、断然タル王政復古之 宣旨ヲ賜ヒタリ、有栖川宮御惣宰ニテ、常陸宮其外略ス、尾公・越公・御名・藝・土五藩ハ議定職タリ、仍之其藩ノ家来可然仁ヲ両三輩、直様ヨリ差出候様被仰渡、岩下家・西郷・大久保ノ三人参内宿直、扱当夜ノ御議論ニ、難有哉尊哉、我 太守公ノ御一言古今ニ秀候御英断、老功ノ御賢公モ肝胆寒カリツラント覚ヘタリ、如何ト成レハ、諸賢明公ノ曰、一橋モ當時ノ有名家、殊更近日迄モ將軍之職位、今大政ヲ奉返、王政復古ノ議ヲ立、 皇国之復運ニ一家ヲ廢シタル私心ナキハ、常ナラサルノ決意タリ、仍テ直様被召テ議定職ヲ賜リ可然トコソ覚ヘタリ、然則弥以精忠己ヲ捨テ、尊 王家名ヲ雪キ可申ト議一決シ、土藩ノ後藤モ進テ此議ヲ主張シ、最土公断然ト建議ナリシト、我カ公慨然トシテ、抑一橋ノ心中無二ト難云、方今ノ形勢東西ニ難ヲ引レ、ヲノレ其位ニ在テ其向処ヲ失ヒ、事止ヘカラサルニ出テ、王政復古ヲ唱へ、退職ヲ申立、

大政ヲ奉返、衆ノ怒ヲ解カ為ナリ、夫此議ハ平常無異ニシテ、此ニ至ルヲ得ンヤ、其位ニ在テ其下ヲ御スルヲ得ス、天下之大患争乱ヲ 朝廷ニ奉殘、其罪豈心好シトセン、是ヲ以テ考フルニ、マツ被差置將軍辭職、

大政ヲ奉返、位一等ヲ降り、 尊王誠忠ノ二心無キ確証ヲ謹テ奉シテノチ、新タニ 勅命ヲ以被召候テモ、

何ノ遅キ事ノ候半哉、左モ無キニ今此秋ニ至リ、人無カ如ク、議定職ナト 勅命輕々敷ニ似候トノ御金言、

随テ大久保一蔵進出テ 此時ニ土州公前議ヲ以我太守公ニ向ヒ種々御申立有之候ニ付 土公ニ向

テ太守公ノ御意ヲ相貫キ、終ニ衆論ヲ破リ、土公モ尤モト御返言ニテ、議論一定ニ復セシトナン、危哉々々、

奉拜職ヲ落涙、御休息所ニ向テ遙ニ奉拜計リナリ、

同十一日 晴

太守様御建言被遊候一橋ノ退職官位一等ヲ降り、大政奉復ノ確証ヲ奉ルノ事件ハ、尾・越之両公已ニ御受合

ニ仍テ、更ニ異議有ル間敷ケレトモ、會・桑ノ暗愚暴戾如何共シ難シ、然レトモ越公、当朝再ヒ二條城へ御

登城、丁寧反覆ノ御教解有之テモ、彼我意ニツノリ候ハ、潔ク割腹シテ、生テハ再ヒ的ル可ラストノ御決

心、疾ク於

朝廷御出言、左モ勇々敷、一座之人モ肝胆涼クソ覚ヘタリ、然ハ越公未明御入城、繞テ尾公モ御入城、日暮テ御退城ナリ、我 太守公ニモ七ツ時分トモヲホシキニ、御参内ノ御供揃被仰出候、

一越公二條へ御入城、 朝廷 御決議ノ上ニ御演説ナリシニ、一橋ニヲヒテハ更ニ異心モナク、 朝命トナラ

ハ、謹テ奉得御意、抑人臣ノ分況ヤ 皇国之一大事件、於此時ハ身首処ヲ異ニストイヘ共、敢テ辞スヘカラス

ト慷慨大息、疑ヘキ形勢露程モナシ、併會・桑其他壬生幕下ノ暴客ノ輩ハ議論沸騰、今般国家斃ルトモ、主

公ノ命ニ順フヘカラス、蓋此儀ハ所謂 朝廷ノ正命ニ非ル知ルヘキナリ、此皆土・薩之令然処、夫勝敗ハ兵

家ノ常ナリ、所在ノ大小砲ヲ打並四門ヲ鎖シ、柵・逆茂木ヲ引連ネ、敵ノ足場ヲ見定地雷ヲ埋メ、孤城ニ割

拠シ、土・薩・藝・越ノ大兵ヲ矢比ニ引付ケ、無二ノ防戦、東国武士ノ手並ノ程ヲ見セ、徳川一門反覆ノ輩

ニ笑ヲ受ヘカラス、凡此時ニ至リ、三河武士ノ名聲ヲ不被輝ハ、或百年前風雲叱咤ニ社、我

東照宮千辛万苦ノ御功業唯一時ノ舌頭ニ威縮シ、云ヒ甲斐ナクモ、彼等ノ指揮ニ応シ候テハ汚名ヲ數千歳ニ

流シ、笑ヲ海外迄ノ人口ニ伝ヘ候事、口惜シト云ン限  
リナシ、方今之勢ヲ以推考スルニ、一旦ハ言語ヲ飾リ、  
顔ヲ和クトイヘトモ、終ニハ 朝命ト号シテ、人情難  
忍所置アラン、其時ニ至リ、如何計リノ御悔悟候共、  
無益ニ候間、仮令当城塵土ト変スルトモ、万騎カ一騎  
ニ成ルトモ、天命ニ被為任テコソ武門ノ先習ト覚ヘ候、  
會・桑ニヲヒテハ枝葉ニ候得共、一門ノ肝腦地ニ塗ル  
迄、共ニ御末期ヲ見届ケ奉ルト神色ヲ変シテ、敢テ  
朝命ニ服スル形勢ハ更ニ無之、議論波瀾ノ如シ、就テ  
ハ各思ヒ極メシ心底歎、妻子一類帰国ヲ促シ、老ヲ控  
キ子ヲ抱キ、俄ニ歩行シテ、冬枯ノ折シモサヒシキ逢  
坂ノ関路ヲ、心細クモ女旅馴レシ東ヘ急ク程ニ、間モ  
ナク大津ヘ着キ有様、哀哉悲哉、去程ニ大津ヨリシ  
テ宿々数年ノ間、會ノ兵卒通行ノ度毎ニ大佐馬ニテ、  
殊更京師ノ守護職幕ノ猛威ヲ借リテ、駅吏夫卒ヲ苦シ  
メシガ、已ニ今日ニ至リテハ更ニ幕命ヲ不奉、況ヤ婦  
女子ノ旅粧ヲヤ笑ヒ指サシ、偶歩行ニ苦シミ、三里程  
草津迄ノ人馬ヲ不統立呉、ヤリハナシニシタレハコソ、  
無抛モ相手ツクニ頼入候、駕老挺五六両ノ間ニテ請合  
シト、路用モ聊拾五金ツ、配当ナリシニ、未タ拾里モ

不行ニ如斯ノ金ヲ費シテハ、此末如何ト眉ヲシハメテ  
聞モイヤナリ、夫人間ノ浮沈極リナシトハ云ヘトモ、  
是皆人ニ仍テ浅深アリ、會ノ如キハ残酷海内ノ一ナレ  
ハ、ケ様ノ苦シミヲ受ケ、人望ヲ失ヒシ事理之当然ニ  
シテ、天必ス其罪ヲ責ム、

一會・桑如斯議論ハ、潔ク勇々敷聞ヘケレトモ、已ニ味  
噌漬武士ニテ、才尻ニハ酢味噌ノ様ナルベ、タラケニ  
テ、御通事ハ大小共ニ兼テヨリ宜敷、最早御医者ノ仕  
様モ尽キ、今夕五ツ時分、一橋始會・桑共々ニ條城モ  
没落シ、初メ空砲一発ニテ人数ヲ集メ、一橋ハ馬廻リ  
六百余人、其兵卒都合三千余人、暗ニマキレテ大坂サ  
シテ引テ行ク、於爰京師中騒キ立、両町奉行其外組屋  
敷會ノ守護職ハ勿論、諸記録ヲ焼捨テ、吾モくト逃  
下ル、諸方ノ注進櫛ノ齒ヲ挽カ如シ、

曰、尾公老練ノ御策ニ依テ、一橋ノ下坂ヲ進メ賜ト聞  
ヘタリ、如何トナレハ、尾公一橋ニ下坂ヲ進メ賜ト云  
ヘ共、一橋更ニ不順シテ云ク、此時ニ至リ朝命ヲ不奉  
シテハ一步モ動クヘカラス、夫各藩ノ目送スル処ハ、  
吾レハ言葉ヲ飾リ、謹テ朝命ヲ奉シ、傍ラ會・桑ニ異  
論ヲ令発ノ内心更ニ可惡ト、此説ハ鏡ニ写シ見ルカ如

シ、抑吾人ノ心天ニ指シ心ニ誓ヒ、王政復古断然ノ御所置ヲ希処ナリ、然ルニ如斯之疑ヲ受ルハ不肖ノ令然処、如何共ナシ難シ、故ニ首ハ地ニ落ツト云ヘ共、マツ朝命ヲ待ツテ其宜敷ニ順ハント、サシモノ一橋ノ金言其理ニ当リシカト、尾公モ其理ヲ尽シ賜ヘハ、是ソ一門ノ情実トモ云ハン、夫ニ一橋依然トシテ滞京アリテハ、會・桑モ又共ニ滞京シ、無謀ノ輩此間ニ変ヲ生シ、輦轂ノ下ニテ兵端ヲ開キ候テハ、恐多クモ宸襟ヲ惱シ奉リ、不幸ヲ殺スニ非ラス、是則一身ノ名義ヲ立ント欲シテ、却テ天下ノ大義ヲ破ル、夫人ハ時ニ仍テハ、権道ヲ用ヒ時之難ヲ救事少シトセス、方今実ニ権道ヲ用ユヘキノ時ナリ、強テ吾人ノ説ニ從ヒ朝廷ノ危急ヲ凌キ賜ヒ、是偏ニ徳川家末期ノ忠義ニ非スヤト進賜ヒ、俄ニ下坂ニ変シテ、會・桑モ取ルモノモ取リアヘス逃下ル、

一十一日夜五ツ時分ト覺敷ニ、寄貝ノ音遙ニ聞得タリ、何事ナラントツト立出、本宮へ駈付、變動ノ有無ヲ聞シニ、村田新八外ニ三四人中立賣御門辺ニテ、他藩ノ斥候ト出会、双方鬪争ニ相及、新八敵忤人ヲ仕詰メシニ、其余悉ク逃去リシトナン、仍テ諸隊へ右ノ變動ヲ

示スカ為ニ寄貝ヲ吹シト、然レハ邸中大キニ騒動セシカト、無程鎮リタリ、時ニ吉田清蔵同道、乾御門ヲ目掛新八ノ在所ヲ尋ネ見舞セシニ、數ヶ所ノ手負ナレ共、皆薄手ナリ、流石ノ新八ナレハ敵モ手強ク、掛リ兼シト覺ヘタリ、夫ヨリ吾輩ハ中立賣ヨリ會ノ守護職屋敷之表門ヨリ裏門通り迄參リシニ、最早死体ハ持運ヒシト見ヘテ無之、是會藩ニ相違ヒ無之、夫ヨリ道正庵へ立入火ノ元改、門限等嚴重申達シ、再ヒ歸リ御勝手方〔本「宗殿ノ方言」〕へ出席、赤目ヲ張テマ〔マ〕コ

同十二日 陰

無事乾御門ヨリ其外警衛、夜白閑断更ニナシ、今晚長人五百着候テ、相國寺ノ本房へ繰入、御屋敷ヨリ兵粮炊出シタリ、今晚初テフランケツト壱枚ニテ、八ツ時トヲホシキニ、御勝手方江長持ノ脇江コロイト打伏シタリ、

同十三日

同十四日 昨夜半過ヨリ大雨降リタリ、暖氣ニテ難有、一今夜六門内ノ警衛都テ解兵被仰付候間、大工手ヲ以陣營引払ハセ跡取始末、不浄ヲ除キ掃除ヲ命ス、

同十五日 大風雨

一概歎ニ堪ヘサルハ、會藩邸中ノ始末ナリケリ、牢中捕  
ヘ置シ罪人凡七拾余人、是皆自国他国ノモノナリシニ、  
今般逃降リシ当夜ニ、老人モ不残首ヲ切捨テ、罪ノ輕  
重モ不問ントナシ、人命不輕、嗚呼会人ノ罪、天地ノ  
間不可容、昔年長州生捕ノ首ニ、五寸釘ヲ打テ殺セシ  
ト聞シニ、誠ナル哉、今日初テ其実否ヲ知り得タリ、  
聞ク人切齒セサルモノナシ、

一御勝手方モ今晚ヨリ初テ泊リヲ引取帰宿ス、併シ心油  
断ナク、帶モシツカト締テ伏ス、

同十六日 陰雨

今晚七ツ時分、壬生組並會兵伏見江押寄シト市中騒立  
候間、聞ヨリ則鉄砲肩ニ掛ケ、ヤレゴサンナレト心イ  
ソソク立出聞ケハ、唯市中ノ目寄杯ニテ、サシタル事  
モナケレハ、其俣婦リテクヅ踏ミナカラ伏シタリ、

一昨晚騒キシハ形跡ナキニ非ス、今般一橋下坂之折、吾  
モソト後レ馳セ逃去リシニ、伏見ヨリ初メ止宿ヲ借  
スモノ一人モ無之、一橋大坂着ノ処、幕下処監察、大  
坂・京橋ニテ町役ヲ見テ、止宿ヲ申附ルノ処一円無之  
段申断、御目付トノニモ当惑ニテ、昨日迄ハ御目付ト  
申テ参リ、夫々顔ヲモ見知リシモノモ、今將軍様ノ

御勢ナレハトテ、吾レソ共ニ止宿モ不申付トハ、人  
情ニヲヒテ如何敷事、是非ト申テ様々見苦敷宿ヲ申付  
ケ、其他ハ一切受合不致程ノ事ニテ、惣々京師ヨリ逃  
下リシ諸兵卒モ居所無之、四方ニ分散シツ、其内式  
拾余人無抛伏見ニ立帰り、施米ト定メ有リシヲ盜取リ  
シト聞ヘタリ(事実ナリシト)

京師ノ風聞我 太守様此度朝廷ニテノ御議論、天晴ノ  
御氣量御英断殊ニ被為勝、御若年ノ御事、当時海内ニ  
名高キ老功ノ尾・越両公、殊更土州ノ老公ニ於テハ、  
聞ル賢明英断知略無双ノ御方へ被為対、確乎タル御見  
識世ノ常ニアラス、此君御年被為長候ハ、如何ナル  
明君モ被為及間敷、中将公ヨリモ被為勝御氣量ト、  
諸藩有志ノ豪傑モ舌ヲ振ハシツブヤキ候由、依之市中  
之御評判殊更ニ宜敷、兵威ハ強シ、君ハ明君、然ルニ  
王政復古ノ目出度御正月十日内外ニ近ツキ、心イソ  
ソク春ヲ迎ヘ可申ナン、

一去ル十三日御軍艦ニテ、筑前五卿御迎ヒトシテ発航、  
又今日ニ番遊撃ノ一小隊為御迎下坂ナリ、

一長州モ去ル十一日官職本復入洛、且蛤御門警衛被仰付、  
久々振リ〔毛利家被〕ノ御紋ヲ見タリ、長人モウレシク、天ニ

飛揚ル程ノ由ナリ、聞ケハ凡千五百人西ノ宮江滞陣、追々出京ニテ、君公モ不遠京着ノ由、

同十八日 晴

岩下家ニ土州ヨリハ後藤、越前ヨリハ此所名有之、兵庫ヨリ欽本ノマ、

リ長崎迄洋客江、王政復古此以後開港旁ノ条約為応接、御出立ノ賦ナリ、今日迄ハ御発足無之、

同十九日 晴

最早戦争ノ患ハ無之候得共、毎日々々御勝手方出席、

殊更御作事方御引取跡、御留守居方其外御普請向ノ儀

ハ、万事要蔵折田生秀へ引合、御用向相勤候様向々へ被仰渡、

仍之寸暇無之、五ツ時分出勤日暮返候間、諸事ノ差引

頓ト困入、先年ト相違ヒ此度ハ何モカモ出来不申、唯

今ニテハ欲モ得モ不入程相苦シミ罷在候、今晚モ黒田

彦之丞到着ナリ、然ハ明日飛脚立ニ付、書状相認申度

候得共、日中ハ其暇無之、夜明シニ相認申候、当地ノ

模様不相分候テハ、家内中都テ心配可致事ト存申候、

日記書取入用ノ処ノ分申上候、

五七八 茂久公御参内御断

私事御用ノ儀有之候付、今午刻参 内可仕旨蒙命候得共、此内ヨリ不快ニ有之参 内難仕、御断申上候、此

段宜敷御執 奏奉頼候、以上、

十二月八日

薩摩少将

五七九 朝廷大政御一新撰関・議伝被為廃止左之

三職御確定

丁卯十二月八日

総裁 議定

参与

総裁

有栖川宮大宰帥熾仁親王

議定

山階宮常陸大守晃親王

外国事務惣督正月十日ヨリ

仁和寺二品嘉彰親王

聖護院雄仁入道親王

中山前大納言忠能卿

正親町三條前大納言實愛卿

副惣裁外国事務宰相正月十日ヨリ

三條前中納言實美卿  
中御門中納言經之卿  
長谷三位信篤卿  
德大寺中納言實則卿

同諸侯

尾張大納言慶勝卿  
越前宰相慶永卿  
土佐前少將豐信朝臣  
薩摩少將茂久朝臣  
安藝少將茂勲朝臣  
宇和島少將宗城朝臣

上参与

萬里小路前右大弁博房卿  
西園寺三位中将公望卿  
正親町左少將公董朝臣

外国事務宰相正月十日ヨリ

岩倉前中将具視朝臣  
鳥丸侍從光徳朝臣  
東久世前少將通禧朝臣  
四條前侍從隆譚

久我親源中納言通久卿  
壬生前修理權大夫基修

同助役

五條少納言為榮朝臣  
西四辻大夫公業  
柳原侍從前光  
長谷美濃權介信成朝臣  
穂波三位經慶卿  
坊城侍從俊章

下参与

尾藩 荒川〔長知〕 甚作  
丹波 淳太〔實〕 郎  
田中 邦之〔不鷹〕 介  
越藩 中根〔簡實〕 江  
酒井 十之〔忠盛〕 丞  
毛受 鹿之〔逃〕 介  
土藩 後藤 象〔元輝〕 郎



越 徴士  
 十 柳川 井 廣 長藩 津 溝 肥後 久保田 櫻井 辻 藝藩 大 西 岩 薩藩 神 福  
 時 上 澤 田 口 後 保田 井 與 保 久 鄉 下 山 岡  
 攝(維憲) 聞(馨) 兵(真色) 三(信弘) 孤(真直) 平(秀雄) 四(元憲) 將(維憲) 一(利通) 之(隆盛) 佐(方平) 次(隆盛) 右(隆盛) 衛 門 左 多(藤孝) 次  
 津 多 助 郎 雲 司 郎 曹 藏 助 衛 次

(由利公正旧名)  
 三 岡 八 郎  
 學習院講師  
 中 沼 了(之舞) 三

五八〇 京都ノ形勢報告

五八〇ノ一

撰関・幕府廢止、守護職・所司代兩役共御廢止、以來  
 總裁・議定・参与之三職御役万機被聞召之旨被仰出、

三職名略、

八日長州官位旧復入京御免

九日夜將軍職御辭退

十日守護・所司代御免、京都町奉行廢止相成候ニ付、

山城國中御触出候事、

京都御制札御取払相成候事、

五八〇ノ二

島原ノ家中、日野家へ奉公イタシ居候者有之、夫  
 ヲ便リ、同家中京地探索トシテ出向居候處、昨夜  
 肥前甲子丸ヨリ着掛相話候趣、

一九日諸家之留守居御用ニテ、長州入洛之儀異存無之哉、  
 即席御答可申上候云々、

但此時即座御請申上候者モ有之、又追テ可申上トテ

引取候者モ御座候由、尤モ此日會津・桑名ハ不罷

出、直ニ二條城へ引入候由、

一此日幕臣之内不宜所存之者有之候間、早々

禁闕奉守護候様諸家へ被仰渡、即刻諸家出兵、薩・藝・

土殊ニ勇々敷、其日殊之外雪天、薩兵ニハ、御所中へ

布屋ヲ張り候儀、諸家へ無之儀ニテ、一入御手当之行

届候処、顯然ニ候由、

一會・桑既ニ兵端ヲ開カントスルヲ、大樹ヨリ頻ニ鎮撫、

カクスルヘキ機ニアラズ、若此上聞入ナクハ、我首ヲ

可致発動ト切ニ御諭解有之候由、

一右通ニテ十二日ニ至リ大樹下坂、是全京地滞留ニテハ、

會・桑等鎮撫方六ヶ敷ヨリ下坂ニ相成候由、尤右之主

意書付ヲ以奏、上、直ニ出立相成候付、右之跡ニテ越

前候へ鎮撫被仰付候由、

右之通只今承得申ニ付、早々相認候、

## 五八一 仁和寺宮警衛

薩州

仁和寺宮へ

為御警衛人数十六人可被差出候事、

尤可為侍分之事、

## 五八二 京都報告

五八二ノ一

一御守衛三ヶ月詰御取扱之儀、徳川家ヨリ申上候儀御達  
之儀ハ、御両役ヨリ被為在候方筋合ト奉存候、

一五卿方御帰洛之儀ハ、推テ上坂無御座候旨、御談合申

上置候、

一外夷一条之儀、徳川家ヨリ諸藩之内三四藩、外情ニ通

候モノへ被仰付度旨申上置候、

右三ヶ条ハ藝州重役辻将曹、土州福岡藤次・神山左多

衛、此方吉井幸輔・新納嘉藤二・内田仲之助談合之由也、

一昨十五日被仰出候御別紙之儀、尽衆議トノ御文言、召

之衆諸侯上京之上公論ヲ被為尽、差掛候儀ハ、詰合諸

侯・諸藩士等ニ、會議被 仰出候儀ニ御座候哉、

一召之諸侯上京之処、取計向之廉々、

一当地三ヶ月詰井口々御固大名割、御寄役ニテ御取調之

上、夫々へ御達相成候哉、又ハ是迄之通之手続ニテ取

調申付候テ、達方ハ御兩役ニテ被成候哉、

一禁裏御料并御入用筋之儀、御料所向ハ小堀數馬ニテ取計、御入用筋ハ是迄之通之取扱ニ仕置可申哉、

一大宮御所御造立御入用国役達之儀ハ、達濟ニハ相成候得共、此後収方等取扱候モ、是迄之手続ニテ可然哉、  
左候ハ、其段諸大名へ屹ト兩役ヨリ御達有之候様致度候、

一街道脇往還宿之人馬之儀、先是迄之通被成置儀ニ御座候ハ、其段御兩役ヨリ御國中へ御触達相成候儀可有之哉、

一山城・大和・近江・丹波四ヶ国并撰家・宮門跡・堂上方御家領、其他寺社領・大名領分へ關係致候公事出入、京都町奉行所ニテ取扱来候廉々ハ、是迄之通取扱、呼出シ等ハ其主人々々へ掛合ニ及可申哉、

一刑法之儀ハ、召之諸侯上京之上、御取極可被為成ト存候得共、夫迄之処ハ、仕来之通ニテ宜敷候哉、  
一所司代戸田大和守御附兩人動向、先是迄之通ニテ宜敷候哉、

一兵庫開港ニ付、金札通用之儀ハ、町人・百姓触達之為ニテ、已ニ申上濟ニテ出来相成居候間、通用相成候様

仕度候、

一實美以下脱走人之事、

一外国之事、

一近々上坂之聞有之候實美以下脱走人之事、

一外国之事、

右当分召之諸侯上京、公論衆議之上御決定ニ相成候得共、先差向取扱之処尋被下候事、

一明後廿二日、今日同様同刻參 内之事、

一明日中今日之御返答兩役之中へ可申上事、

土州・藝州へ打合候件々、

一徳川内府公ヨリ御伺之件々、

右ハ去ル十五日、 内府公參 内之節、

御沙汰書ヲ以被 仰出候通、召之諸侯御上京、

御朝議相居候迄之内ハ、先ツ是迄之通ニ、

御沙汰被為在度ト之御答、

一脱走之三條實美以下被相返候儀、是又同様ニ御答、

但御国許御都合ニハ、追々御出立之程モ難計候得共、

其辺之儀ハ掛隔候儀故、突留難申上儀ト奉存候、

一外夷御所置之儀ハ、

皇国大御改革、王政復古、召之諸侯様御上京迄ハ、開

港期限罷成候トモ、夫々御条約沙汰ニモ關係仕、重大之御事件ニ付、期限遷延之儀、徳川家并諸侯様御家臣相揃、外夷へ右之趣断然被仰達候様、被為在度トノ御答、

右之通申談置候得共、猶今日右両藩出會之上、細微

ニ申談相詰候ハ、案紙写ヲ以罷歸候上申上候様可

仕候得共、大意迄荒増申上候付、相洩候儀ハ何分承

知仕、罷出談合仕候様仕度候、何分被仰渡奉存候事、

今般幕府政權ヲ

朝廷へ奉還候次第、誠ニ以復古之御大業、數百年來之

英断ニ御座候テ、御国体御変革宇宙間ニ御獨立可被遊

御基本ニ候得ハ、微賤私共迄モ深ク天下之為ニ奉恐悦

之候、就テハ衆庶議事之意ヲ以、諸番士共被召出廉々

御下間被 仰付候儀ニ付、謹テ奉言上候、

一 祖宗以來御委任、厚依頼被為在候得共、方今宇内之形

勢ヲ考察シ、建白之旨趣尤ニ被 思召候間、被 聞食

候、尚天下ト共ニ同心尽力致、

皇国ヲ維持、可奉安

宸襟 御沙汰候事、

別紙之通被 仰出候付テハ、被為在 御用候間、早々

上京可有之旨 御沙汰候事、

一大事件外夷一条ハ尽衆議、其外諸大名同被 仰出等ハ朝廷於而役取扱、自余之儀ハ召之諸侯上京之上、御決定可有之、夫迄之所徳川支配地市中取締等ハ、先是迄之通ニテ、追テ可及 御沙汰候事、

五八二一

慶應三年卯十二月九日ヨリ、晴朝五ツ過袴十八番へ頼

置ニ付、取ニ差越候処、只今本營ヨリ早々トノ御用申

來段、野津氏出殿候間、直付添罷出候処、半隊ハ不居

候哉ト被申候ニ付、私罷出候ト申上候処、正治殿ヨリ

御渡ニ、今日ハ御參

内ニ付罷歸、早々人数相揃方可致承知、直様罷下リ、

山口并坂元、山口ハ郷田宿へ相通シ、早々兼テ定ノ稽

古場へ相集リ候事、其上何分御差図可相待旨也、其日

ハ終日鈴木稽古所へ相相居、七ツ半時分ニ御長屋へ帰

リ、銃服ニテ皆々相待、御歸殿ハツ時ナリ、

十二月十日 晴此日天酒(天賜ノ酒ヲ云)  
且スルメ(鎧)頂戴ナリ

朝六ツ時半ニ御台所御門相堅ル様ニ承知、出揃之上、

御本門ヨリ繰出、乾御門ヨリ繰入、定之御門ニ入、一

番隊鈴木武二隊ニ交代、右御門ニ四列ツ、二分時ニ代

リ、一分隊ハ右之方番所へ詰居、是ヨリ四列公卿御門

トノ間ニ出張番、一番一分隊ハ修理小屋へ扣へ居、是ヨリ穴御門へ四列ツ、五分時ニ交代、此所ニモ拙ハ相勤候事、

同十一日 晴

此朝天酒スルヲ同断

右之所ヨリ暮時分ニ交代、六番隊市來勤兵衛殿組へ次渡、公卿御門之前御着屋へ泊り、拙者公卿御門之前へ布屋一張、是ヨリ一番分隊相勤候事、

同十六日 晴

(國幹)

今朝五ツ半時分、三番隊篠原冬一郎殿隊ニ次渡掃營之事、此日ハ緩々長屋在宿之段、本営ヨリ承知ニ付、風呂杯ニ入、夜入頃ヨリ酒吞致、暫時野津氏へ差越旁晰等致ス内ニ、下道辺へ貝吹声相聞候ニ付直ニ帰宿、銃服等皆々相付、外人數ハ長屋へ扣居之旨申入置、拙者野津氏へ越ス、折々スル内ニ何分物騒之体ニ付、本陣モ拙者伺ニ出候処、只今斥候ヨリ一ノ屈有之、其趣ハ大迫喜組之人數村田新八・仁禮某・川俣喜兵衛・廻新次郎・林太郎左衛門杯持合六人、中立賣守職屋辺へ見物ニ出候処ニ、風ト向ヨリ四人程出掛、其方ハ薩ニテハ無之哉ト申掛候ニ付、薩州ニテ候、何シニ先ヨリ此所ヲ伺候哉ト云フ内ニ、切テ仕舞ト後ヨリ申候ニ付、

直ニ拔出切掛暫時打合、皆々刀杯被抜之由、早其内ニ村田ト立合、敵仁禮氏後ヨリ切斃シ候ニ付、敵三人ハ直ニ失去、行方不知成候由、右村田六ヶ所之疵ナリ、仁禮氏ハ足ニ少疵之由、是ハ向ノ者ノ刀打落サレ候時、切先ノ疵ナリ、右之貝ハ兼テ集合之時分合図貝之約束之由、右変事聞得候故、所々ニ出シ置候戦地番ヲ集メル為之貝ナリ、是ダツパノ無故前に渡有之由、拙者本営之内右隊之役者ト見へ候人出殿、廷中動き立候ヲ断ニ被出候事、

同十二日

此夜六ツ過キニ出張、本営ヨリ監軍小頭ノ間ニ御用有之、拙者草々出候ニ付、肴且味噌一樽被下候事

今朝五ツ時分ニ日野御門ヲ堅メ候様被仰渡、直様打立相勤候事、

一橋・會津・桑名今日下坂イタシ、跡ニテ当邸へ切り入トノ取沙汰、御詰跡御留主居ヨリ申来り候事、十二月十一日、

同十三日 雲天

朝六ツ過キニ田中農輔之隊へ次渡罷帰候事、

今日天酒且ツスルメ等頂戴被仰付候事、

十二月十日御確定

徳川内府公從前御委任大政返上・將軍職辭退之兩条、

今般断然被 聞食候、抑癸丑已来未曾有之困難、

先帝頻年被惱

宸襟候御次第、衆庶之所知ニ候、依之被決

叡慮 王政復古、国威挽回之御基被為立候間、自今撰

関・幕府等廢絶、即今先仮リニ総裁・議定・参与之三職ヲ

被置万機可被為行、諸事神武創業之始ニ原ツキ、摺紳・

武弁・堂上・地下之別ナク、至当之公議ヲ竭シ、天下

ト休戚ヲ同ク可被遊 叡念ニ付、各勉勵旧来驕惰之汚

習ヲ洗ヒ、尽忠報国之誠ヲ以テ可致奉公事、

一内覽 勅問御人数、国事御用掛・議奏・武家伝奏・守

護職・所司代総テ被廢候事、

一三職人体

総裁

有栖川帥宮

一議定

山階宮

常陸宮

仁和寺宮

中山前大納言

正親町三條

中御門

尾州

一参与

越州

薩州

藝州

土州

大原

萬里小路

長谷

岩倉

橋本

五藩家来三人宛

一太政官始追々可被為興候間、其旨可心得居候事、

一朝廷礼式追々御改正可被為在候得共、先撰籙・門流之

儀被止候事、

一旧弊御一洗ニ付、言語之道被洞開候間、見込有之向ハ、

不拘貴賤無忌憚可致献言、且人才登庸第一之御急務ニ

候故、心当之仁有之候ハ、早々可有言上候事、

一近年物価格外騰貴、如何ントモスヘカラサル勢、富者

ハ益富ヲ累ネ、貧者益窘急ニ至リ候趣、畢竟政令不正

ヨリ所致、民ハ王者之大宝百事御一新之折柄、旁被惱

宸衷候、智謀遠識救弊之策有之候ハ、無誰彼可申出

候事、

一和宮御方先年関東江降嫁被為在候得共、其後將軍薨去、且先帝攘夷成功之

叙願ヨリ被為許候処、始終奸吏之詐謀ニ出、御無詮之上ハ、旁一日モ早ク御還京被為促度、近日御迎之公卿被差立候間、其旨可心得居候事、

右之通御確定以一紙被 仰出候事、

十二月十日

〔非藏人日記抄に「校訂」〕

### 五八三 西郷吉之助ヨリ小松帯刀へ書翰

其後ハ御動靜不奉伺候処、先以御安泰可被成御座、恐悅之御義奉存候、陳ハ大坂表砂糖弘方江御振向相成候様、御差分之一条殊之外六ヶ敷、何分急速運兼候得共、次第々々ニ議論も相縮候向ニて、至て大慶奉存候、いづれ一同不安心之処ニてハ、又々煩ひも相生候訳ニ御座候へハ、最初御手を被下候節、細ニ吟味を尽、安心之処を以、決議相成候処と奉存候付、御渡相成候御書付もいまた相下ケ不申、議論中ニ御座候、乍然最早央ニ至り掛候得共、全議論相定候処ニ至り兼候付、得と吟

味を尽、其上御発相成候様取計可申候付、兩三日ハ相滞可申義と奉存候、扱一昨朝五代才助〔佐藤〕より承候ハ、英艦兵港碇泊相成、通弁官薩道と申者より、小松大夫并私滞京之趣承候付、是非面会いたし度、且御国許江差越、横濱江帰掛ニて、ミニストルより被托候趣も有之候付、大坂御屋敷迄罷出、京師より御下坂迄相待候て、誰ぞ御兩人之間舌人江面談いたし度趣、開聞丸乗頭并上新右衛門江相付申達候由、全体右之軍艦江、御国元開成所江罷出居候本藝藩人林謙三と申者、航海修行ニて乗組居候て、旁周旋いたし候趣ニ御座候、就てハ幸ひ私下坂いたし居候故、早々兵港之様可參候付、其港江相待呉候様申遣、朝五ツ時分より打立、船ニて參候処、早五代より之返書相達、薩道ニハ陸地ニ相待居候処故、〔卷「兵庫定徳」〕早速小豆屋江呼入談判ニ及候処、第一之趣意ハ、英国ニおひても、幕府ハ 日本国中之政權を握居候処と相心得、条約を結候次第ニ御座候処、近来幕政熟考仕候得は、御国之英国と之戦争并長国と之取合等、皆幕府より所置いたし可申之処、却て外国と互之争と相成、夫而已ならず長国之再討より開兵之始末、前後いづれも訳之分ぬ事、畢竟長州より京師ニて之暴発之節ハ、

不敬之訳故、薩州も幕と俱ニ相戦、暴動を挫候事ニ有之、伏罪之道相立候処、訳もなく戦を初、諸藩も不応時機ニ相成候処、討破之力無之ニ依りてハ、又々訳も立ぬ止戦をなし候次第、委敷相考候得は、定て攻亡之力無之、止戦と相成候ものと相見得申候、ケ様ニ訳之立ぬ戦をいたすなれハ、皆諸侯を討スしてハ相成らぬものニ可相成道理、又長州一国を攻亡す力之なきものか、如何しても政事を旋し可申哉、是にて顯然と相分り候義ニ御座候へハ、如此空権之者と条約を結居候ても、実ニ無益之訳ニ有之、英国ニおひてハ何ぞ政府と計ひ、条約ハ取結訳ニハ無之、日本権握之方何方なり共、可相結義ニ御座候得共、さらはと申て権握之人も無之、如何いたして宜敷ものやら、帰する処を不知、乍然外国人より権之立様ニ諸侯ニ力を添候義ハ、決て可有道理ニ無之と独歎息之意を以、我国を振起れと、進諭いたし候事故、幸輔江ミニストルより之口氣も有之候付、薩道之意底を探らんか為、少し猶予之色ヲ顯し、段々

皇国之為ニ力を可尽賦ニて、是迄相働候得共、頓と寸功も無之而已ならず、却て政府之威權を挫とのミ汲受、

善言却て悪言と相成候次第、只今ニてハ朝廷を我ものニいたし成し候故、手之出し様も無之場合ニ立到候故、兵庫之開港ニ付ても、もくろミも有之候得共、いたし方無之ニ付、両三年も傍観して居可申賦ニ御座候と、返答ニ及候処、大ニ驚き、三年とハ何事ぞ、余り氣長事ニハ無之哉、来年ハ攝海も開港之期限ニ相成、長州之義も今通ニてハ相済申間敷、何と欵きまりを付可申候付、此両条之処を以、何と欵働き様も有之そふニ被思候と申事ニ御座候、右之次第を以能々相考申候処、私人幕府江計相結私を營、夫より不平を生し候義ニハ相違有御座間敷と愚考仕居候、何分面白口氣ニ御座候間、佛・英追付隔絶之色を顯し可申と奉存候付、此機を見て、何と欵策も有之事之様ニ被思申候、是て英人之好処ニ計、心を向候て動立候へハ、必佛江ハ怨を合せ候事ニ至り可申、此隔絶之場合ニミニストル交代共相成候て、先達てより御咄之人共參候へハ、我国之力を得候訳ニて、矛盾之ものと不相成、兩國之力を得候好機會も出来候半欵と、相考候事ニ御座候、其外小事之義共段々相咄候得共、両三日中御直話可仕、此一条ハ決て御悦被下義と奉存候付、荒増申上候、小



松大夫江ミニストルより宜敷御礼申上呉候様との趣、再三申聞候間、左様御含置れ可被下候、此旨一左右迄奉得 尊意候、恐惶謹言、

(慶応三年乙)  
十二月九日

西郷吉之助

帯刀様

御侍史

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

### 五八四 大口ノ住人有村城之介京ヨリ書状

尚々、薩州・土州・藝州・尾州・越前兵隊一統へ、

一小隊ニ付酒四升ツ、賜り、少々ツ、被分下、其印

ニ錫一枚送り差上候、何共恐入、難有次第ニ御座候、

卯十二月九日於相國寺調練有之候、 太守様並土州・

藝州・尾州・越前 御所へ被遊御參内候処、一番隊御

邸警衛調練相止、早々出張相成候処、今日ハ依時宜ニ

候ハ、事ニ成立向内通有之、同組之者途中ヨリ走帰

リ、其段為申聞候処、無間モ騒敷成立、私共ニモ出張

(卷二伊右衛門)  
監軍川畑氏へ伺候処、押テ出ル時宜ニ無之砲発ニ及候

ハ、非番ニ不限出張可相成、其内ハ相図ヲ待居候様

被仰聞、夫成扣居候処、七ツ半時分川畑氏ヨリ片時モ

早々出候様被仰聞、屯場へ出張候処、最早御邸内大砲等押出相成、御所九門内ハ勿論、六門ノ内御城下衆・

南御門一小隊・公家御門一小隊・御台所御門大砲隊都

テ玉込ニテ被固、其外乾御門・烏丸通下中立賣薩州ノ

受持場、何方モ玉込ニテ嚴重固メ相成候、五侯御談判

之御席ニ、西郷吉之助・内田仲殿御列席有之候様被仰

出、十分ニ被仰上候処、御尤ト答候由御座候、 太守

様晩八ツ半時分御帰リ被遊候、

一 十日朝五ツ時又々被為在 御參内候、會津蛤御門固メ

ニ候処、十日昼九ツ時被成御免候段被仰出候、桑名九

門ノ内固メニ候得共、被成御免候、私共ニハ二番隊へ

交代イタシ、本陣へ草履踏ナカラ用意罷居候処、鉄砲

ノ音聞得候故、相図ト心得屯場へ集リ候処、フタンレ

(卷二不備)  
ンノ者相放候段分リ、屯場へ扣居候、寺陣門ニモ当日

ヨリ大砲式丁備付、御城下衆固メ相成居候、

一 卯十二月十日ノ朝、尾州・越前五ツ時二條城へ御登城

有之、御談判ノ処、 勅命ノ事候へハ、徒 勅命御受

書迄モ右両侯へ被相渡候由、會津・桑名へ其段御達相

成、蛤御門被成御免、其上園元ノ様引取候様被仰出付

テハ、朝敵相成テモ開戦可致、殘党ノ者共強テ一橋殿

へ申募候由、勅命ニアラハ、一橋侯兵ハ一人モ差出儀不相成段達ノ由、二條ヨリ右形行 御所へ被仰上候由、一橋會津・桑名被召列下坂ノ御願御免相成、翌十一日ノ晚ヨリ追々下坂相成候、左候得ハ、年内中直二一橋上京ノ由ニ御座候、

一翌十一日警衛トシテ、六ツ時出張居候処、晝七ツ時分ニモ候哉、會津屋敷騒ケ敷成立、人撰ヲ以五人斥候被差出候処、大砲八丁備付、草鞋踏ナカラ庭へ炭火ヲ起屯居候処、五ツ半時分又々騒立、四列一組ツ、繰廻ヲ以巡邏有之候処、二條城近辺市中都テ家ヲ迦、四方八方へ逃去、家物相運ヒ大サワキシ御座候、無難夜明六ツ時ニ番隊へ致交代、非番、当番不限、御所近辺四列一組ツ、三手四手ニ晝夜巡邏有之候、十二日ノ晚五ツ時片時モ早々、出会候様通達有之、出会候処、御軍賦役ヲ以テ、本営ヨリ御陣触相成、則与合十三人へ右ノ段相達、出陣ノ用意イタシ、盃取替相図ヲ待、必死ト相究、花々敷出陣可仕格護罷在候処、會津・桑名殘党ノ者逃ケ下り、其儀ニ不及、御所九門ノ内固メ場等モ、如昼高張灯燈明リ渡リ賑々敷、夜明ケ漸々静リ、朝五ツ半時分ヨリ又々御靈社固メ場へ繰出、二番隊へ交代、

其当日何事ナク候、

一土州・尾州・藝州・越前 太守様、御同様議定職被仰出、長州モ寛大ノ御所置被為在、十日ノ晚七ツ時分長州兵隊桂川・伏見ヨリ十六小隊ヨリ、太鼓打鳴シ、薩州陣宮相國寺へ繰込、翌十一日晝七ツ時分、又々四小隊右同所ヨリ同断、都テニラ山・筒袖・パツチ惣勢千人内外ニ及候由、一昨廿一日、三小隊又々出兵相成候、惣督毛利内匠、年十八、桂孝五郎・穴戸備後之介右三人重役ノ由、其外軍定役以下上京相成居候由、去ル廿日ノ晚迄ハ一刻モ抜間ナク、草鞋踏ニテ本陣へ、夜ハ代リく相休ミ候、此末如何成立候哉、一盃尽処此時ニ御座候、一昨廿一日ノ晚、都ノ城隊ノ内両三人伏見市中巡邏ノ処、何方ノ者共不知空発致シ、其段本営へ届相成、則御邸ヨリ大砲隊繰出相成、探索方ニ及候得共、不相分候得共、決テ會津藩又ハ桑藩ノ仕業ニテハ有之間敷ト評判ニ御座候、鶴田ノ人帰國ニ付、右代り上京之節ハ、籠手・スネ当・ハリ立ノボセ可被下候、末略ス、

五八五 五藩ノ重役ヲ召シ戒嚴ヲ命セラル

岩倉殿薩・土・藝・尾・越五藩ノ重役ヲ召シ、予メ明日ノ御召状ヲ授ケテ、コレヲ其主君ニ伝ヘシメラレタリ、是ハ其期ニ臨テ、遅緩シテハ大事ヲ誤ルノ畏アリト思ハレテノ事ナリト知ラル、其文ニ云ク、

応召早速登京御満足候、從テ不容易大事御評決ノ議有之、唯今參朝可有之旨、御沙汰候事、

十二月九日

又戒嚴ノ事ヲ命セラル、其文ニ云ク、

一 東南

萬里小路家

甘露寺家

櫛笥家

柳原家

園家

富小路家

御下り御殿

桂御所

高丘家

外山家

唐橋家

鷹司家

九條家

右尾州

一 御座所檐下詰任選十人ノ事、

御拜道廊下檐下詰從僕ノ事、

一九門内堂上亭裏門通行被止候ニ付、家々へ右ノ趣相

伝へ、直ニ三人或ハ四五人宛詰取締ノ事、

一 西北

花園家

八條家

賀陽宮

石山家明地

庭田家明地

勸修寺家

烏丸家

穂波家

一條家

近衛家

閑院宮

藤波家

竹屋家

昆沙門堂里坊

右越前

一日ノ御門并ニ穴門四ヶ所内外、

一 御台所御門并ニ北ノ方穴門二ヶ所内外、

一 參内殿并ニ奏者所等ノ前、

一 神仙門往返人数改取締所、

一 公家門前桑名固メ被免跡引替、

一 外ニ御座所檐下詰任選十人ノ事、

御拜道廊下檐下詰從僕ノ事、

右薩州

一 公家御門并ニ南北穴門二ヶ所内外、

一 南門并ニ東方穴門二ヶ所内外、

一局口中門ノ前、

一 御池四枚戸内御文庫前切戸、

一 蛤御門會津固メ被免跡引替、

一 外ニ御座所檐下詰任選十人ノ事、

御拜道廊下檐下詰從僕ノ事、

右土州

一 准后御門内外、

一 准后局中門、

一 朔平御門并ニ東西穴門ニケ所内外、

一 外ニ御座所檐下詰任選十人ノ事、

御拜道廊下檐下詰從僕ノ事、

右藝州

王政復古大變革ニ付テハ、何時非常ノ儀出来候モ難計、

依之右場処藩兵ヲ以テ、嚴重警衛可有之旨御沙汰候事、

但九門内ハ勿論、兵士戎服ノ儘可為參朝事、

右ノ如ク五藩へ各其持場ノ警衛ヲ仰渡サレ、尚又達セラ

レタル趣ニハ、

当日覺悟ノ条々

一 卯一点必參朝ノ事、

一 同刻兵士繰込ノ事、

一 御門総テ大門ヲ閉テ穴門通行ノ事、

一 公家門・御台所御門ノ外ハ、准后御門ト雖トモ悉皆

閉切之事、

但守衛兵士通行之義ハ格別ノ事、

一 被止參朝候宮公卿見誤無之様心得之事、

一 宮・公卿參朝之輩、主人ノ外家来向総テ御門外限不

許入候事、

但隨身物或ハ、文通ノ類ハ使番仕丁等ニテ、非藏

人口へ伝送之事、

一 三職家来鑑札ヲ以テ通行之事、

一 御門々々出入人体見定之為メ、非藏人二人出張之事、

外ニ使番三人・仕丁五人、

一 會津・桑名・藤堂・大垣見廻新撰、其外斥候之事、

一 非常之儀有之、注進之儀出来之節ハ、四方トモ非藏

人口へ可申出事、

但非藏人口南談之間、堂上・非藏人詰可有之事、

一 各藩屯所并從者休息等之事、

日華門外廻廊

月華門同断

承明門同断

五八六 吉井幸輔ヨリ益滿休之助・伊牟田尚平へ

書翰

尔来御壮榮奉賀候、陳ハ昨九日

蘭牟田正平様

朝廷ヨリ尾州・越前・藝州・土州・御国等五藩ニ被召、  
太政官代被召建、其惣宰有栖川宮、次ニ議定岩倉様・  
正親町三條様・大原様其外諸侯ニテハ右五藩ヲ被召候、  
次ニ参予右三職御居リ相成り候、参予ハ諸藩士ヨリ御  
撰挙ニ相成候筈ニテ、未其人ハ今朝迄不被仰付候、幕  
府ハ尾州・越前へ被仰付、尚此上侯列ニ下リ罪ヲ奉待  
候段申上候処、周旋之筈ニ御座候、右之通幕ハ筋立候  
へハ、議定辺ニハ被召出候半、會・桑ハ幕府へ御任セ相  
成、幕府ヨリ帰国可致トノ事、蛤御門ハ被免、跡ハ土  
州へ被仰付候、長州モ栗生光明寺迄千余人出張、父子  
之処モ官位復旧、入洛モ被免候、右大變革ニ付テハ、  
禁門内へ人数繰入御警衛可仕旨五藩へ被仰付、六門内  
外五藩之人数繰込大騒キ、面白事ニ御座候、先今日ハ  
戦ニハ不相成、幕・會之処モ至テ静ニ扣居候ニ付テハ  
云々之義、誰ソ東下可致候間、其内今形御鎮靜被下候  
様、御一同へ宜御伝言可被下候、先ツハ右御報知為可  
申上、早々如此ニ御座候、以上、

十二月十日

吉井幸輔

益満休之介様

五八七 御元服並立太后等云々御達書

此度大樹奉歸政權

朝政一新之折柄、弥以天下之心居合不相付ニヲヒテ  
ハ、追々復古之典モ難被行、深被惱

宸襟候、且来春、

御元服并立太后追々御大礼被為行、且亦

先帝御一周忌ニ相成候付、猶又被 思召候間、先年来

防長之事ニ付、併也 彼是混雜有之候へ共、寛大之御処置被

為在、大膳父子末家等被免入洛、官位如元被為復候旨、

被仰出候事、

十二月十日 御確定

右議奏・伝奏衆ヨリ被仰渡候事、

一 摂政被廢候事、

一 守護職被廢候事、

五八八 政權奉還ニ就キ云々藩邸布達

今度大樹奉歸政權朝政一新ノ折柄、弥以天下人心居合

不相付於テハ、追々復古ノ典モ難被行、深被惱 宸襟候、且来春 御元服並立太后追々御大礼被為行、且又先帝御一周忌ニ相成候ニ付、猶更被思召候間、先年来防長ノ事件彼是混雜有之候得共、寛大ノ御所置被為在、大膳父子末家等被免入洛、官位如元被復候旨、被仰出候事、

右ノ通議奏・伝奏ヨリ被仰渡候条、向々へ可致通達候、

卯十二月十日 〔采〕〔會〕 佐次右衛門

蛤御門当分長州へ固メ被仰付、長兵隊四十人一小隊ニ御座候、

### 五八九 春山田中日記抄

五八九ノ一  
十二月 雨

會・桑等ノ軍兵御所ニ攻来ラントスルノ勢ヒヲナスト、追々注進ス、各藩ノ兵士英氣盛シニ、兵備嚴整ナリ、今夜五ツ時、斥候〔采〕〔會〕村田某・永山某・川俣某外兩人、守護邸下ニテ会七人ト刃傷シ、村田傷ケトモ当敵ヲ討留メ、其外逃去ル、今夜已ニ事ニ及ハントス、

五八九ノ二  
十二月十二日晴、致出席候、日々京攝ノ風聞区々、小松帶刀殿御城代被仰付候由、島津〔久治〕圖書・島津〔久義〕主殿殿上京相発候、

書付ノ写

一 去年十二月二十三日江戸城内出火ノ事、

一同二十五日、江戸芝御屋敷へ幕人共踏入致狼藉、幼少者共ニ迄殺害、定府共ニハ其以前陸地出立、跡残人数及戰爭候半トノ事、

但櫻田・小山モ同断ノ由相聞得候、

一 御船翔鳳丸、品川沖へ定府乗船トシテ廻船イタシ居候処、幕府取掛交々砲発、加奈川沖迄付越相引ニ相別レ、少々相痛修覆相加へ、兵庫迄廻船ノ事、

一 当夜大膳父子御召之儀等致承知、長人ヨリモ兩人、西郷・大山同途、同船長人上之關ヨリ上陸イタシ候由、

相國寺ヲ十一日ニ出立、

一 長門事ハ来春正月月中旬上京之模様、

一 徳山世子平八郎事ハ豊瑞丸ヨリ上京、十二日ハ尾之道津へ出掛居候得共、最早致着坂候由、是ハ初ヨリ大垣迄之賦被相聞候得共、此節ハ上京相成候半、

一兵庫開港ハ永井主水正差越〔尚志〕應接相成リ、其上奏聞相成候処、開港

勅許ニ相成候模様ニ候、

一紀州復幕論ヲ起シ候、家老三浦長門守折々二條へ登城致拜謁、是非復幕論ニ有之、尤永井主水正ヨリモ致説得タル由、此三浦ハ大臣ニテ、復幕ニ御決定相成候上ハ、則人数杯モ差出トノ事之由、

一水府浪士其外浪士五百人芝御屋敷へ引受之由、右ニ付兒玉雄一郎京都へ差越由〔志〕〔水府ノミニ非ス、人名後卷ニ記スカ如シ〕

一此節會津守護職并ニ桑名所司代御免相成候付、兩家不服ニテ、討薩之企有之人数繰立候付、此方ヨリモ人数御手当

禁闕守衛三手ニ差出相成、左候テ兩家二條へ引入候、則議定席ハ直下リニ有栖川御客居へ、議定諸卿主居へ、尾張其外四藩御順末座へ〔正肥、大山藩主〕成瀬隼人正初列席、此御方ヨリハ岩下佐次右衛門・西郷・大久保、土州之後藤參席候由、其節之議論、何レ兩藩ヲ討カ説得カトノ吟味半、〔山内藩信〕土佐容堂公議論ニハ、此兩藩ハ兎角大樹ヨリ説得相成候処、相当之儀ト有之候処ニ、〔佐久公〕君公ヨリ被仰候ハ、ケ

様ニ 朝政ニ相成候上ハ、何レ此議定衆ヨリ取捌出来不申候テハ、不相濟ト被仰候処、夫ニ付段々容堂候ヨリモ被仰候折柄、大久保進ミ出大議論申上候処、決議ニ不至候処ヨリ、尾・越之兩藩ヨリ中ニ入、兩日之召ハ御貫申度トノ事ニ付、十一日朝二條へ登城相成候ト相聞得候〔志〕〔詳細ハ岩下方平談話記ニアリ〕

一近衛兩卿ニモ 朝參被止ト之事御達相成候事、  
一五藩參与人数ハ兩人ツ、被仰出候得共、此御方杯ヨリハ岩・西・大三人罷出候由、

一君公ハ九日之朝四ツ時分御參 内、其内度々 勅使有之、御催促之由、

一此御方衛士ヲ都テ紫宸殿外へ被召入、追々烏丸辺へ分隊ニテ被差出候由、

一八日ニ御帰殿相成候処、尾・越・藝公御參 内、翌九日・翌々十日迄モ御詰切ニテ候由、

一土ノ容堂候ハ八日ニ御京着、即日參 内被仰出候得共、御所勞ニテ、翌九日參 内、

一此御方モ同断、

一太守様御装束着ケ方、殊之外御手間取相成候由、  
一新撰兵之内伊東何カシ外一人事ハ御屋敷へ馳付、夫ヨ

リ伏見御屋敷へ被遣置候由、此一件ハ長シ、〔以下略カ〕

一細川澄之介〔藤久〕モ去ル十七日発途ナリ、肥後モ勤王論ニ相成候由、

一幕兵如何慥ニ不相分候得共、出京之聞得有之、二條ヨリ説得差留之為、大目付水野被遣候処、三島駅ニテ行逢押留相成候由、

五八九ノ三  
晦日 雨雪

今日大徳寺内天瑞寺宿陣ノ処ニ、大隊惣督島津伊勢殿ヨリ田尻務取次ヲ以、仁和寺宮御寮付ニ被命、サテモ

我々兩人於困元監軍小隊長ノ藩命ヲ蒙リ、兵隊ト死生ヲ共ニシ、最 君公ノ御供ニテ上京セリ、然ル処当地

ノ形勢日々切迫ニ相成、若変事差起ラハ、尽忠報國セント我カ兵隊ト廟算無他ノ処、豈凶ンヤカ、ル意外ノ

命ヲ蒙リシコト、実ニ遺憾ノ至リニ不堪、勿論隊中モ不平ヲ抱キ、頻リニ沸騰スレトモ、我々深慮勘弁ノ訳

モアリテ、漸ク鎮靜シ、則伊勢殿ニ面会シ、演舌ノ趣有之処、此節我々命ヲ蒙リシ儀ハ、不容易ノ大事日ニ

差迫リ、若シ其時機ニ立到リ、当時王政復古ノ始ニ勤王ノ大王宮ノ事御危殆ノ場合ニ相成モ不被計、依之兵隊

ノ内ヨリ撰挙シ、斯ク命セラレタルノ由、懇ニ承知ス、

### 五九〇 大山彦八聞合書

徳川・會・桑等下坂之由、伏見へ探索申遣候処、

別紙之通申越、尤モ細事聞取之ケ条左之通御座候、

一徳川・會津夜五ツ半比鳥羽街道ニテ淀ニ出、枚方筋下

坂供方多勢候由、主従トモ歩行、小銃ハ面々持參、大砲ハ不相分候、

一右引統旗本人數、追々夜五ツ半過比ヨリ夜七ツ時分マテ、少人數ツ、無切間右同道筋罷下候由、

一若州・伊豫松山・膳所本多右引統夜七ツ時分同道筋下坂之由、若州ハ騎馬三十人、其外供方ハ甲冑五百人位

モ為有之由、松山ニハ主従共歩行之由、人數ハ先ニ二小隊程、中ニ主人、後一小隊程先後行軍ニテ同断、膳

所本多ニハ伏見へ出淀堤通行、主従共歩行、大砲モ有之候由、小銃ハ面々持參之由ナリ、

一會津勢三百人計鳥羽街道筋下坂、甲冑交リ之人數之由、大砲五挺其外ハ小銃・手槍持參ノ由、

一桑名之儀罷下候儀不相分、淀辺ニテ承候へハ、徳川一列



ニテモ可有之哉、分テ桑名ト申様之方無之ト申事之由、  
一板倉ニハ罷下儀不相分、竹田街道ニテ長持一挺、伏見  
之方へ持越候由、

一會津藩七八人、手槍持参ニテ伏見舟番所へ参、船手当  
迄モ申付賦ニ候哉為参由候へ共、番人共逃去リ居候由  
ナリ、

一七ツ時分旗本百人計同道筋罷下、右之内騎馬十人程之  
由、

一探索方トシテ罷越候梅原九助へ、鳥羽街道ニテ若州人  
数ヨリ、イツ方藩中ニテ候哉ト申掛、伏見船役人ニテ、  
彼方杯舟手当ニテ、淀へ参リ候由申答罷通候由、會津  
藩行逢候節モ同断之由ナリ、

卯十二月十二日夜

右之通淀辺へ探索差出候者、只今罷帰申候付申上候、  
梅原ハ伏見之者ニテ、御ヤシキへ御出入ノ者ナリ、

五九一 得能良助日記

十二月十二日七ツ時分徳川氏下坂、(容保、会津藩主)松平肥後・(定敬、桑名藩主)松平越  
中其外随従、今日尾張二條城へ入ル、御内論ノ趣ヲ以

テ御尽力有之候処、

御旨意奉謹承候へ共、麾下并ニ會・桑鎮撫出来兼候付、  
乍恐一往下坂イタシ、両藩下国セシメ申度候間、被  
聞召置被下候様、尾張へ相付御達之御届ニテ下坂、

五九二 岩下佐次右衛門同僚へ照会

五九二ノ一  
太守様御機嫌能先月廿三日御上京、尚御安康被遊御座、  
去ル五日迄之形行ハ、同日急飛脚差立申上越通ニ候、  
然処、去ル八日  
太守様御儀被遊

御参内候様被仰渡候得共、御不快ニテ御断相成候処、  
翌九日早々被遊

御参内候様ト之御事ニテ、同日九時分俄ニ被遊

御参内、土州老候ニモ同断、

堂上方ニハ八日ヨリ惣

御参内、尾張老候・越前老候并(浅野茂麿、若州藩世子)松平紀伊守様ニモ、同断

御参内ニテ

御朝議被為在、同日二條撰政様御初メ被止参  
朝、有栖川帥宮総裁

太守様并 仁和寺宮 山階宮御初メ議定職等被

仰出候、長州之御父子官位如元ニテ入洛御免、并三條

様初メ五卿并澤様入洛御免之儀ハ、同八日之晚

勅許ニ相成候、左候テ

太守様御參 内之節ヨリ、兵隊ヲ以九門并六門内外等

嚴重ニ御守衛被 仰付候付、引統藝・土井大村・大洲

等ヨリモ人数差出、長州ニモ昨日ヨリ同断御固メ被仰

付、九門内外之御固メハ十分堅固ニ御備相成候、左候

テ徳川家之処將軍職御辞退被 聞食、官位一等引下ケ

候テ、明日諸候之列ニ相属キ、領地之儀モ相応被成下

候様トノ

御朝議ニテ、慶喜公之処、何モ異儀ハ無之由候得共、

下々之処ニテ居合不相付儀モ有之、尾・越之両公御引

受、度々二條城江御出ニテ御説得等有之、多分御趣意

通承伏可致様子ニハ相聞得候得共、今日迄未相運、慶

喜公ニモ

參内未被仰付候、會・桑等ニモ守護・所司代御固メ等、

早速ヨリ御免相成、万端先ハ御都合能相運御模様ニテ、

御互ニ恐悅之事ニ候、ヲノツカラ近日之内平運丸差返、

委曲形行可申上越候得共、先ハ是迄大頭之形行為可申

上越、大坂ヨリ町便可差立、若中国路之処差支、町便

難通候ハ、急飛脚等差立候様、御留守居江申付越候、

別紙相添此段申越候条、

中将様被達 御聴、

其外様江モ可被申上候、以上、

但太守様御儀翌十日御參内、今日又々御參内之筈ニ

候、

卯十二月十二日

島津(久池)圖書殿

桂 右衛門殿(久武)

小松(信廉)帶刀殿

川上(久嶋)龍衛殿

新納(久橋)刑部殿

町田(久慈)内膳殿

五九二ノ一

本文致承知

中将様達

御聴候、何モ御都合能相運御模様ニテ、御互ニ恐悅之

事ニ候、別紙扣置、此旨及御返答候、以上、

岩下(方平)佐次右衛門

慶応3年(1867)

辰正月三日

島津圖書

桂 右衛門

小松帶刀

川上龍衛

新納刑部

町田内膳

岩下佐次右衛門殿

一 参台殿并奏者所等之前

一 御座檐下詰

右守衛之儀被 免候間、明朝可引弘候事、

十二月十三日

五九三ノ二

薩州

一日之御門并穴門四ヶ所内外

一 御台所御門并北之方穴門二ヶ所

一 参台殿并奏者所等之前

一 御座檐下詰

右御守衛之儀被 免候間、明朝可引弘事、

十二月十三日

五九三 禁裏御警衛變更

五九三ノ一

去九日被 仰付候御警衛之向ハ勿論、在来御警衛於御

場所モ、九門之外悉被免候得共、今度改、

日御門

土州

御台所門

薩州

南 門

尾州

朔平門

藝州

右之通御警衛之儀、被仰付候事、

一日ノ御門并穴門四ヶ所内外

一 御台所御門并北ノ穴門二ヶ所内外

五九三ノ三

政務ノ儀武家へ御委任以來數百年、於 朝廷廢絶ノ旧

典難被為行届儀ハ、十目所見候、乍去被 聞召上候上

ハ、神祇官ヲ始、太政官夫々ノ旧儀御再興ノ 思召候

間、何レモ八省其外寮司ノ内へ諸藩被召加、年々交代

可有勤仕、細目儀ハ追々可被 仰出、 朝廷御基本モ

被為立候間、右ニ基キ言上可有之 思召候事、

一 何レモ往古郡県ノ通ニハ難相成ニ付、尤封建ノ俚名分

明ニ相立候様被遊度、

一御政務筋往古之通ニハ、連モ難相運被 思召候得共、

新法ノミノ御政務候テハ、甚不宜候間、可成儀ハ精々

旧記ニ基キ候様被 思食候事、

五九四 御召書写

薩州少将

議定職被 仰下候事、

口宣追テ下賜候事、

一其藩中可然仁ニテ両三輩、為参与即時可差出上旨

御沙汰候事、

一公家門前桑名守衛之儀被止候ニ付、其場所速ニ嚴重

可警衛之旨 御沙汰候事、

一参与人体各注進之通被 仰付候、

御改革之御時節、万事尽力可有情勤候事、

但御政事規則相立候迄、一同辰之刻参集、於夜分申

合四五人宛<sup>(宿力)</sup>直可有之候事、

三職之輩為心得被相渡候一紙

一御評議所始御場所仮設之事、

一御評議所

小御所

一総裁・議定詰所

麝香間

一同 休 所

水鳥間

但宮・公卿奥之座、列藩端之座、且総裁・議定一列

ニ座スルト雖、総裁ニ於テハ一席ヲ隔ツベキノ事、

一参与詰所御色紙部屋二間

一同休所同東之間、於諸藩士之向ハ諸大夫之間仮建

但公卿奥之座、列藩端之座、藩士向座、

一議定之輩一人ツ、是迄議奏ノ如ク詰 林和靖間

一宮・公卿・列藩奏下所 林和靖間

一神社寺院・諸藩士以下奏下所 虎之間

一今度武家伝奏御役被廢候ニ付テハ、差当候処、参与御

役ニ於テ取扱相成候、石薬師通一乘院里坊ヲ以、仮ニ

右役所ニ被設候、且参与役所ト被称候間、武家伝奏取

扱之廉々、右役所へ可申出候事、

但右掛之方ニ

大原宰相

萬里小路右大弁宰相

長谷三位

岩倉前中将

橋本少将

慶応3年(1867)

御用掛

右非蔵人

一日御門並穴門四ヶ所内外  
一御台所御門並北之方穴門式ヶ所内外

松尾備後	松室豊後	鴨脚加賀	松尾但馬	松尾伯耆	中川對馬	吉田遠江	西池左兵衛	松岡大進	伊佐左近番長	立川掃部	長井奉膳	徳岡刑部	岡本市之進	小野兵部丞	薩州
------	------	------	------	------	------	------	-------	------	--------	------	------	------	-------	-------	----

一参台殿並奏者所等之前

一御座檐下詰

右御守衛之儀、被 免候間、明朝可引弘事、

十二月十三日

五九五 京都市中御触

今度御一新御變革ニ付テハ、非常御手当之為 禁門警固之儀列藩へ被 仰付、兵士戎服之俣ニテ被 召入候得共、素ヨリ千戈ヲ被為動候御趣意ニハ毛頭無之候上、兼テ御洞察之通、弥以平穩之次第ニ付、即今日ヨリ凡テ解兵被 仰出候間、各安堵イタシ、産業ヲ可営候、且町奉行所之儀追々御取調ニテ、新規御取立之筋モ有之候得共、即今之処ハ丹波笹山青山左京大夫・江州膳所本多主膳正・松平圖書頭等へ、市中取締之儀被 仰出候間、訴訟以下毎事右三藩へ可申出事、先ツ仮ニ是迄之町奉行所ニテ万事取計、豫州大洲加藤遠江守・江州水口加藤能登守・平戸松浦肥前守・丹波ソノベ小出伊勢守・和州高取植村駿河守・石州津和野亀井隱岐守、右六藩へ市中鎮撫被為見廻候儀被 仰出候間、申達候事、

十二月十三日

右之通被仰出候間、洛中洛外山城國中辺ニ相触候事、

七日、加州上京、

九日、帰國、

十二日、大樹下坂、

十三日今朝雨、會津下坂、一心寺并會邸ニ入戎服・甲

冑之行装、

十二日、肥州上京之処見合、天王寺ニ入、

十六日、天保山沖ニテ、アメリカ軍艦バツテラ覆リ、

ミニストル以下水死十三人、十八日迄ニ漸死骸引出、

### 五九六 春山田中日記抄

十三日 晴

越侯又二條城ニ入り、

勅命御請ノ事ヲ頻リニ催促セラル、徳川氏ノ曰、兵隊

等中々沸騰甚シキヨリ、隊長ノ面々前ニ呼出シ、自ら

庭ニ飛出テ涙ヲ垂レテ鎮静イタス、ヨツテ今暫クモ期

限延セラレナハ、取押へ御請可仕トノ事ナリ、越侯空

クカヘラル、

十四日 曇

二條城下ニ兵ヲ繰出シ、軍備ヲナストキコヘケル、我

ニ各藩備ヲ立直シ相待ツ、サレト敵不寄來、

十五日 晴

今日京都市中巡邏且取締可致ノ命、薩長ノ二藩ニ下ル、

ヨツテ兵隊カハル、市中ヲメクル、今夜一會・桑・新

撰等窃ニ二條城ヲ出テ大坂ニ下ル道筋、千本通りヲ打

テリ、先陣會・桑、中陣松山・宮津・姫路ノ軍兵、其

次旗本勢一千、後陣新撰歩兵・町奉行附与力組都合其

勢四千五百余人ヲ相従へ、陸行・水行道ヲカネテ馳下

ル、二條城守護邸黒谷ニ一千五百人余ヲ相殘シ、

御所ノ形勢ヲ相伺フ、今日大坂ニ下ルノ事ハ

朝廷ニ御届申出ルナリ、畢竟徳川氏

朝廷ノ御内諭御請ニ迫リ、又會等ノ沸騰取押ヘイタシ

カネ、進退窮シ京地ニ難居、一時遷ノ為ニ此ヲ去ルト

キコユ、

十六日 雨

今日ヤ、平穩、兵士氣ヲ休メテ宿陣、サレト

禁闕ノ警衛猶嚴ナリ、毎日 御所ヨリ兵氣ヲ慰セラレ、

御酒肴被下、今日モ難有頂戴ス、

十七日ヨリ七日迄無事、

一十二月九日九ツ時分御參

内、同夜八ツ時分御歸館、尾州・越前・土州・藝州・

〔頭註〕「是時二條家非閑白攝政ノ職也」  
二條閑白十二月八日辭職、夫限參

内被差留、

一同九日會津守護職御免、蛤御門備前・因州相勤、公卿

御門土佐へ次渡、

一同日桑名所司代御免、御台所御門前御固之儀、肥前平

戸ヨリ相請取、

一所司代御ヤシキ・守護職屋敷之儀ハ、二ヶ所共早速明

渡、二條城へ二藩共籠城、夫ヨリ当月十二日夜大坂之

様徳川慶喜一諸ニ罷下リ、會津家内子供之儀ハ、黒谷

寺陣へ立退候由、

一右二ヶ所屋シキ之儀ハ、イマタ何方ヨリ相請取候儀不

相分候、

一同十日長州千人計出京相成、末家毛利某其内ニ罷居候

由、大膳父子之儀ハ早々御召ニテ、近々上京之筈、兵

隊過半ハ相國寺へ着、当日ヨリ直様御賄等モ御屋シキ

ヨリ被成下候、其余之人数ハ東福寺へ罷居、右人数之賄

ハ土州ヨリ差送候由、着翌日ヨリ烏丸中立賣御門辺御

固、夫ヨリ毎日非番ヲ以テ諸所ニ御固相勤、公卿方御參  
内御供等モ相勤、別テ盛ン御座候、

一同十一日夜、本島津良馬組当分二番遊撃隊監軍村田新

〔註〕八、外ニ右組合兵士川俣善兵衛・仁禮・野崎某・兒玉

某、守護職ヤシキ刃忍廻リイタシ候処、右屋敷近方ニモ

候哉、町家ニテ内々三ヶ所位人音有之、一ヶ所酒会等

之模様、高声ヲ出シ、數々咄為有之由ニテ、右之処へ

立止リ模様伺居候処、向ヨリ會津四人行逢ヒ、言葉ヲ

相掛候処、薩人ト相答候処、直ニ切掛タル由、内三人

ハ村田氏へ相掛リ、一人ハ川俣氏へ切掛リタル由候処、

終ニ後ヨリ仁禮某打掛候処、即死イタシ夫形村田へ相

掛、三人ハ都テ逃去、追掛タル由候得共行衛不相分、

村田ニモ六ヶ所疵有之、早速病院へ列帰り養生方御座

候、命大丈夫、

一十二月九日御參

内ニ付、兵隊都テ勢揃、出軍之粧ニテ請持之場所へ罷

出、当番隊ハ都テ御所六門内ハ勿論、九門其外諸所辻

口御固相勤、六門内ハ日ノ御門・御台所御門・内侍所

前御座之間、縁下御庭へ薩・土井ニ加藤ニテ固、公卿御

門内外土佐、朔平御門内外藝州、南門内土佐、准后御

門外藝州、越・尾之儀ハ別段御固無之候処、同十四日  
昼時分ヨリ銘々六門内外請持被仰出、薩御台所御門、  
土州日之御門、尾南門、藝朔平御門、公卿御門越前、  
九門御固、乾御門薩、今出川御門有馬、石薬師御門彦  
根、清和院備前岡山、寺町御門肥後、堺町御門越前  
福井、下立賣御門藤堂、蛤御門長州、中立賣御門土  
州、

十二月廿一日

尾・越両侯ヲ大坂へ被差下、又々御内諭アリ、其趣

天朝ニ政權ヲ奉歸上ハ、自ラ八百万石ヲ可差上、且前  
内大臣号ヲ賜リ、諸侯ノ上座ニ列セラレ、二百万石ヲ  
別ニ被下トノ事ノ由ニ相キコユ、徳川氏

勅命ニ聊不背トイヘトモ、弥會・桑等ノ沸騰鎮靜出来  
兼ル事ヲ以テ、矢張前言ニ不相替事ヲ延ス、然トモ廿  
六七日ニハ取押へ、何分御請可申上トノ事也、尾・越  
之両侯空ク上京、委細ノ条ヲ被申上、我臣ヲ取押カヌ  
ルトテ、  
勅命遷延スルノ条不届ナリトキク、

廿二日 晴

今日三條公・四條公・東久世公・澤公・壬生公首尾能

御還京、再ヒ喜ヒノ眉ヲ開カセラレテ、五ヶ年ノ御勞  
クモ夢ノ世トナル、三條公則御参内、直ニ議定職ニ命  
セラル、四條公ハ錦旗奉行ニ被仰付、

廿三日・廿四日無事、

五九七 池田猪之助日記抄

五九七ノ一

書添ヲ以形勢之次第申上候、爰許モ今日迄ハ静罷在

申候、

一去ル八日、私事三四人列ニテ、二條之御城辺ヲ見物ニ  
罷申候処、城之下辺ハ頗ル歩兵本営ニテ歩兵隊多ク徘  
徊仕申候、左候テ今日尾州侯・藝州侯并ニ越前春嶽公・  
土州侯御参

内有之候処、此 御方様ニハ今日ハ御断ニ相成候由、  
今晚迄ハ何様之事モ不承候、

一九日相國寺内一日越之操練四ツ時分ヨリ相始リ、九ツ  
過相濟婦宮罷在候処、本宮役所ヨリ小隊長・半隊長只  
今御用有之被罷候処、何之事モ不相知、諸隊早々出陣  
之用意イタシ、御下知相待候様御達シニテ、驚キ軍装  
仕定之集場へ旗ヲ立扣罷居候処、追付御書付相渡ル、



右拜見仕候テ、少シハ色路相分リ申候、昼八ツ時分御参内被為在、御供ハ二小隊、私共一隊ハ兼テ被定置候御邸警衛前ノ当番ニテ、勿論私共宿宮之前ガ集リ場故、晚ハ宮ニ仮リニ歸リ罷居申候、雪ハフリ中々肌ヲ冷シ申候、昼八ツ時分白西洋布四尺計ノミ、非常之時御下知次第夫ヲタスキニ掛候様、勿論相印ニテ候事、亦相詞モ相知レ候処、何事カ始ル模様、既ニ今日限りカナト相考居申候、夜ニ入候処、一分隊ツ、繰廻シニテ、集リ場へ扣居候様、尤モ御下邸被為在迄之間、今般イマタ御参

内無之内會津并ニ桑名兩藩ハ、守護職并所司代ハ勿論、御所御堅メ御免被成、土州并此御方へ被仰付候事、今晚堅メ場ヲ請取ニ外之隊罷申候処、會藩心易相渡候テ、晚七ツ時分御下邸被為在候事、

太守様今日之御装ヒ引立、エボシ・黒熊毛ノ履ヲ被召、花ヤカナル御姿之由、余程御議論強、御都合向モ宜段密々承リ候事、

但私案候ニ、決テ御都合向之宜キハ王道ニテハ無之、

邪道カト案シ候、

一十日、太守様朝五ツ時分御参

内被為在候事、私共一隊ハ日野御門御堅メニテ、四ツ時分繰出シ、九門ノ内今出川御門ト申御門之内ヨリ繰入レ、日野御門之様、左候テ六門外へ繰廻シニテ、一分隊ツ、御番致ス、日野御門御堅メハ都合三小隊、又土州藩・伊豫之大洲・尾州・此御方等ヨリ相堅メ申候事、布屋之内中々寒ク御座候へ共、難有事ニハ起炭相渡リ、布屋ニテタキ火ニアタリ申候事ニ御座候、又着替モ皆取寄セ、寒ヲ凌キ申候事ニ御座候、今日

御所ヨリ五藩へ伊丹酒并スルメ頂戴被仰付、五藩ハ能ク相分リ不申、案スルニ尾州侯・越前侯・藝州侯・土州侯・此御方此五藩カ、左候テ五侯へ議定職ト申ヲ被仰付候由、公卿方ニモ段々有之候由、今晚長州家毛利周防ト申者一人参

内、大膳父子入洛御免、官位復古之由承候事、

十一日、外之隊へ交代イタシ帰營ニテ、救応手ニテ在營之様被仰渡、在營仕居候事、晚両貝之音イタスニ付、兼テ被仰渡置候事モ有之候故、一統驚キ集リ場へ集リ、小隊長ヨリ被伺候処、番兵隊ヲ四方へ巡邏トテ、六七人ツ、目付ニ出シ候ノヲ、彼ヲ呼フ目之由、夫ヨリ可笑モアレバ腹モ立、今晚ハ緩フト休ミ申候、今晚先日

被下候

御所ヨリノ御酒ヲ、少々ツ、難有戴キ申候、今晚村田新八一人ニテ、會津四人ト喧嘩、双方疵迄ニテ死人無之、十二日又日野御門へ御堅メトシテ、一昨朝之通り繰入申候、今日ハ先日ノ御堅メニカハリ、日野御門ヨリ内 紫宸殿之左脇塀之外、供屋之様ナル白土塗柱、其外朱塗ニテ結構ナル所へ御番イタシ、向之方ハ誠ニウツクシキ繪ニ書タル様ナル廊下ノ上ニ、時々ハ男女公卿方御出被成候テ、私共扣居候堅場ヲ望ミ被見事ニ御座候、爰ヨリ又

御所御書院之後小門ヲ四人ツ、昼夜不明繰廻シニテ御番ニテ御座候、又御座檐下トテ、御書院之御縁頼ノ下へ呉座ヲ敷御番仕、此所ハ至極結構ナル御庭ニテ、泉水モ有、檐ノ木ノ橋ナト何トモ難申橋掛リ、池淵ヘ五エン松ノヨヒノカ数多植、其外段々珍敷植物ナド、又淵ニ四枚敷計リ之金網ニテ鳥屋有之、其中ニ白大鶴一羽入、乍詰人之不見所ヲ難有拜見仕申候、此所へ三度計御番ニ罷出申候、此所へハ土州・尾州・此御方迄御番ニテ御座候、去ル九日朝迄ハ、九門之内へ夷服ニテ罷出ル事御法度ニ御座候得共、御座檐下迄モ夷服ニテ、

自由ニ徘徊仕申候事ニテ、時之勢ヒハ誠ニ嚴重物ニ御座候、

十三日早朝交代在營、

十四日朝日ノ御門へ繰入、一昨日之所ニテ御座候処、追付日御門御堅ハ御免被仰付候由、御書付左之通、

薩州

一日之御門并穴門四ヶ所内外

一御台所御門并北之方穴門二ヶ所内外

一参台殿并奏者所之前

一御座檐下詰

右御守衛之儀被免候間、明朝可引払候事、

十二月十三日

五九七ノ一

朝廷御変革大令

御発頭ノ事、

但大令草案於評議所御決定、第一既往ヲ不論、天下

ト共ニ更始一新スルノ儀出ツヘシ、当日議定御方

不殘参内、在京諸侯并重臣召出被示 聞答、

一宮中川様兵備ノ事、

但外門御守衛等ハ嚴重ニ被差備、宮中兵備一切撤ス

慶応3年(1867)

ル筈、

一評議所規則ノ事、

但三職分務参候刻限評決(議脱力)定次第等夫々相定メ、廉ヲ

推シ施行可及候、

一市尹事、

一人材御採用ノ事、

但於評議所広ク天下ノ人材ヲ薦挙召命ノ筈、

一制度改正局ヲ開クノ事、

一今度武家伝奏御役被廢候ニ付テハ、差当候処参与御役

ニ於テ取扱ニ相成候、

但石薬師通一乘院里坊ヲ以仮ニ右役所ニ被設、且参

与役所ト被称候間、是迄武家伝奏取扱ノ廉々、右

役所へ可申出事、

右掛ノ御方々

大原宰相様 萬里小路右大弁宰相様

長谷三位様 岩倉前中將様

橋本少將様

右名前ヲ以可差出事、

右ノ通参与御役所へ被仰渡候条御通達、

十二月十四日